

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 206

# 津 島 遺 跡

中国財務局合同宿舎津島住宅  
建て替えに伴う発掘調査

2 0 0 7

財 務 省 中 国 財 務 局  
岡 山 県 教 育 委 員 会



調査地周辺全景（南西から）

巻頭図版 2



弥生時代の石器・土製品

# 序

合同宿舎津島住宅は、岡山市及び周辺地域に勤務する国家公務員等の職務の能率的な遂行を確保し、もって国等の事務及び事業の円滑な運営に資することを目的として設置されているものです。

合同宿舎津島住宅の一部である今回の敷地には、昭和33年から昭和39年にかけて低層宿舎を建設し宿舎の用に供してきましたが、建設後40年が経過し老朽化が著しく、改修を行っても使用困難な状況となったため、建て替えを計画しているところです。

建て替えにあたっては、市内に点在する小規模老朽宿舎を含めて一体的に集約し、立体化することにより、国有地の効率的な活用を図ることが求められています。

今回の敷地においては、津島遺跡が存在するため、その扱いについて岡山県教育庁と協議を重ねた結果、記録保存のための発掘調査を委託実施することになりました。

その結果、弥生時代中期の集落跡や、弥生時代から古墳時代にわたる水田遺構などが確認され、貴重な成果が得られました。

これらの調査結果を収載した本報告書が、学術研究に寄与するだけでなく、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助になれば幸いと存じます。

なお、この発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位、伊島学区町内会の皆様に多大な御支援・御協力をいただきましたことに対し、改めて厚くお礼を申し上げます次第です。

平成19年 2月

財 務 省

中国財務局長 大久保 和 正

# 序

本報告書には、岡山市いずみ町に所在する津島遺跡の発掘調査結果を収載しました。

津島遺跡は、弥生時代をはじめとする全国的にも著名な遺跡です。なかでも、弥生時代前期の集落跡や水田跡は、わが国での稲作開始期の状況を知る上で重要な資料であるとして、一部が国の史跡に指定されています。

この度、この津島遺跡の南西部にある中国財務局合同宿舎津島住宅の建て替えが行われることになりました。岡山県教育委員会では、遺跡の取り扱いについて関係機関と協議を重ねてまいりましたが、やむなく記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は平成17年度に実施しました。調査の結果、弥生時代中期の集落跡や、この周辺ではこれまであまり明らかでなかった弥生時代中・後期から古墳時代前期の水田遺構が確認されました。

これらの調査成果を収めた本書が、学術研究に寄与できるだけでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば、これに過ぎる喜びはありません。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたりましては、財務省中国財務局、地元の方々をはじめ、関係各位から多大な御指導と御協力を賜りました。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

平成19年 2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本和男

# 例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が中国財務局合同宿舎津島住宅建て替え事業に伴い、中国財務局と岡山県の委託契約に基づき実施した津島遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 津島遺跡は、岡山市いずみ町に所在する。
- 3 確認調査は平成15年度に大橋雅也が担当して実施した。調査面積は30㎡である。全面調査は平成17年度に井上弘・澤山孝之・尾上元規・水田貴士が担当して実施した。調査面積は1,940㎡である。
- 4 本書の作成は平成17年度に実施し、尾上と水田が担当した。
- 5 本書の執筆は大橋・尾上・澤山・水田が担当し、目次に章・節・項ごとの分担を示したが、複数人で分担した箇所については、末尾に文責を付した。全体の編集は尾上が行った。
- 6 土壌サンプルのプラントオパール及び花粉分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。分析結果については報告文を付載に収録した。
- 7 遺物写真の撮影については、江尻泰幸が担当した。
- 8 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標V系の座標北である。図中の座標値および報告書抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

2 遺構および遺物の挿図縮尺は図中に示したが、おおむね次のとおり統一している。

<遺構> 焼成土壙：1/60 火 処：1/20 土 壙：1/30 溝断面：1/30

<遺物> 土 器：1/4 石 器：1/2・1/4 土製品：1/3 玉 類：1/1

3 遺構配置図に示した遺構略称は、次のとおりである。

住：竪穴住居 焼：焼成土壙 火：火 処 土：土 壙

4 遺物番号は通し番号とし、土器以外についてはその材質等により番号の前に次の略号を付して別番号とした。

石器・石製品：S 土製品：C ガラス製品：G

5 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

6 遺構図において、被熱範囲と炭の分布範囲については以下のように示した。

被熱範囲



炭の分布範囲



7 土層断面図の土色は、各調査員の記述に従っており特に統一していない。

8 第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」を複製・加筆したものである。

9 時代・時期区分は一般的なものを用い、特に統一していない。また西暦による年代等を併用した。

# 目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第 1 章 遺跡の位置と環境	1
第 2 章 発掘調査の経緯と経過	5
第 1 節 発掘調査にいたる経緯	5
第 2 節 発掘調査の経過と概要	5
1 確認調査	5
2 全面調査	8
3 報告書の作成	9
4 調査の体制	9
第 3 章 全面調査の概要	11
第 1 節 調査区の概要と基本層序	11
第 2 節 弥生時代の遺構と遺物	13
1 概 要	13
2 焼成土壌	14
3 火 処	14
4 土 壙	15
5 水 田	17
6 溝	18
7 自然流路	21
8 遺構に伴わない遺物	21
第 3 節 古墳時代の遺構と遺物	23
1 概 要	23
2 土 壙	24
3 水 田	24
4 溝	24
5 遺構に伴わない遺物	25
第 4 節 古代の遺物	25

第5節	中世の遺構と遺物	(尾上)	26
1	概要		26
2	溝		26
3	遺構に伴わない遺物		26
第6節	近代の遺物	(尾上)	27
第4章	まとめ		28
第1節	遺構の変遷	(尾上)	28
第2節	津島遺跡南西部の弥生集落と水田	(尾上)	30
第3節	津島遺跡出土の弥生土器	(水田)	32
第4節	玉縁状口縁を有する土器	(水田)	34
付載1	津島遺跡土壌サンプルの自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	39
付載2	遺構一覧表		48
付載3	遺物観察表		49
付載4	新旧遺構名称対照表		52

## 図 版

### 報告書抄録

## 図目次

第1図	遺跡の位置	1	第19図	水田3出土遺物 (1/4・1/2)	18
第2図	周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2	第20図	溝2～溝19 (1/30)	19
第3図	調査区の配置 (1/1,000)	6	第21図	溝出土遺物 (1/4・1/2)	20
第4図	確認調査トレンチ (1/80)	7	第22図	自然流路出土遺物 (1/4)	21
第5図	土壙1 (1/30)	7	第23図	遺構に伴わない遺物① (1/4)	21
第6図	T3 竪穴住居出土遺物 (1/4・1/2)	8	第24図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/2・1/1)	22
第7図	調査区細分図 (1/1,000)	8	第25図	古墳時代の遺構配置図 (1/350)	23
第8図	標準土層図 (1/30)	11	第26図	土壙14 (1/30)	24
第9図	調査区南部東西断面 (1/60)	12	第27図	溝20～29 (1/30)	25
第10図	弥生時代の遺構配置図 (1/350)	13	第28図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)	25
第11図	焼成土壙 (1/60) ・出土遺物 (1/4・1/3)	14	第29図	古代の遺物 (1/4)	25
第12図	火処1 (1/20) ・出土遺物 (1/4)	14	第30図	中世の遺構配置図 (1/700)	26
第13図	火処2 (1/20)	15	第31図	中世の遺物 (1/4)	26
第14図	土壙2 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	15	第32図	遺構の変遷 (1/700)	29
第15図	土壙3 (1/30)	15	第33図	津島遺跡南西部における弥生時代 集落の推定分布 (1/3,000)	31
第16図	土壙4～土壙12 (1/30)	16	第34図	弥生土器の編年 (1/12)	33
第17図	土壙13 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	17	第35図	玉縁状口縁の器種組成 (1/12)	34
第18図	水田1・水田2・足跡状痕跡 (1/200・1/20)	18	第36図	口縁端部分類図	35
			第37図	遺跡分布図	35

## 表目次

第1表	関連調査一覧	10	第3表	岡山県出土の玉縁状口縁土器一覧	37
第2表	文化財保護法に基づく提出書類一覧	10			

## 写真目次

写真1	半田山遠景 (南から)	3	写真3	焼夷弾信管 (左) と炸薬筒 (右)	27
写真2	津倉古墳遠景 (北から)	3	写真4	現地説明会 (2005.7.16)	27

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1 調査地周辺全景（南西から）

巻頭図版 2 弥生時代の石器・土製品

## 図版目次

図版 1 調査地周辺全景（南西から）

図版 2 調査区南部微高地と低位部  
（南から）

図版 3 1 焼成土壙（北東から）

2 土壙 2（南東から）

3 土壙 4（南から）

4 土壙10（東から）

5 土壙12（北西から）

図版 4 1 水田 1（北東から）

2 水田 2（北東から）

図版 5 水田 3（北西から）

図版 6 1 足跡状痕跡（南東から）

2 溝 3（北東から）

3 溝 4（西から）

4 溝19（南東から）

図版 7 1 溝 9・11（北東から）

2 溝 9 底面の鋤痕跡（北東から）

3 溝 7（北から）

図版 8 水田 5（南東から）

図版 9 弥生土器

図版10 1 土製品

2 石 鏃

3 その他の石器

# 第1章 遺跡の位置と環境

津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町の県総合グラウンドを中心に位置し、岡山県三大河川の一つである旭川の下流域西岸にあたる。北を半田山、西を京山、東を旭川に囲まれた、東西幅2kmほどの沖積平野にあり、現在は岡山市街の北端をなしている。かつては南方数kmまで海が迫っていたであろう。また、この平野にはかつて旭川の流れがいく条も南流し、その河川間の微高地が、弥生時代や古墳時代における生活の舞台となったようである。

このたび報告する運びとなった発掘調査地点は、この平野の中央やや西よりで、県総合グラウンドの南西に隣接する場所である。

津島遺跡の周辺では、旧石器時代にさかのぼる明確な遺跡は確認されておらず、田益田中遺跡でわずかにその時代のナイフ形石器が出土している<sup>(1)</sup>程度である。

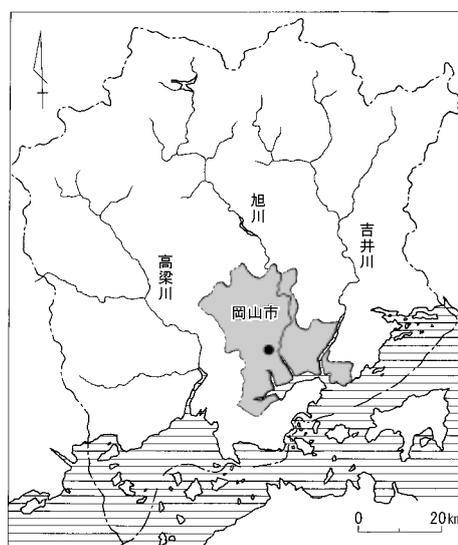
縄文時代になると、この周辺でも人々の生活の痕跡がうかがえるようになる。縄文時代の遺跡では、半田山南麓に位置する津島岡大遺跡<sup>(2)</sup>と朝寝鼻貝塚<sup>(3)</sup>がよく知られている。前者は縄文時代中期から晩期まで、後者は前期から後期までの遺物が出土しており、集落遺構も確認されている。また、朝寝鼻貝塚では縄文時代前期の層から稲のプラントオパールが検出され、日本列島における稲作の開始期をめぐって注目を集めた。

弥生時代に入ると本格的な稲作が開始されるが、津島遺跡周辺では、畦畔で区画された弥生時代前期の水田遺構が広大な面積にわたって検出されている。用排水路も備えており、高い技術をうかがうことができる。同時期の集落跡は、小規模ながら津島遺跡の中心部で確認されており<sup>(4)</sup>、稲作が本格的に開始された時期の集落および水田の様子を伝える重要な遺跡であるとして、一部が国の史跡に指定されている（1971年指定、2002年追加指定）。

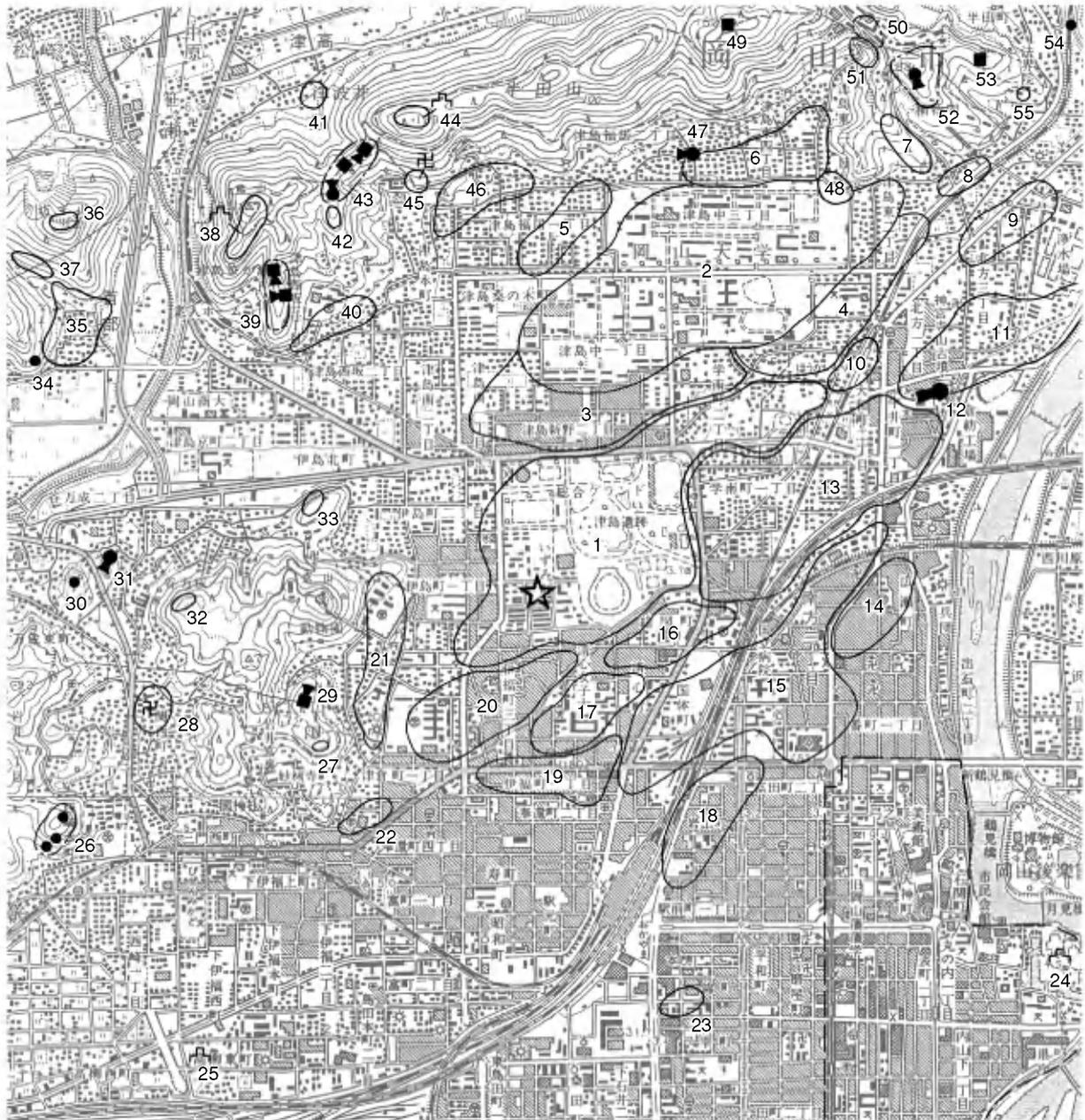
弥生時代中期の遺跡は、津島遺跡より南側に多く見られる。南方遺跡は大規模な集落遺跡で、竪穴住居や土壙墓などの遺構が確認されたほか、河道からは精巧な細工をもつ多種多様な木製品が出土した<sup>(5)</sup>。上伊福九坪遺跡でも多数の遺構・遺物が発見されている<sup>(6)</sup>。また津島遺跡でも、この時期の竪穴住居や土壙墓が確認されている<sup>(7)</sup>。

弥生時代後期には集落域がさらに拡大し、周辺の多くの遺跡で集落跡が確認されている。津島遺跡でも多数の竪穴住居などが検出されており、また、陸上競技場改修に伴う発掘調査では河道から建築部材をはじめとする多量の木製品が出土し<sup>(8)</sup>注目された。南方遺跡では人骨の遺存する土壙墓や土器棺墓が検出され<sup>(9)</sup>、住居の周辺に墓域が形成されていたようである。

古墳時代の集落は、津島遺跡<sup>(10)</sup>、津島江道遺跡<sup>(11)</sup>などで知られているが、一方、周辺の丘陵上を中心に、弥生時代末から古墳時代前半期の墳墓が点々と築かれている。弥生墳丘



第1図 遺跡の位置



- |              |           |              |              |             |
|--------------|-----------|--------------|--------------|-------------|
| 1 津島遺跡他      | 2 津島岡大遺跡他 | 3 津島新野遺跡     | 4 津島江道遺跡     | 5 散布地       |
| 6 津島東遺跡      | 7 散布地     | 8 鍵田遺跡       | 9 三野宮之段遺跡    | 10 散布地      |
| 11 北方長田遺跡    | 12 神宮寺山古墳 | 13 北方地藏遺跡他   | 14 広瀬遺跡      | 15 南方遺跡他    |
| 16 絵図遺跡      | 17 上伊福遺跡  | 18 集落跡       | 19 上伊福(立花)遺跡 | 20 伊福定国前遺跡他 |
| 21 上伊福西遺跡他   | 22 津倉遺跡   | 23 散布地       | 24 岡山城跡      | 25 高柳城跡     |
| 26 関西高校裏山古墳群 | 27 妙林寺遺跡  | 28 石井廃寺      | 29 津倉古墳      | 30 十二本木塚古墳  |
| 31 青陵(青ばか)古墳 | 32 散布地    | 33 古墳か?      | 34 古墳        | 35 散布地      |
| 36 坊主山遺跡     | 37 散布地    | 38 烏山城(笹ヶ迫城) | 39 七つ塊墳墓群    | 40~42 散布地   |
| 43 都月坂墳墓群    | 44 半田山城   | 45 寺跡        | 46 津島福居遺跡    | 47 お塚様古墳    |
| 48 朝寝鼻貝塚     | 49 ダイミ山古墳 | 50 墳墓群       | 51 津島東三丁目遺跡  | 52 一本松古墳群   |
| 53 不動堂古墳     | 54 古墳     | 55 道讚禪定門石燈籠  |              | ☆ 調査地点      |

※各遺跡の位置・範囲と名称は『改訂 岡山県遺跡地図』（岡山県教育委員会2003）に基づくが、一部を簡略化して表示した。

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



写真1 半田山遠景（南から）



写真2 津倉古墳遠景（北から）

墓としては都月坂2号墓<sup>(12)</sup>が著名である。長辺約20mの長方形の墳丘をもち、竪穴式石槨内には木棺が遺存していた。また、七つ塚墳墓群の南端（10号地点）にも弥生時代後期の土壙墓・土器棺墓群が確認されている<sup>(13)</sup>。

前期古墳としては、墳長約48mの前方後方墳である七つ塚1号墳<sup>(14)</sup>、墳長約33mの前方後方墳である都月坂1号墳<sup>(15)</sup>、墳長約38mの前方後方墳である津倉古墳<sup>(16)</sup>、墳長約50mの前方後円墳といわれる青陵古墳<sup>(17)</sup>などがあり、重要な前期古墳が著しく集中する地域といえる。

つづく前期末から中期の古墳としては、農工具・武器など100点を超える鉄器を出土した墳長約150mの前方後円墳、神宮寺山古墳<sup>(18)</sup>や、甲冑・槍・鍛冶具を副葬した前方後円墳、一本松古墳<sup>(19)</sup>がある。また、内容の詳細は不明だが、半田山山頂の方墳、ダイミ山古墳や、鏡・甲冑・武器等を出土した半田山南麓の前方後円墳、お塚様古墳<sup>(20)</sup>も同様の時期であろう。

古墳時代後半期になると、集落遺跡は継続する一方で、古墳はほとんど見られなくなる。半田山丘陵を北へ越えた津高地域<sup>(21)</sup>などに墓域を移したのであろう。

古代以降、津島遺跡とその周辺一帯は水田化した。古代の水田遺構は明確でないが、条里に関連する溝などの遺構が確認されている。集落遺跡としては、倉庫と考えられる総柱建物などが検出された津島江道遺跡<sup>(22)</sup>や、「鹿田庄」に比定される鹿田遺跡<sup>(23)</sup>などがある。鹿田遺跡では掘立柱建物や井戸が発見されている。

中・近世においても、津島遺跡周辺には広範囲に水田層が認められ、さらに水田化が進んだものと思われる。中世の集落跡としては、伊福定国前遺跡<sup>(24)</sup>や鹿田遺跡があり、掘立柱建物や井戸、溝などが検出されている。中世後期には半田山山塊に烏山城（笹ヶ迫城）、半田山城といった山城が築かれ、中世末には旭川岸に岡山城の築城と城下町の形成が始まる。

主に穀倉地帯として機能した津島遺跡周辺は、1907年に旧陸軍第17師団が設置されることにより、陸軍の練兵場へと変貌した。戦後には都市計画事業で運動公園（現総合グラウンド）が整備され、また半田山南麓には岡山大学が設置されて今日に至っている。周辺は市街地化が著しく、かつての水田風景は消滅しつつある。

## 註

(1) 柳瀬昭彦編「田益田中（国立病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 1999

(2) 小林青樹ほか「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査

第1章 遺跡の位置と環境

研究センター 1998

- (3) 富岡直人ほか「岡山市津島東3丁目 朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告』2 1998
- (4) 考古学研究会「岡山県津島遺跡保存の訴えと遺跡の概要」『考古学研究』58 1968  
近藤義郎「津島遺跡と武道館事件」『岡山史学』第22号 1968  
岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』1970  
平井勝編「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 2000  
氏平昭則編「津島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 2001  
岡本泰典編「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004
- (5) 扇崎由・安川満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）I・II」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994（平成6）年度・1995（平成7）年度 岡山市教育委員会 1996・1997  
扇崎由『南方（済生会）遺跡－木器編－』岡山市教育委員会 2005
- (6) 中野雅美・根木修「上伊福九坪遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 1986
- (7) 團奈歩編「津島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190 2005
- (8) 島崎東・岡本泰典・時實奈歩ほか「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 2003
- (9) 註4 文献
- (10) 註6 文献など
- (11) 草原孝典「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平成8）年度 岡山市教育委員会 1998
- (12) 近藤義郎「都月坂2号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻 考古資料 1986
- (13) 近藤義郎・新納泉「半田山丘陵七つ塚古墳群7号墳および10号地点の発掘」『都市近郊林（半田山）の自然特性およびその環境保全機能に関する研究（Ⅲ）』昭和63年度岡山大学教育研究学内特別経費研究成果報告書 1989
- (14) 近藤義郎・高井健司編『七つ塚古墳群』七つ塚古墳群発掘調査団 1987
- (15) 近藤義郎「都月坂1号墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 1986
- (16) 乗岡実「津倉古墳」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編 山川出版社 1991
- (17) 永山卯三郎「伊島大字万成」『岡山市史』第1巻 1936  
安川満「片山古墳と津倉古墳」『吉備の古墳』上 吉備考古ライブラリィ・4 吉備人出版 2000
- (18) 鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山市史』古代編 1962
- (19) 近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 1986
- (20) 近藤義郎「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」『古代吉備』第10集 1988
- (21) 乗岡実「津高の古墳」『吉備の古墳』上 吉備考古ライブラリィ・4 吉備人出版 2000
- (22) 高畑知功「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18 1988
- (23) 山本悦世ほか「鹿田遺跡1～4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3・4・6・11冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988・1990・1993・1997
- (24) 杉山一雄編「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125 1998  
金田善敬編「伊福定国前遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』188 2005

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査にいたる経緯

岡山市いずみ町1-21に所在する中国財務局合同宿舎津島住宅は、1980年代に一部が建て替えられたが、敷地の北東に位置する9棟については築後40年以上が経過し老朽化が著しいことなどから、建て替えの計画が出てきた。

付近には重要な遺跡である津島遺跡が広がっているため、その取り扱いについて、平成14年度に中国財務局岡山財務事務所と県教育委員会との間で慎重な協議が行われた。その結果、事前に対象地の確認調査を実施し、遺跡の状況を把握することになった。対象地内には既存の建物等があり入居者もあったため調査条件には制約が多かったが、平成15年5月、4か所のトレンチによる確認調査を実施した。

確認調査の結果、一部で弥生時代の竪穴住居や袋状土壙などの遺構を検出し、津島遺跡の広がりも確認された。しかしながら、建築計画の変更は困難であることから、協議の結果、全面調査が必要との結論に達した。平成16年末、中国財務局岡山財務事務所長から文化財保護法第57条の3（現94条）に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され（平成16年12月17日付、岡財統第620号）、県教育委員会教育長から、工事着手前に発掘調査を実施し、さらに調査の結果重要な遺構等が発見された場合はその保存等について別途協議する旨の通知がなされた（平成17年12月22日付、教文埋第1061号）。

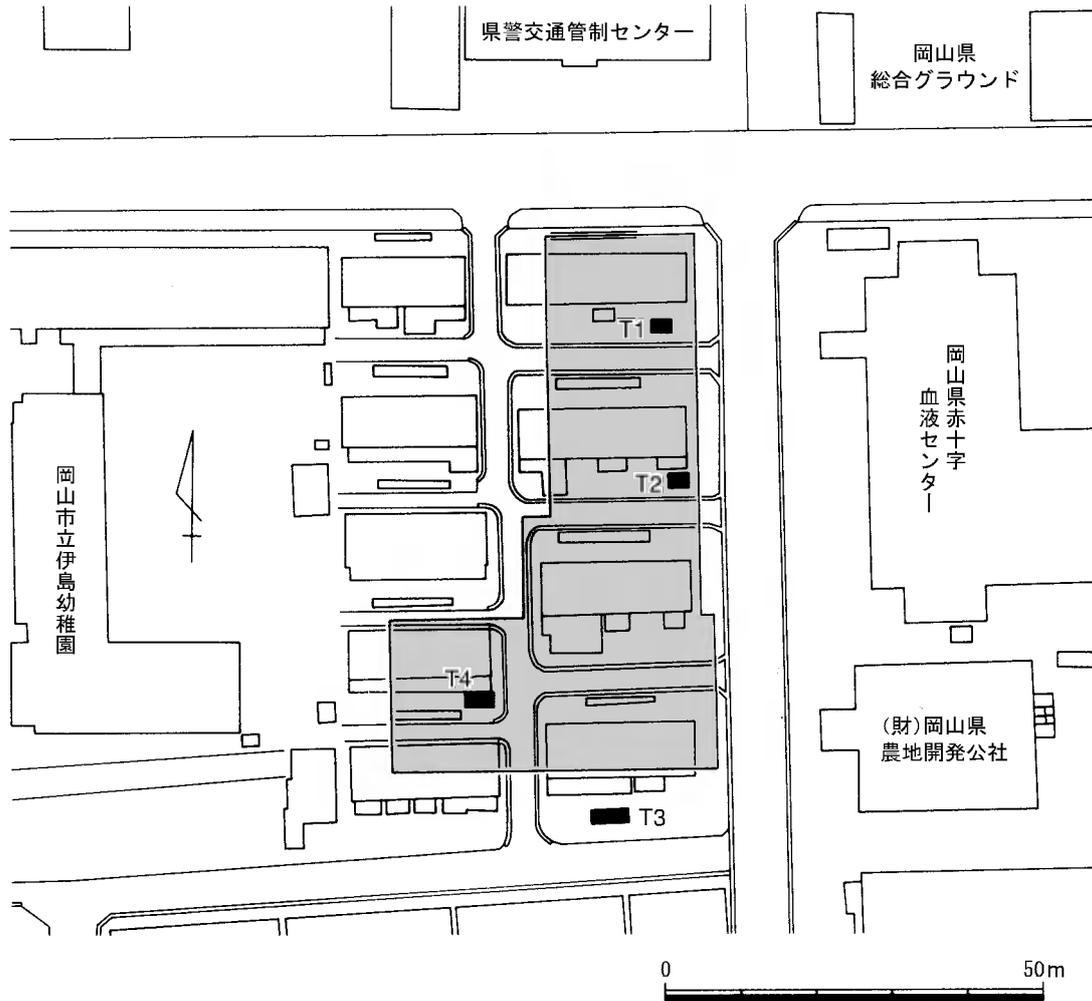
これを受け、平成17年4月1日、中国財務局総務部長と岡山県知事との間で埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約を締結、県古代吉備文化財センターによって全面調査に着手する運びとなった。

### 第2節 発掘調査の経過と概要

#### 1 確認調査

確認調査は平成15年5月6日から5月19日にかけて、詳細な遺跡の内容を把握するために行った。実際の調査日数は8日間である。調査は、現住宅を避け、入居者に影響のない箇所を選択し、第3図に示すように3×2mのトレンチを2か所、4×2mのトレンチを1か所、5×2mのトレンチを1か所の計4本を設定し実施した。調査面積は30㎡である。いずれのトレンチも現地地表下約100cmまでが明治以降の造成土であり、これについては重機で掘削を行った。

調査の結果、最北端のT1では海拔240cmで明治期に行われた造成以前の水田層を確認し、以下厚さ約50cmにわたり古墳時代以降の複数枚の水田層を検出した。また、海拔180cmでは弥生時代後期以降の洪水砂と推測される砂層（第4図9層、以下同）を確認した。この下位には、数枚の水平堆積層があり、海拔110cmにおいて黒色粘土層（16層）、さらにその下位に灰色粘土が堆積している状況を把握した。

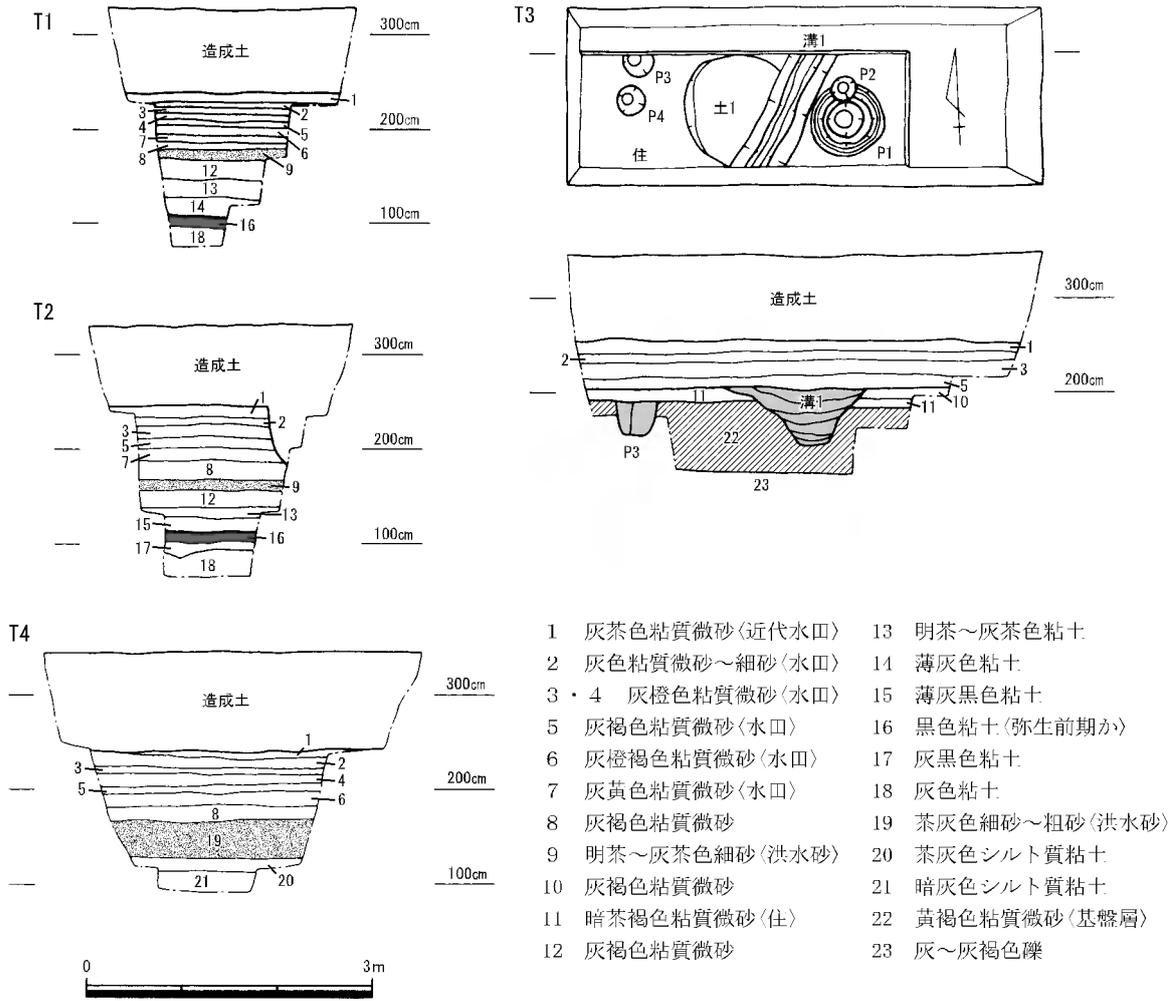


第3図 調査区の配置 (1/1,000)

T2は、基本的にはT1と同様の堆積状況を示し、洪水砂層（9層）を海拔170cm、黒色粘土層（第16層）を海拔110cmで確認した。

T3では、海拔200cmで弥生時代中期後半の遺物を多く包含する暗茶褐色粘質微砂層（11層）を検出した。海拔180cmでの床面貼り床層、中央穴、柱穴等の確認からこの層位が竪穴住居の埋土であり、トレンチ調査範囲全体が弥生時代中期後半の竪穴住居内であると判断された。この竪穴住居の平面形は不明である。柱穴は3か所確認したが、このうちP3とP4が住居の主柱穴を構成するものと思われるが、同時併存ではなく、建て替えによるものと考えている。中央穴は周囲を幅20cm、径80cmほどの土手状に盛り上げた深さ51cmを測るもので、炭・焼土で埋没している。この中央穴は複数回の補修が施されていたようで、黄褐色の貼り床層が複数枚確認された。また、4の高杯はこの中央穴からほぼ完形で出土している。このほかの出土遺物として1～3の壺とS1の打製石包丁を図示した。

また、この竪穴住居に後出する溝1と土壙1を検出した。溝1は幅150cm、深さ60cmを測る。層位関係から弥生時代後半以降の時期と考えられる。土壙1は、竪穴住居の床面上で検出したもので、最大径126cm、深さ60cm、底面の海拔高は105cmを測る。平面形はやや歪な円形を呈し、断面形はやや下部が膨らむいわゆる袋状をなす。出土遺物はないが、竪穴住居との関係から弥生時代中期後半から後期前半にかけての遺構と推測される。



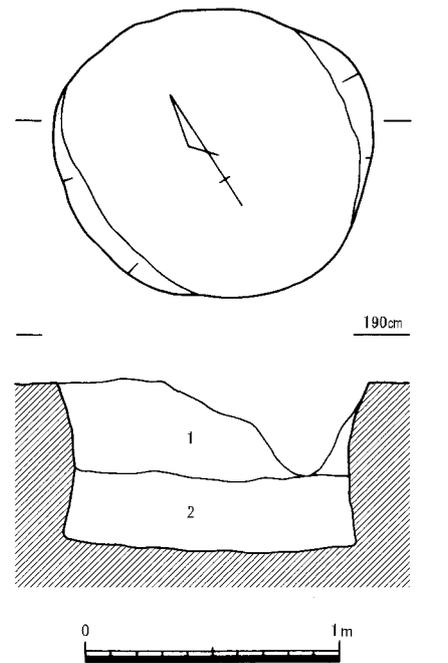
第4図 確認調査トレンチ (1/80)

これらの弥生時代の遺構は黄褐色粘質微砂の微高地基盤層上に形成されている。この基盤層の下位、海拔110cmには礫層があり、微高地の中核をなすものと判断された。

T 4では、海拔165cmで洪水砂（19層）が厚く堆積しており、これ以下は他のいずれのトレンチとも異なる堆積状況を示し、黒色粘土層も確認されなかった。

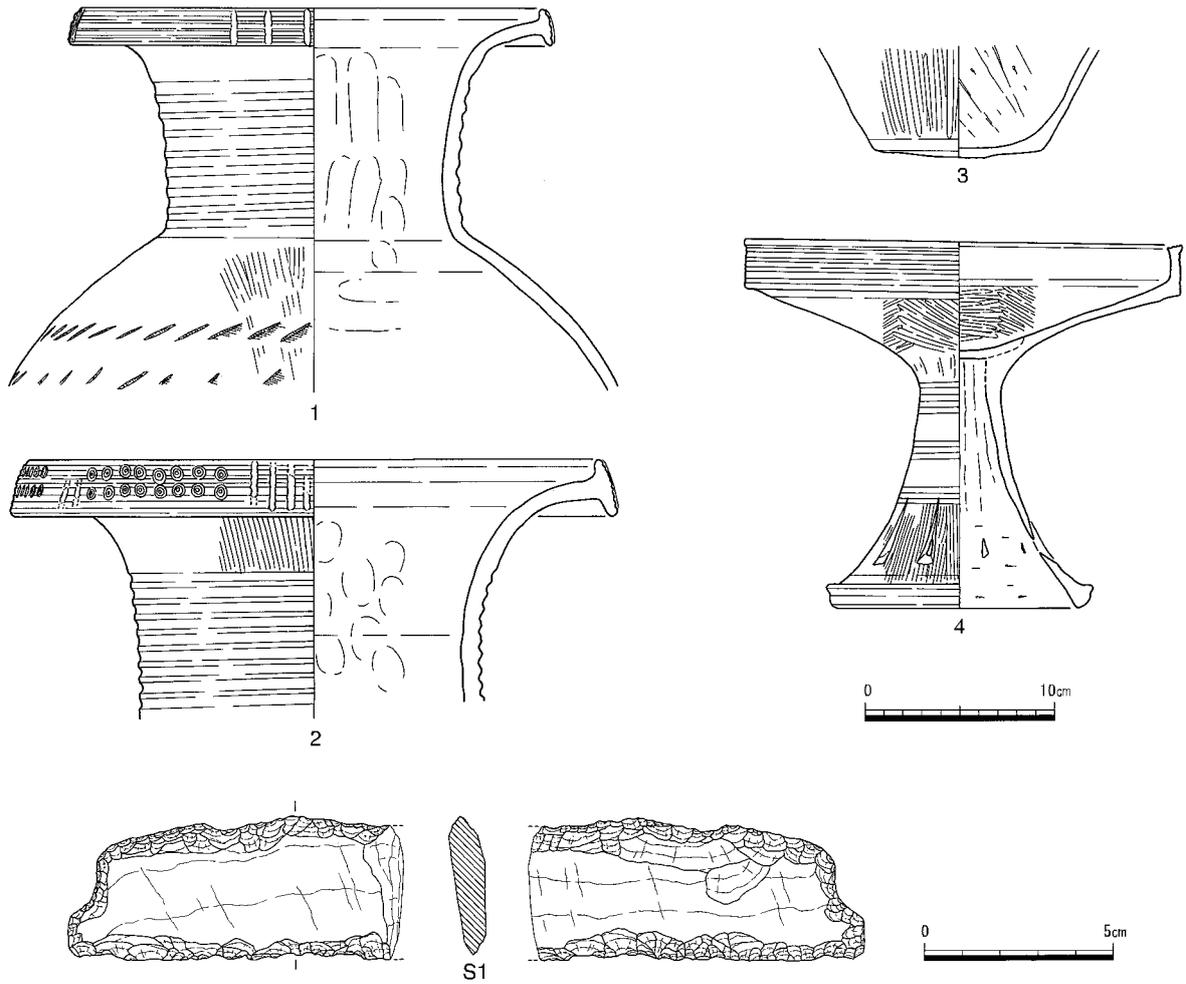
以上の所見から、T 3周辺には微高地が広がり、弥生時代中期後半を主体とする集落遺跡が展開するものと想定される。なお、この微高地はこれまでの周辺の調査所見を勘案すると調査地から南方に広がるものと思われる。また、T 1・T 2で確認された黒色粘土層（16層）は岡山県総合グラウンド一帯で確認されている縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色土層に対応するものと考えられるが、水田層かどうかは不明であった。また、T 4ではこの黒色粘土層も確認されず、さらなる低位部か、あるいは河道の堆積の可能性も想定された。

(大橋)



1 暗褐色粘質土 2 灰褐色粘質土(木炭含む)

第5図 土壇 1 (1/30)



第6図 T3 竪穴住居出土遺物 (1/4・1/2)

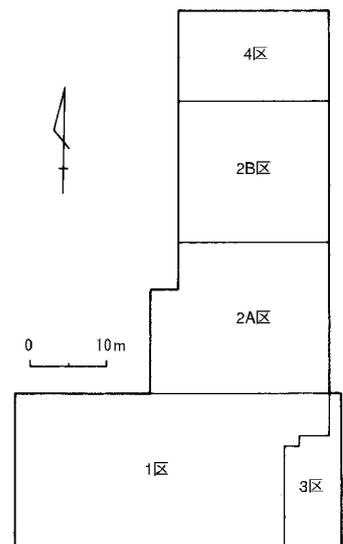
## 2 全面調査

確認調査の成果を受け、協議の結果、建築面積の全域を全面調査の対象とすることになった。

当初の計画では、調査期間が平成17年4月～9月、調査面積1,450㎡であったが、調査中に設計変更があり北側に130㎡を追加、合わせて1,580㎡となった(1区・2A区・2B区)。担当調査員は4月～6月が2名、7月～9月が3名である。

また、9月末に発掘調査を終了して間もなく、再び設計変更の協議がなされ、南東隅部分と北端部分の2か所、計360㎡の追加調査が必要になった(3区・4区)。追加調査は平成18年1月～2月の期間に、調査員2名で行った。

発掘作業の工程としては、4月に調査準備と重機による上層の掘削を行い、5月から本格的な発掘作業を開始した。5月～7月で1区を、8月で2A区を、9月で2B区を調査した。追加調査は1月に3区を、



第7図 調査区細分図 (1/1,000)

2月に4区を調査し、完了した。

なお、1区の調査が終盤を迎え、弥生時代中期の集落跡が明らかになってきた平成17年7月16日、近隣の住民を対象に現地説明会を開催し、約110名の参加者があった。

また、平成17年7月22日にはラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行っている。

### 3 報告書の作成

当初は、発掘調査終了後の平成17年10月～平成18年3月の6か月間で整理作業を行う予定であったが、追加調査が必要になったため、平成18年1～2月の2か月間は整理作業を休止し、3月に整理作業を再開、3月末には完了する計画に変更された。担当調査員は10～12月が1名、3月が2名である。

平成17年10月から整理作業を開始、12月末には4月～9月調査分の整理をほぼ終了した。1～2月調査分については3月に整理を行い、3月末には原稿の執筆まですべての作業を完了した。

### 4 調査の体制

#### 平成15年度（確認調査）

##### 岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

##### 岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

##### 文化財課

課長 西山 猛

課長代理 田村 啓介

課長補佐(埋蔵文化財係長) 平井 泰男

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

文化財保護参事 松本 和男

##### <総務課>

課長 中田 哲雄

課長補佐(総務係長) 笏本 弘忠

主任 小坂 文男

##### <調査第一課>

課長 岡田 博

課長補佐(第一係長) 光永 真一

文化財保護主査 大橋 雅也  
(調査担当)

#### 平成17年度（全面調査・報告書作成）

##### 岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

##### 岡山県教育庁

教育次長 釜瀬 司

##### 文化財課

課長 芦田 和正

参事 田村 啓介

総括副参事(埋蔵文化財班長) 平井 泰男

主任 小林 利晴

主事 金出地敬一

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男

次長(総務課長) 内田 猛

参事 平松 郁男

参事 高畑 知功

##### <総務課>

総括副参事(総務班長) 若林 一憲

主任 小川 紀久

##### <調査第三課>

課長 中野 雅美

総括副参事(第二班長) 山磨 康平

副参事 井上 弘  
(調査担当)

主査 澤山 孝之

第2章 発掘調査の経緯と経過

主 任	(調査担当)	主 事	水田 貴士 (調査・報告書担当)
	尾上 元規 (調査・報告書担当)		

第1表 関連調査一覧

年度	調査種別	調査担当者	調査期間	面積 (㎡)	遺物数 (箱)
H15	確認調査	大橋雅也	H15.5.6～H15.5.19	30	2
H17	全面調査	井上 弘・澤山孝之・尾上元規	H17.4.1～H17.9.30	1,580	33
	全面調査	尾上元規・水田貴士	H18.1.1～H18.2.28	360	15
計				1,970	50

第2表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告 (第99条)

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積(㎡)	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期 間
岡吉調 第84号 H15.5.23	周知	集落跡・水田 津島遺跡	岡山市いづみ町	30	集合住宅	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	大橋雅也	H15.5.6～H15.5.19

埋蔵文化財発掘の通知 (第94条)

岡山県文書 番号 日付	種類及び名称	所在地	面積(㎡)	目的	主体者	期 間	処理の内容・理由
教文理 第1061号 H16.12.22	集落跡 津島遺跡	岡山市いづみ町 1-21	約1,600	集合住宅	中国財務局 岡山財務事務所	H19.4頃～H21.3頃	・工事着手前に発掘調査を実施する。 ・調査の結果重要な遺構等が発見された場合は別途協議する。

発掘調査の報告 (第99条)

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積(㎡)	目的	主体者	担当者	期 間
岡吉調 第63号 H17.4.27	集落跡 津島遺跡	岡山市いづみ町 1-21	1,450	集合住宅	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	井上 弘 澤山孝之 尾上元規	H17.4.1～H17.9.30
岡吉調 第9001号 H18.1.4	集落跡・水田 津島遺跡	岡山市いづみ町 1-21	360	集合住宅	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	尾上元規 水田貴士	H18.1.1～H18.2.28

埋蔵文化財発見通知 (第100条)

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第230号 H15.5.26	弥生土器・土師器・ 須恵器・石器 計2箱	岡山市いづみ町 津島遺跡	H15.5.7～ H15.5.19	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	財 務 省	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第717号 H17.10.4	土器(弥生土器・土師器・ 須恵器・中近世陶磁器) 石器(石鏃・石包丁等) 土製品(分銅形土製品等) 金属器(鉄釘等) ガラス製品(小玉) 計33箱	岡山市いづみ町 1-21 津島遺跡	H17.4.1～ H17.9.30	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	財 務 省	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第1252号 H18.3.3	土器(弥生土器・土師器・ 須恵器・中近世陶磁器) 石製品(石鏃・石包丁・ 石斧・管玉等) 土製品(分銅形土製品・ 人形土製品等) 金属器(鉄釘等) 計15箱	岡山市いづみ町 1-21 津島遺跡	H18.1.1～ H18.2.28	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	財 務 省	岡山県古代吉備文化財センター

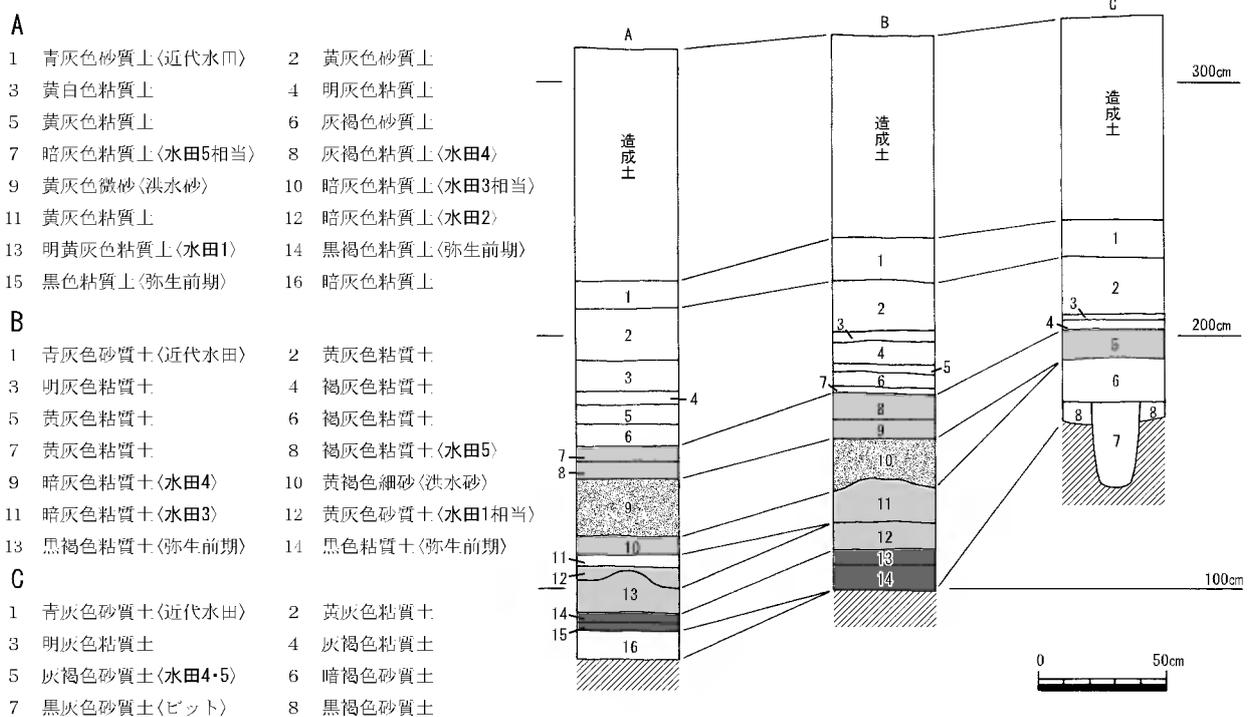
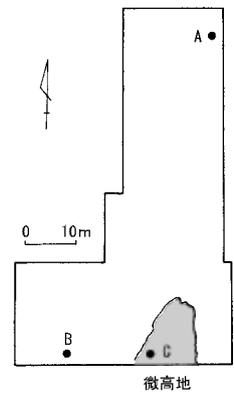
# 第3章 全面調査の概要

## 第1節 調査区の概要と基本層序

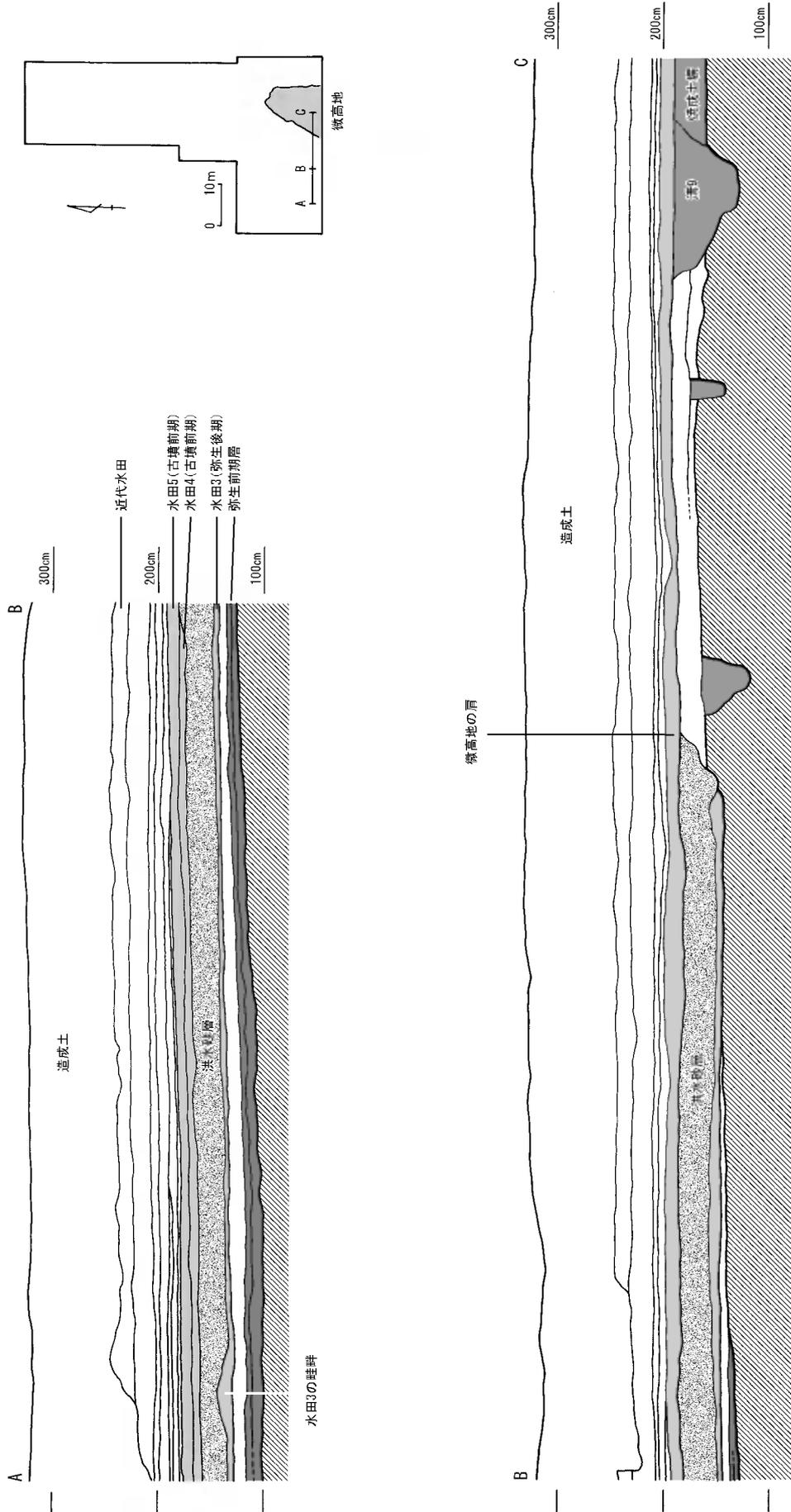
調査区の南東隅には弥生時代の微高地があり、弥生時代中期には集落が営まれた。その他の部分は低位部で、主に水田として利用されたようである。

微高地域では、基盤層の上に厚さ数10cmの包含層（C-6・8層）が堆積している。遺構は基盤層上面から切り込むもの、包含層の途中から切り込むものがあり、時期差がある。包含層より上層では、古墳時代以降の水田層が続き、低位部の状況と大差ない。

低位部では、基盤層上に、周辺に広く見られる黒色土層（A-14・15層、B-13・14層）があり、弥生時代前期水田層の可能性はあるが、畦畔等は確認されなかった。その上位には弥生時代中期の水田層（A-12・13層、B-12層）、弥生時代後期の水田層（A-10層、B-11層）があり、畦畔が検出された。弥生時代後期の水田層は厚さ20~30cmの洪水砂層（A-9層、B-10層）に覆われている。この直上には、古墳時代前期と考えられる水田層（A-7・8層、B-8・9層、C-5層）があり、畦畔が検出された。これより上層は古墳時代後期以降、近代にいたる水田層が続くが、畦畔は確認されなかった。近代水田層（1層）の上には、旧陸軍練兵場に伴う造成土層がある。



第8図 標準土層図 (1/30)



第9図 調査区南部東西断面 (1/60)

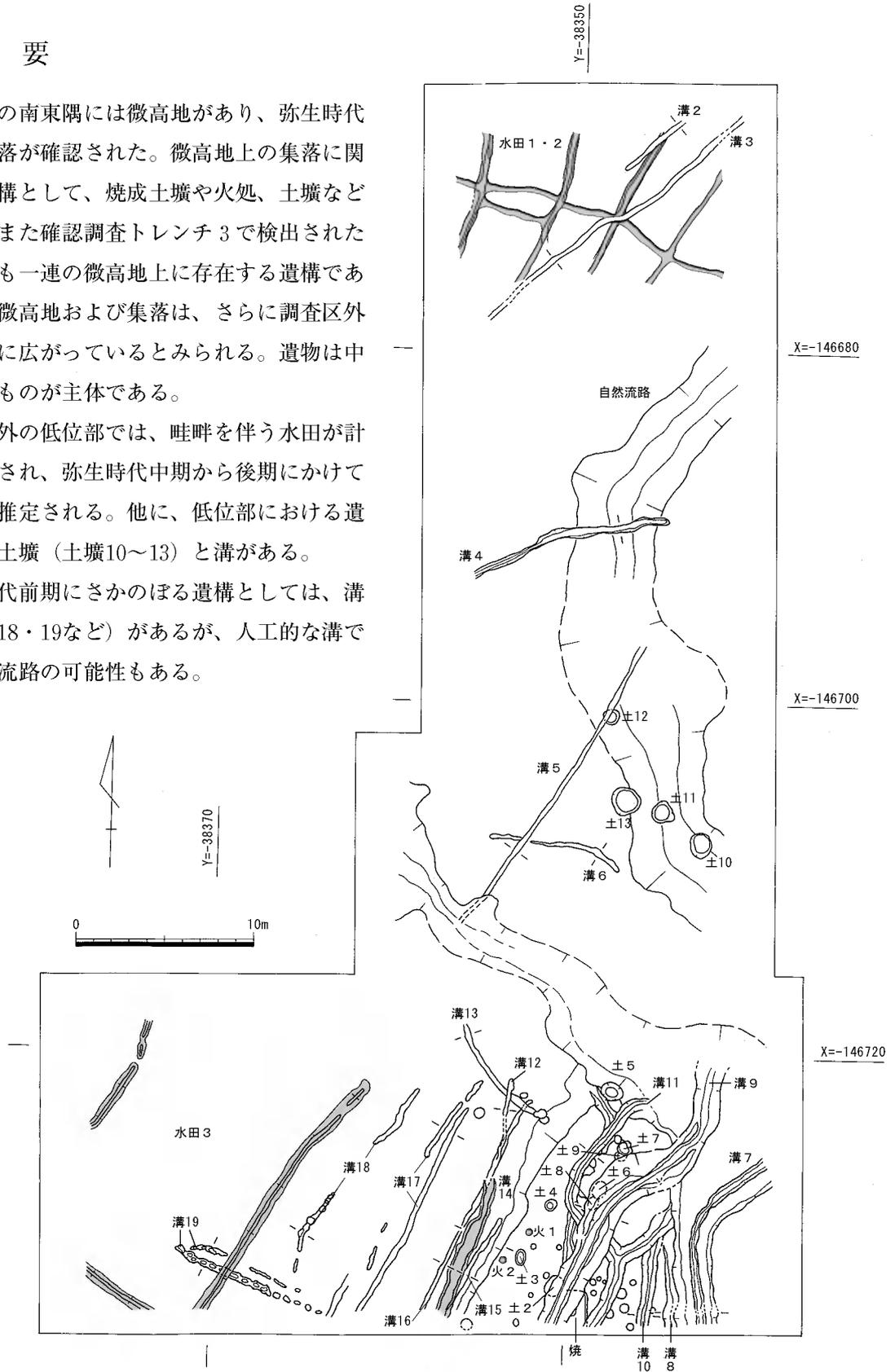
## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

### 1 概要

調査区の南東隅には微高地があり、弥生時代中期の集落が確認された。微高地上の集落に関連する遺構として、焼成土壌や火処、土壌などがあり、また確認調査トレンチ3で検出された竪穴住居も一連の微高地上に存在する遺構である。この微高地および集落は、さらに調査区外の南方向に広がっているとみられる。遺物は中期後半のものが主体である。

微高地外の低位部では、畦畔を伴う水田が計3面検出され、弥生時代中期から後期にかけての水田と推定される。他に、低位部における遺構として土壌（土壌10～13）と溝がある。

弥生時代前期にさかのぼる遺構としては、溝数条（溝18・19など）があるが、人工的な溝でなく自然流路の可能性もある。



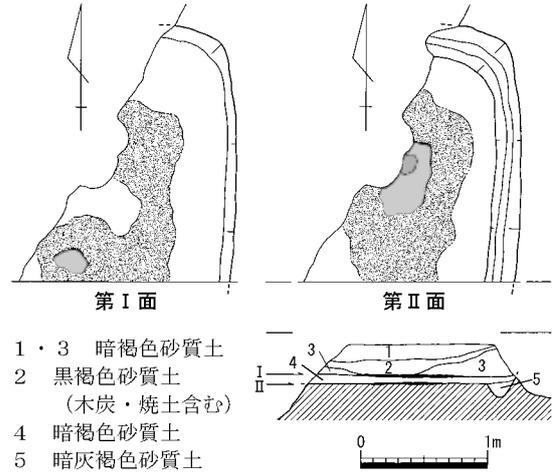
第10図 弥生時代の遺構配置図 (1/350)

## 2 焼成土壙 (第11図)

微高地上の調査区南端にある。掘り方は平面方形で壁体溝も伴い、竪穴住居に類似するが規模は小さい。南は調査区外に広がり、西は溝9に破壊されているため正確な規模が不明だが、溝9の対岸には及ばないことから、木炭の散布域を中心とする南北3m、東西2m前後の規模であろう。

床面には被熱と木炭の散布が認められるが、上下2面があり、厚さ5cmほどの間層(第4層)を挟む。

推定される床面規模などから、住居ではなく何らかの焼成施設と推定した。遺物は弥生時代中期後葉の土器と分銅形土製品C1がある。



- 1・3 暗褐色砂質土
- 2 黒褐色砂質土  
(木炭・焼土含む)
- 4 暗褐色砂質土
- 5 暗灰褐色砂質土

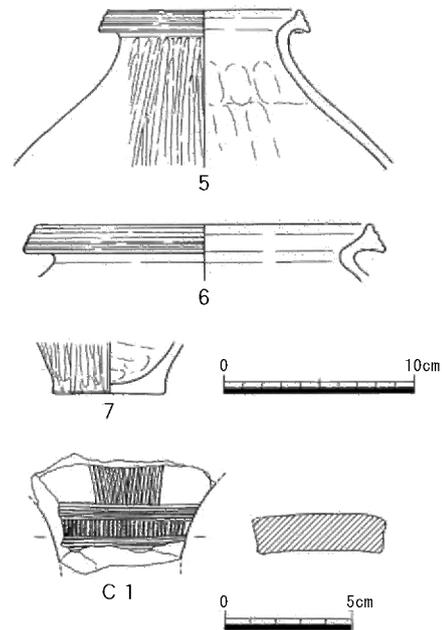
## 3 火処

### 火処1 (第12図)

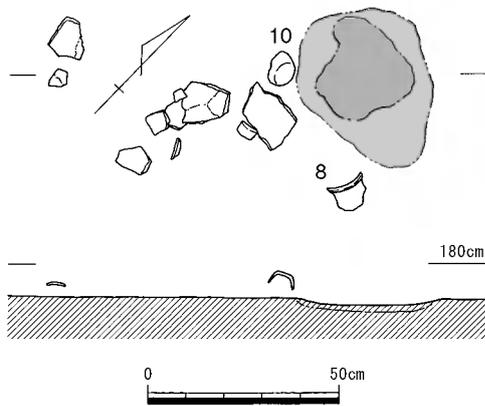
調査区南部、微高地の肩近くにある。径約35cmの円形でわずかに掘り窪められ、被熱する。周辺に住居を構成するような柱穴や壁体溝はなく、屋外炉と推定される。出土土器から、中期中葉ないし後半の遺構であろう。

### 火処2 (第13図)

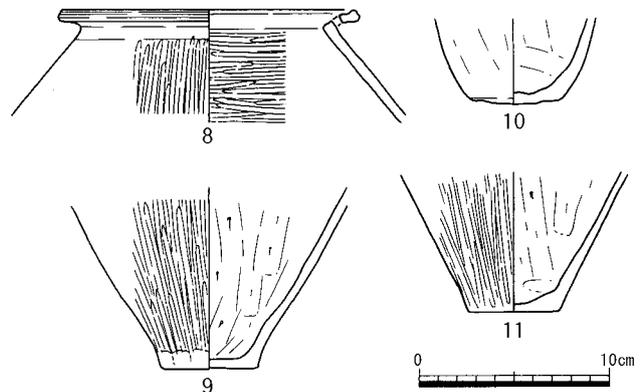
調査区南部、微高地の肩近くで、炉2との距離は約2mである。径約50cmの範囲が被熱し、南端20~30cmの範囲が特に顕著であった。掘り込みは認められない。炉2と同様、屋外炉であろう。遺物はないが、検出状況から弥生時代中期と推定される。



第11図 焼成土壙 (1/60)・  
出土遺物 (1/4・1/3)



第12図 火処1 (1/20)・出土遺物 (1/4)



#### 4 土 壙

##### 土壙 2 (第14図)

調査区南部の微高地上で検出した。東側を溝9に切られているが、底面は大部分が残っている。平面形は歪んだ隅丸方形で、長さ約130cm、短辺約100cm、深さ約40cmである。壁は垂直に近く底面は平坦である。遺物は弥生土器の小片が出土したのみだが、弥生時代中期の遺構と考えられる。(尾上)

##### 土壙 3 (第15図)

調査区南部、微高地の肩近くで検出した浅い土壙である。平面形は楕円形で、長軸を南北に向ける。長径約90cm、短径約55cm、深さ約10cmである。遺物はないが、周辺の状況から弥生時代中期の遺構と推定される。(尾上)

##### 土壙 4 (第16図)

調査区南部、微高地の肩付近で検出した。径約60cmの円形で、深さ30cm、壁は垂直で上部がやや開く。遺物はないが、周辺の状況から弥生時代中期の遺構と推定される。(尾上)

##### 土壙 5 (第16図)

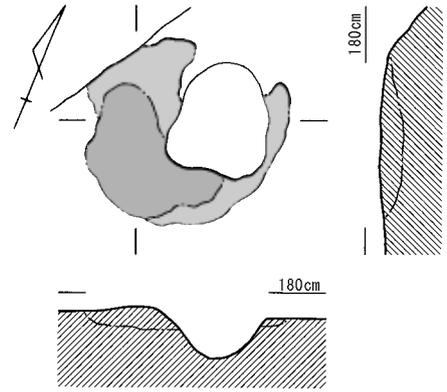
調査区南東部にあたる微高地の北端で検出した。平面形は楕円形であり、断面形は皿状を呈する。規模は長径126cm、短径97cm、深さは9cmを測る。埋土中からは、図化し得る程度の遺物は確認できなかったが、検出状況から遺構の時期は弥生時代中期と思われる。(澤山)

##### 土壙 6～9 (第16図)

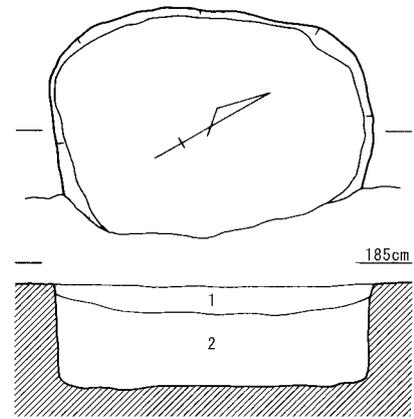
調査区南東部にあたる微高地北側で検出された。いずれも弥生時代後期の溝群による切り合いがみられる。これらの平面形は楕円形と思われ、断面形は皿状を呈する。規模は径1m程度と思われ、深さは約10cmを測る。それぞれの埋土中からは遺物が出土しなかったが、検出状況から遺構の時期は弥生時代中期と思われる。(澤山)

##### 土壙10～13 (第16図・第17図)

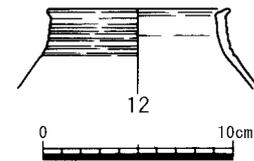
低位部にある土壙群で、径90～150cmの円形を呈し、深さは40～60cmである。土壙11・12は砂礫層まで掘り下げられ湧水が著しい。土壙13・14も近いレベルまで掘られている。性格、機能は不明だが、低位部にあることなどから、地下水を利用する目的で掘削されたものかと思われる。出土遺物は、土壙14出土の弥生土器13がある。弥生時代中期中葉頃の甕で、土壙群の時期も弥生時代中期と考えられる。(尾上)



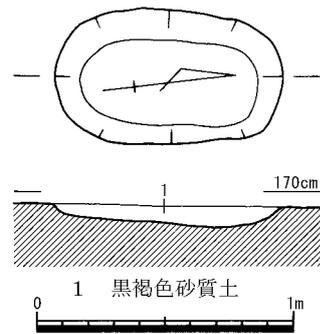
第13図 火処 2 (1/20)



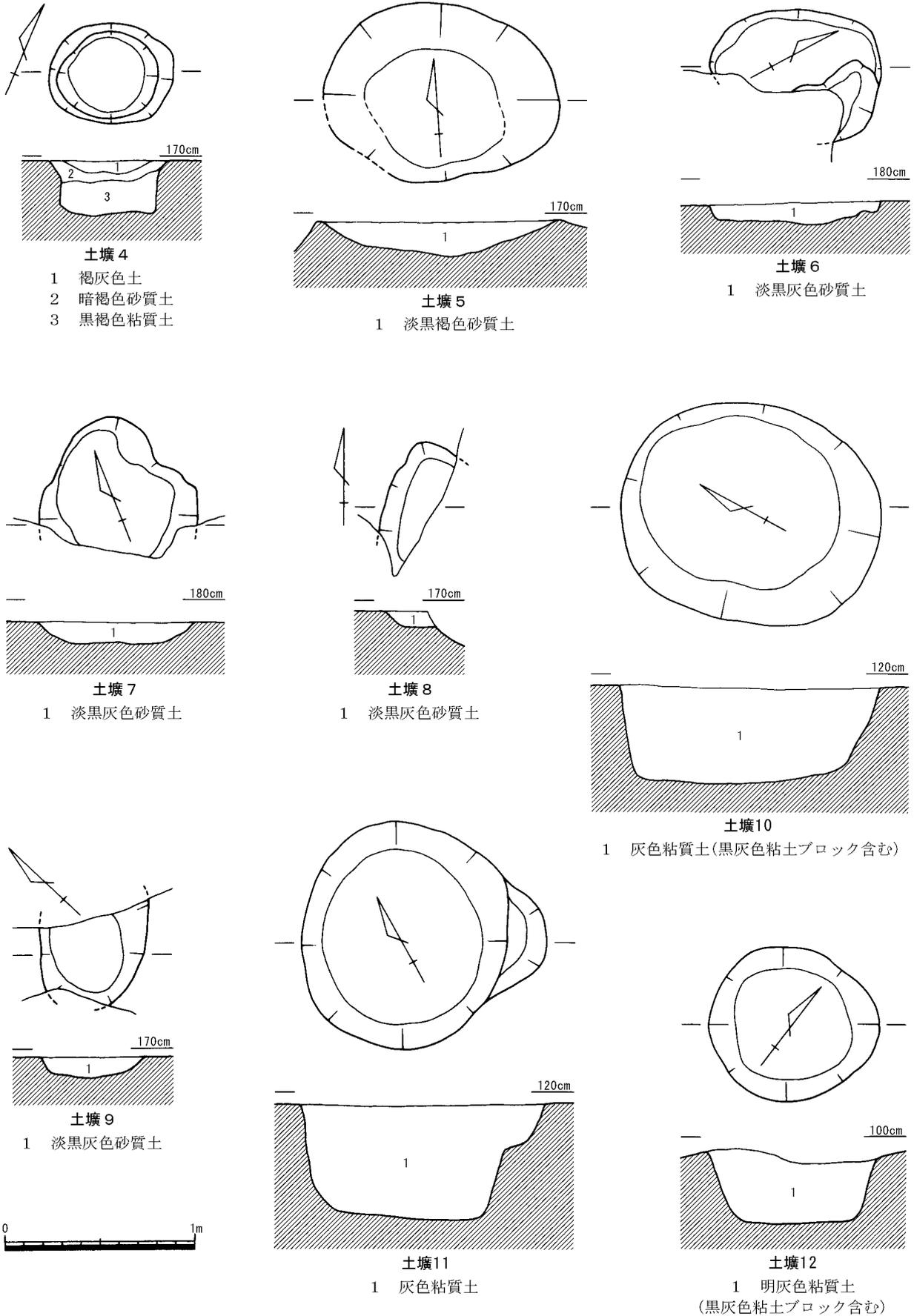
1 暗褐色砂質土 2 黒褐色砂質土



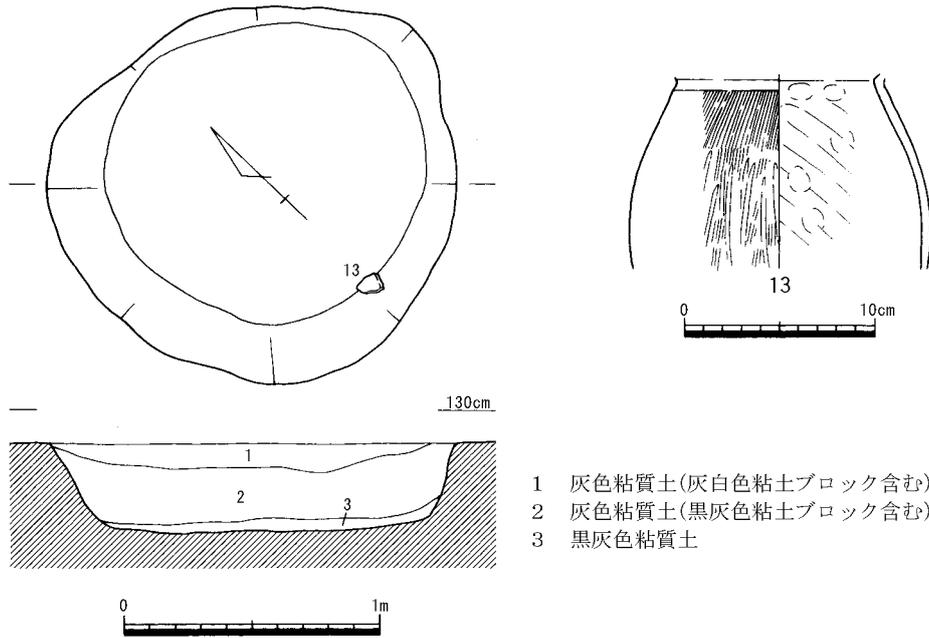
第14図 土壙 2 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)



第15図 土壙 3 (1/30)



第16図 土壙 4～土壙12 (1/30)



第17図 土壌13 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

## 5 水田

### 水田1 (第18図)

該当する水田層は調査区内の各所で認められるが、畦畔が検出されたのは調査区北端部のみである。この付近は調査区内で最も標高の低い場所であり、そのため削平を免れたのであろう。地形はおおむね西から東へ傾斜しており、その等高線に沿う形で畦畔4条が検出された。その間隔はおよそ3.5～5mで、東に向かうにつれて棚田状に水田面が下がっていく。これらに直交する方向の畦畔は検出が困難であったが、1条を確認した。畦畔の残存高は最大約7cmであった。

遺物は伴っていないが、層位的関係から弥生時代中期頃の水田と推定される。(尾上)

### 水田2 (第18図)

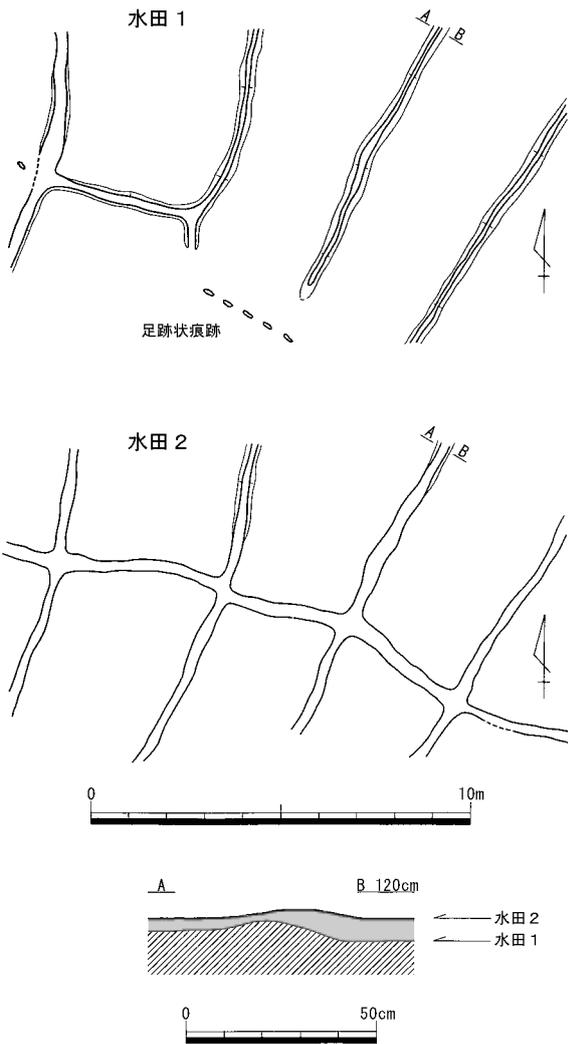
調査区北端部で検出した。水田1の直上層であるが、該当する水田層はこの付近にしか認められず、これ以外の場所では削平を受けていると考えられる。南北方向の畦畔は水田1のものをほぼ踏襲しており、東西方向の畦畔は若干位置を変えている。水田1に比べて畦畔の残りは悪く、最大で高さ約3cm、大部分は痕跡程度の検出にとどまった。

遺物は伴わないが、層位的関係からやはり弥生時代中期頃の水田と推定される。(尾上)

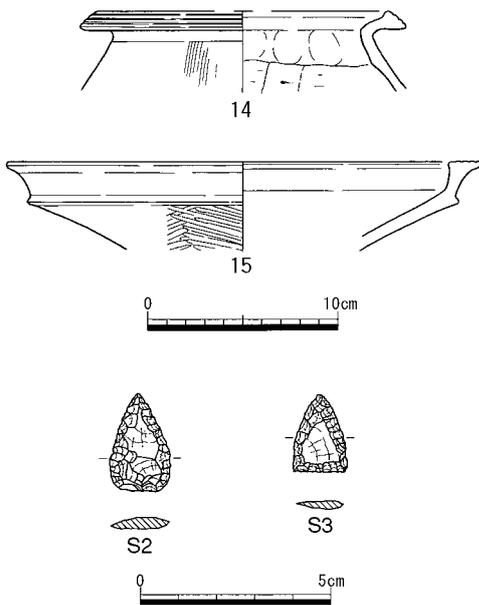
### 水田3 (第10図・第19図)

該当する水田層は微高地部分を除きほぼ全域に広がっているが、畦畔は調査区南西部で検出したのみである。厚さ30cm前後の洪水砂層に覆われており、これを除去すると水田面および水田畦畔が現れた。畦畔の方向は微高地の西辺に平行あるいは直交し、水田の開削、拡張に伴って微高地端部を削り込んだものと考えられる。畦畔どうしの間隔はおよそ10mで、弥生時代の水田区画としては広い。間に小規模な畦畔があって流失している可能性もある。畦畔の高さは最大で約15cmあった。

出土遺物は乏しいが、水田層から弥生時代後期前半の土器14・15や石鎌S2・S3が出土している。水田の時期はそれ以降、弥生時代後期末頃までの間であろう。(尾上)



第18図 水田 1・水田 2・足跡状痕跡  
(1/200・1/20)



第19図 水田 3 出土遺物 (1/4・1/2)

### 足跡状痕跡 (第18図)

調査区北西部から中央部にかけて検出した足跡状痕跡である。進行方向は北西の高地部から南東の低地部へと直線的な歩行をしたとみられ、6歩分を検出した。足跡の単位は、平面形で楕円形を呈しており、指まで認識できるものは皆無であった。長軸は30~33cm、短軸は11cm、歩幅は57~60cm、検出面からの深さは浅いもので1.8cm、深いもので6.2cmを測る。足跡が長大なことから、ぬかるむ程の軟弱な地面を歩行したと推測される。弥生時代中期の水田 1 の下層で検出しており、水田 1 との直接的な関係はないものとみられる。

時期は、検出面が弥生時代前期の黒色土層の上面であることから、弥生時代前期から中期の範疇と考えられる。  
(水田)

## 6 溝

### 溝 2 ~ 溝 5 (第20図)

調査区中~北部で検出した細い溝で、北東から南西へ流れる。出土遺物はないが、弥生時代後期水田層 (水田 3 相当層) の直下で検出しており、弥生時代中~後期の遺構と考えられる。

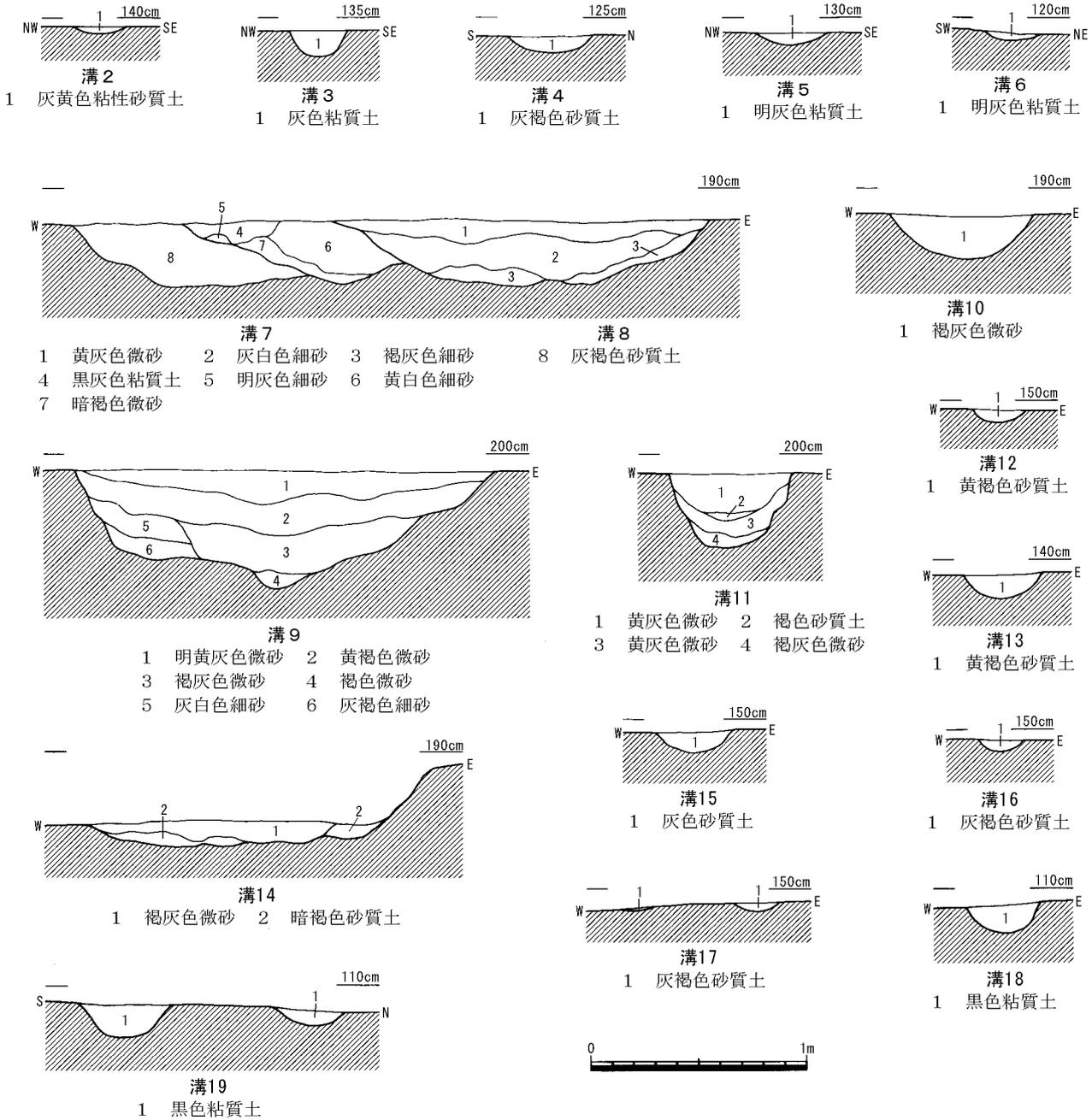
### 溝 6 (第20図)

調査区中部で検出した、東西方向の細い溝である。遺物はないが、黒色土層上面で検出したことから弥生時代中期頃のものと考えられる。

### 溝 7 (第20図・第21図)

調査区南部を北東から南西に流れ、微高地東辺に沿って南下する。底部には何条かの溝状の掘り窪みがみられ、土層断面においても何度か掘り直されていることが分かる。

底部付近から多くの遺物が出土しており、弥生時代中~後期の土器を含むが、遺構の時期を示すのは後期後半の土器16~19であろう。ほかに、頭部を欠失する人形土製品C 2 や分銅形土製品C 3、小形の石鏃S 4がある。C 3 は赤色顔料が塗布されているが、破損面にも塗布されており、破片になってからも使用されたことを示す。



第20図 溝2～溝19 (1/30)

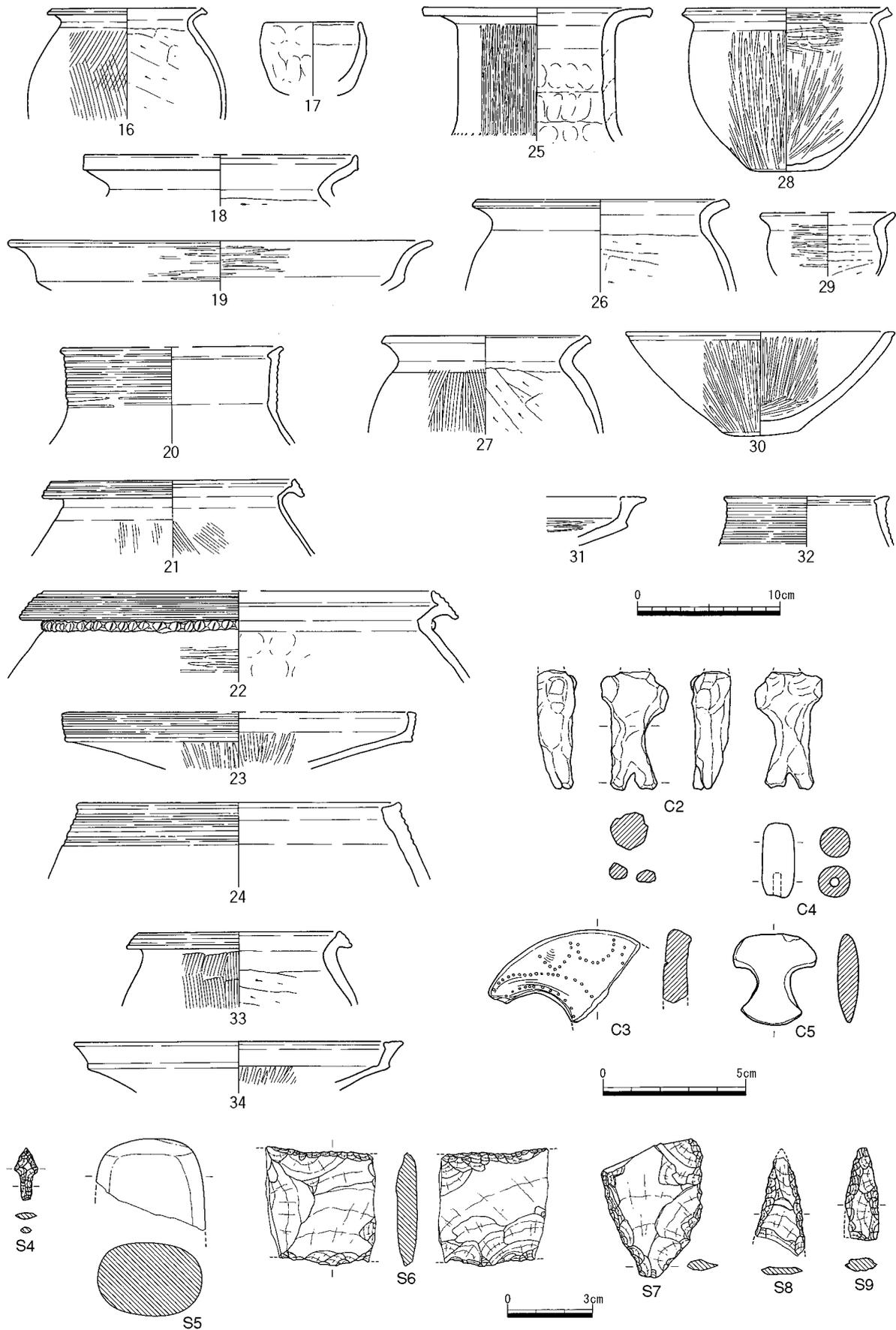
溝8 (第20図・第21図)

微高地の東端に沿う南北溝である。溝7に切られ溝7と併走する。底部付近から遺物が出土しており、弥生時代中期後半頃の土器20～24のほか、磨製石斧基部の破片S5がある。

溝9 (第20図・第21図)

微高地上を北東から南西に流れる。北端部では溝7の埋土との区別が困難な状況であった。上端幅約2m、深さ約50cmで、確認調査T3の溝1につながる可能性がある。溝底は幅約50cmで一段深く掘り込まれ、底面には鋤痕が見られた(図版7-2)。

出土遺物は、土器25～30のほか小形の分銅形土製品C5、不明土製品C4、サヌカイトの石包丁S6、石錐S7などがある。出土土器から、後期後半から末頃の溝と思われる。



溝7:16~19・C2・C3・C4 溝8:20~24・S5 溝9:25~30・C4・C5・S6・S7 溝11:S8・S9 溝13:31 溝14:33・34 溝15:32

第21図 溝出土遺物 (1/4・1/2)

溝10・溝11 (第20図・第21図)

微高地上を南北に流れ、溝11は蛇行、分岐する。集落遺構を切ることから、弥生時代後期と推定される。遺物は溝11から石鏃S 8・S 9が出土した。

溝12・溝13 (第20図・第21図)

微高地の北西裾付近に認められた細い溝である。弥生時代後期の溝と考えられ、溝13から後期初頭の高杯31が出土した。

溝14 (第20図・第21図)

微高地西辺に沿う溝で、東岸は微高地の肩、西岸は水田3の畦畔となる。弥生時代後期前半の甕33・高杯34が出土しており、その時期から、後期後半まで機能した溝だろう。

溝15～溝17 (第20図・第21図)

併走する4条の溝で、微高地西辺に平行する。溝14および水田3の下層で検出し、溝15から弥生時代中期の壺32が出土したことから、中期の溝と思われる。

溝18・溝19 (第20図)

基盤層上で検出し、埋土は黒色土で弥生時代前期と考えられる。ピットが連続する形態をなし、溝19は2条が併走する。

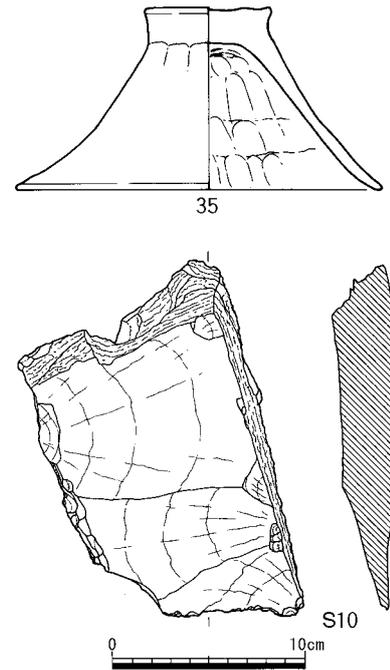
7 自然流路 (第22図)

調査区東部を弧状にめぐり、黒色粘土層の落ち込みとして検出された浅い流路である。幅は平均4 m前後、深さは20～30cmである。出土遺物はわずかだが、弥生時代前期後半の蓋35とサヌカイト製の大型石核S 10がある。石核の下端は調整が加えられ、刃として使用されたようである。

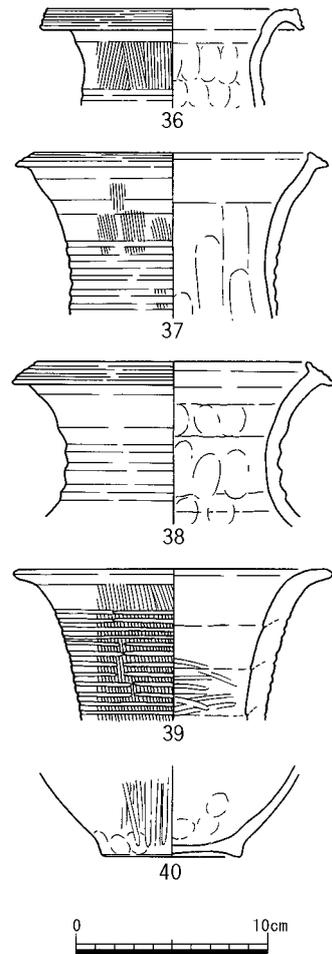
8 遺構に伴わない遺物 (第23図・第24図)

出土土器は、前期から後期末までの幅があるが、量的に主体をなすのは中期後葉の土器であり、集落の中心的時期を示している。弥生時代の遺構を覆う洪水層からは、鉢58・60などが出土しており後期後半の時期である。ミニチュアの鉢59は外面の半周に三角形3つの文様があり、幾何学的であるが住居を描いたようにも見える。口縁の刻目はこの部分のみで全周しない。そのほか、詳細は観察表と第4章第3節にゆずる。

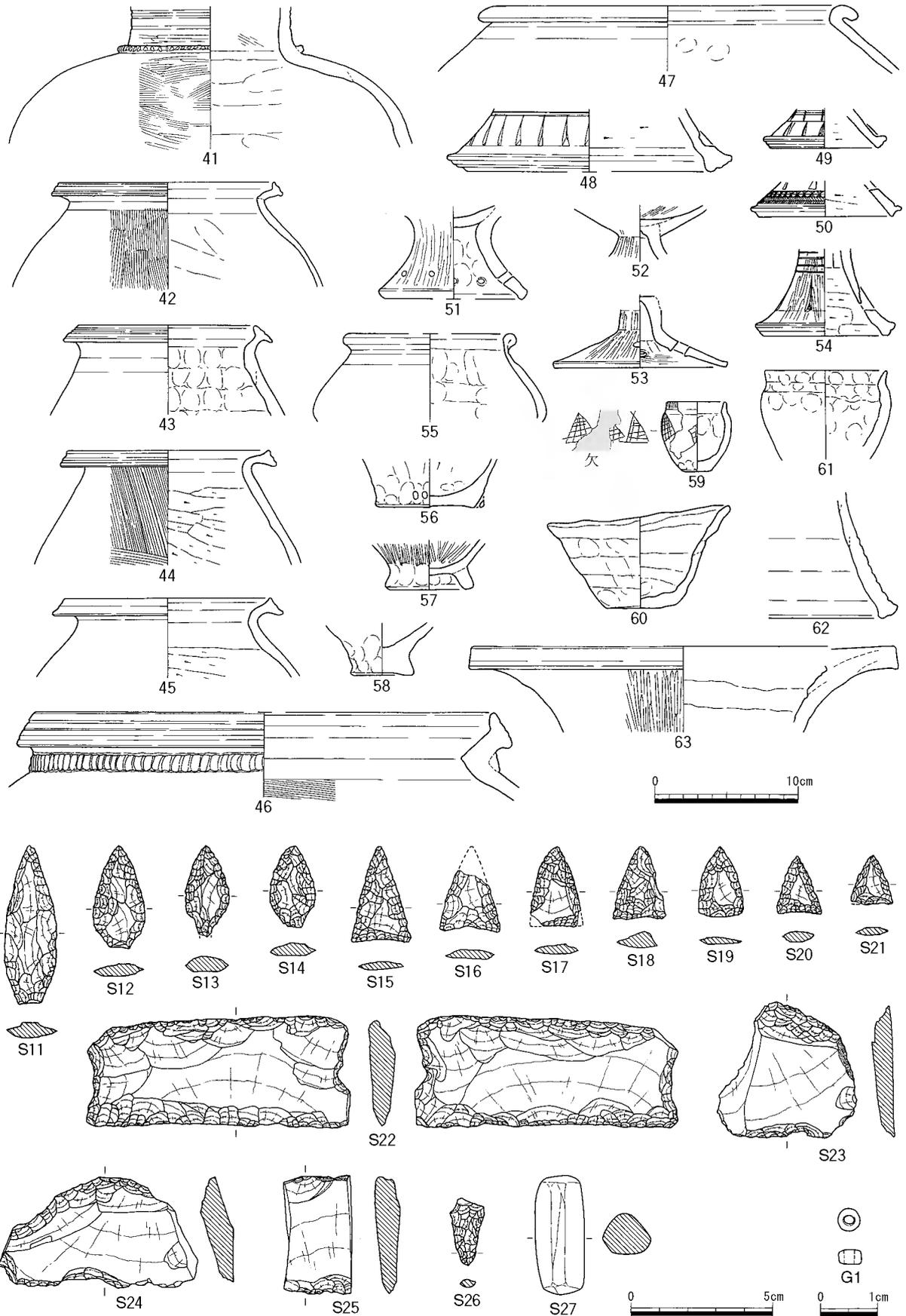
石器では、石鏃S 11～S 21、石包丁S 22、スクレイパーS 23・S 24、楔S 25、石錐S 26、小形の砥石S 27がある。石包丁S 22は調査区北部の水田3相当層上面に貼り付くように出土した。ガラス小玉G 1は古墳時代前期以降の可能性がある。



第22図 自然流路出土遺物 (1/4)



第23図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



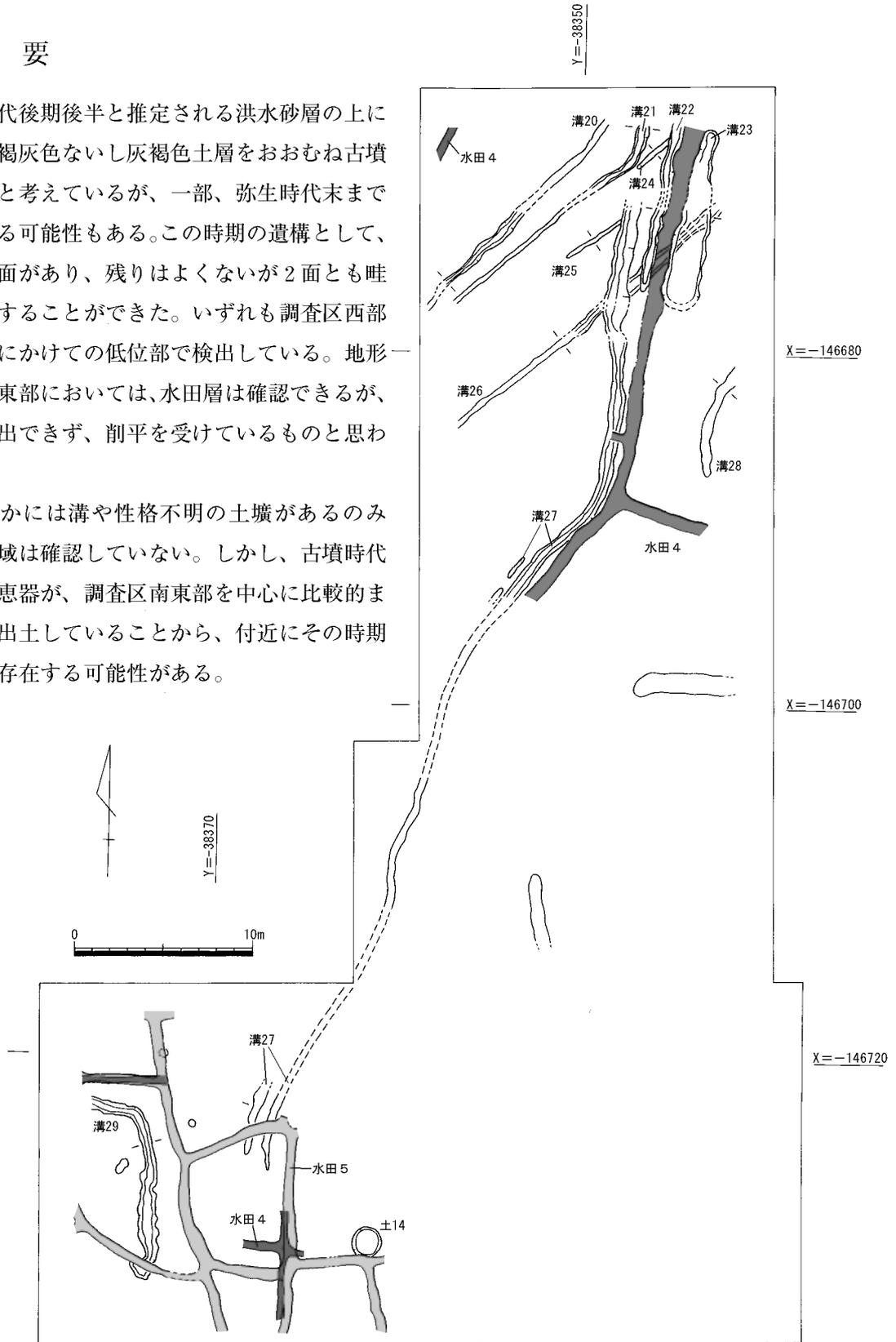
第24図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/2・1/1)

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### 1 概要

弥生時代後期後半と推定される洪水砂層の上に堆積する褐灰色ないし灰褐色土層をおおむね古墳時代の層と考えているが、一部、弥生時代末までさかのぼる可能性もある。この時期の遺構として、水田面2面があり、残りはよくないが2面とも畦畔を検出することができた。いずれも調査区西部から北部にかけての低位部で検出している。地形の高い南東部においては、水田層は確認できるが、畦畔は検出できず、削平を受けているものと思われる。

そのほかには溝や性格不明の土壌があるのみで、集落域は確認していない。しかし、古墳時代後期の須恵器が、調査区南東部を中心に比較的まとまって出土していることから、付近にその時期の集落が存在する可能性がある。

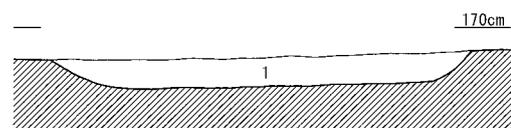
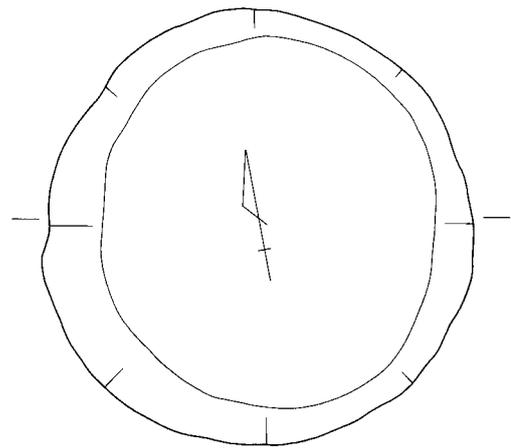


第25図 古墳時代の遺構配置図 (1/350)

## 2 土 壙

### 土壙14 (第26図)

調査区南部で検出した土壙で、径約170cmのほぼ正円形をなす。深さは10cmほどで浅い。出土遺物はなく、時期、性格ともに不明だが、洪水砂層上面で検出したことから、古墳時代前期頃の遺構と推測される。



1 黄褐色砂質土



第26図 土壙14 (1/30)

## 3 水 田

### 水田4 (第25図)

洪水砂層の直上層で検出した水田である。残りが悪く、広い範囲では検出できなかった。調査区北部では、部分的であるが2～3cmの高さの畦畔が残存していた。なお、畦畔が十字に交差する部分で、木炭が散布する状況が認められた。

伴う遺物はないが、検出状況から古墳時代前期と推定している。

### 水田5 (第25図)

水田4の直上層である。調査区南西部で最も残りがよく、畦畔を比較的広範囲にわたって検出した。畦畔の位置は水田4をほぼ踏襲している。畦畔は高さ5cm以下が残存しており、おおむね東西南北の方向に水田を区画する。一区画の規模は一辺4m～10m、広さはおおよそ35～50㎡ほどである。

伴う遺物はなく、層位関係から水田4より新しいが、やはり古墳時代前期頃に属すると考えられる。

## 4 溝

### 溝20・溝21 (第27図)

調査区北部、洪水層の上面で検出した溝で、北東-南西方向を示す。検出状況から、弥生時代末ないし古墳時代前期の溝と推定される。

### 溝22・23 (第27図)

調査区北部において、水田4の畦畔痕跡の両脇に検出された浅いたわみ状の溝である。検出面は水田4の水田面で、砂が堆積していた。古墳時代前期のものと考えられる。

### 溝24～溝26 (第27図)

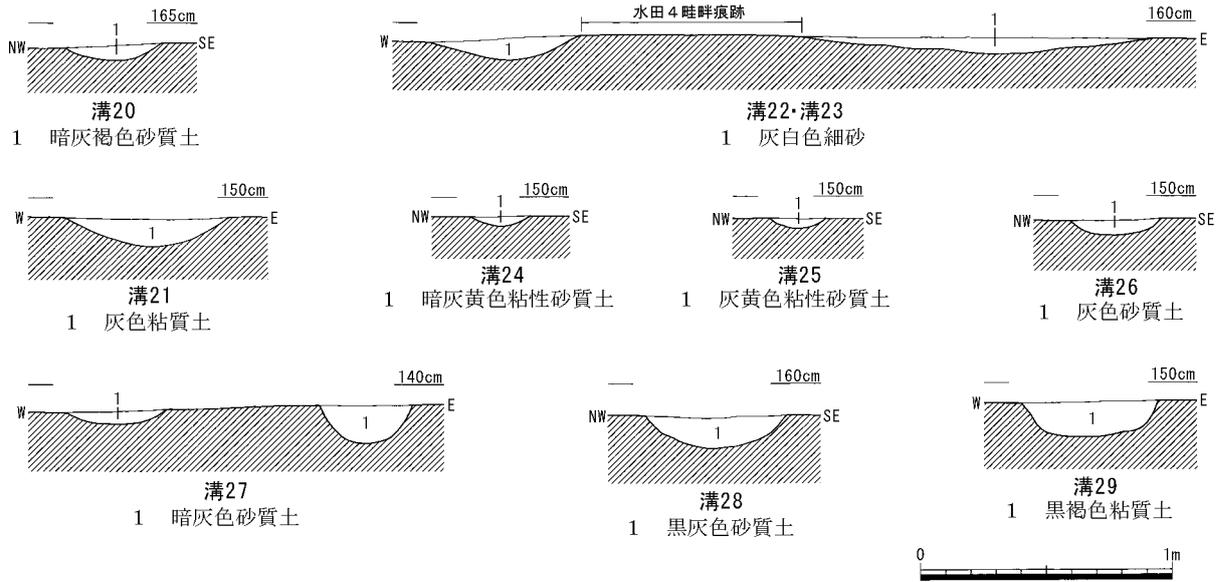
調査区北部で検出した、北東-南西方向の細い溝である。洪水砂層上面で検出しており、弥生時代末ないし古墳時代前期の溝と推定される。

### 溝27 (第27図)

北から南に向かって併走する2条の溝で、西側の溝は浅く残りが悪い。調査区北部では水田4の畦畔に沿って流れるが、両者の関係は不明である。検出状況から、古墳時代前期頃の溝と推定される。

### 溝28 (第27図)

調査区北東部で検出した溝で、北から南に向かって流れる。古墳時代前期頃の溝であろう。



第27図 溝20～溝29 (1/30)

溝29 (第27図)

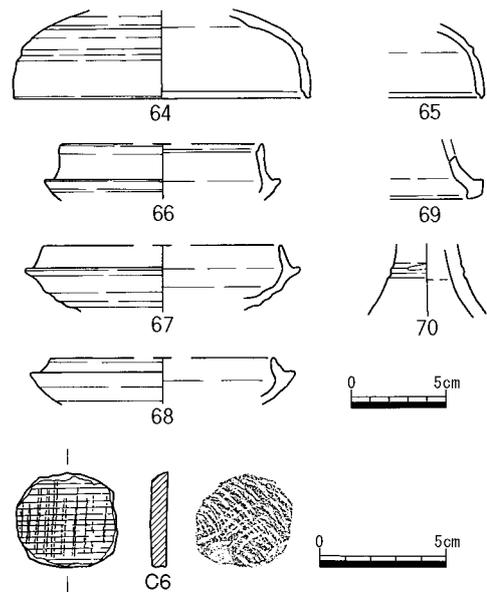
調査区南西部で、水田5の畦畔に沿うように屈曲する。溝の幅、深さとも一定せず、凹凸が激しい。検出状況から、古墳時代前期頃の溝と推定される。

5 遺構に伴わない遺物 (第28図)

畦畔を伴う水田が確認された古墳時代前期の遺物はほとんどないが、この水田より上層から古墳時代後半期頃の遺物が出土している。

いずれも須恵器あるいはその転用品である。杯蓋64・65は6世紀前半頃、杯身は5世紀末頃の66と6世紀中葉ないし後半の67・68がある。高杯は5世紀末頃の69と7世紀代の70がある。

土製品として、須恵器甕の破片を転用した土製円板C6がある。



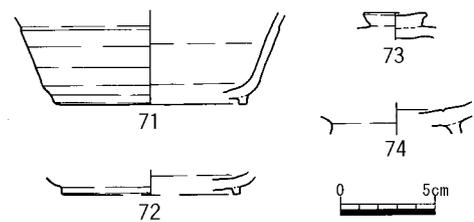
第28図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

第4節 古代の遺物

古代の遺物は少ない (第29図)。須恵器の杯71～73があり、8世紀頃のものと思われる。須恵器以外では、近江産の緑釉陶器74があり、10世紀後半と考えられる<sup>(1)</sup>。

註

(1) 大阪大学高橋照彦氏に教示いただいた。



第29図 古代の遺物 (1/4)

## 第5節 中世の遺構と遺物

### 1 概要

中世の遺構はきわめて少ない。調査区南部で併走する3条の浅い溝を検出したのみである。調査区のほぼ全域が水田であったようで、水田層と考えられる土層が広がっていたが、畦畔等は確認できなかった。

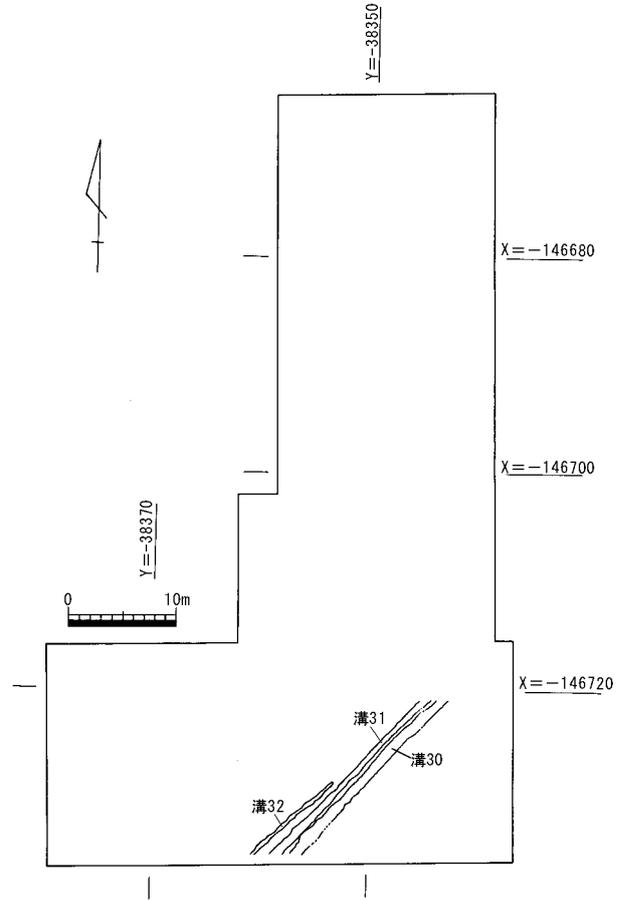
### 2 溝

#### 溝30～溝32 (第30図)

北東から南西に向けて併走する3条の溝である。いずれも残存状況が悪く、上部を削平されている。溝30は幅約120cm、深さ10cm弱、溝31は幅約70cm、深さ約5cm、溝32は幅約20cm、深さ数cmが残存している。

遺物は、溝32から土師質土器の皿(第31図-78)が出土した。

3条の溝は北東-南西の方向を示すが、水田層上面には南北方向の耕作痕が認められたことから、畦畔は東西南北の方位にしたがっていたとみられる。この3条の溝の位置は、弥生時代の微高地端部にほぼ一致しており、中世段階にもこの溝に沿って水田の高低差があったのかもしれない。

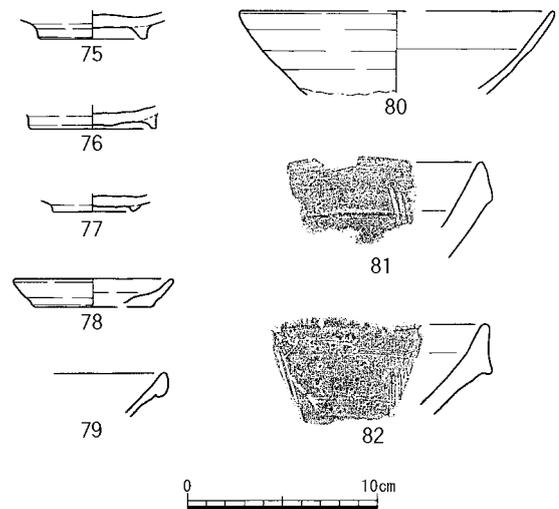


第30図 中世の遺構配置図 (1/700)

### 3 遺構に伴わない遺物 (第31図)

中世の出土遺物は多くない。そのほとんどが調査区南部から出土している。

土師質土器の高台付椀75～77はいわゆる早島式土器であり、13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。舶載磁器である白磁碗は、口縁が玉縁をなす79と直線的に終わる80がある。12～13世紀代のもと思われる。備前焼の播鉢81・82はわずかな破片であるが、口縁端部に垂直に近い面をもち、あまり拡張しない。14世紀頃のものであるろう。



第31図 中世の遺物 (1/4)

## 第6節 近代の遺物

調査区の北部で、焼夷弾の信管及び炸薬筒と思われる部品が出土した。信管は、標高約1m、現地表下約2.2mにあり、それより上位から炸薬筒と思われる筒状部品、最上位からゆがんだ薄い鉄板が出土した。出土時には油脂様の異臭がした。

信管には、津島遺跡総合グラウンド内出土品と同じ制式番号「NOSE BOMB FUZE AN-M126A1」の陰刻があり、米軍AN-M47A2焼夷弾の信管と判る<sup>(1)</sup>。1945年6月29日の岡山空襲時に投下されたものであろう。

また、制式番号とともに「LOT-AOP-320 8-44」の陰刻が認められる点は、総合グラウンド内出土品と異なっている。



写真3 焼夷弾信管（左）と炸薬筒（右）

## 註

(1)日笠俊男「津島遺跡から出土の焼夷弾信管について」「津島遺跡5」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」

181 岡山県教育委員会 2004

写真4 現地説明会  
(2005.7.16)

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷

#### 弥生時代前期

明確に弥生時代前期と判断しうるものは少ないが、周辺地域で弥生時代前期の指標となっている黒色土層およびそれを埋土とする溝等を想定している。

弥生時代中期の集落が展開する調査区南東部には黒色土の堆積が認められず、この段階から微高地となっているが、生活の痕跡はない。黒色土層が分布する周辺の低位部では、黒色土を埋土とする溝などが検出された。一面に広がるこの黒色土層は、植物珪酸体分析の結果（付載1掲載、以下同じ）から見ると、総合グラウンド内西部の弥生時代前期水田層と同等あるいはそれ以上の含量をもっており、当地点においてもこの時期に稲作が行われていた可能性がある。なお、調査区北部の足跡状痕跡は、検出層位から判断すると、弥生時代前期にさかのぼるかもしれない。

#### 弥生時代中期

調査区南東部の微高地上に集落が形成され、集落関連の遺構が認められる（竪穴住居、焼成土壌、火処1・火処2など）。微高地周辺からは土器が多く出土しており、時期は中期後葉を中心とする。

低位部では、前期の可能性のある黒色土層と後期の水田層との間に挟まれる2～3の土層が中期に対応する可能性があり、調査区北部では畦畔を伴う2面の水田を確認した（水田1・水田2）。畦畔は地形に沿って北東－南西方向を主体としている。集落遺構との同時性は不明ながら、近い時期の集落と水田が隣接して確認されたことは、当時の景観を考える上で重要であろう。

#### 弥生時代後期

微高地上には多条の溝が走り、水田耕作と関連する用水路の可能性はある。中期に認められた集落関連遺構は明確でないが、微高地周辺で後期初頭頃の土器も散見されたため、その頃まで存続した可能性はある。低位部には水田が広がり、一部ではあるが良好な形で畦畔を検出した（水田3）。一区画が10m程度の広い区画であり、微高地西辺に沿う北東－南西の方向を示している。

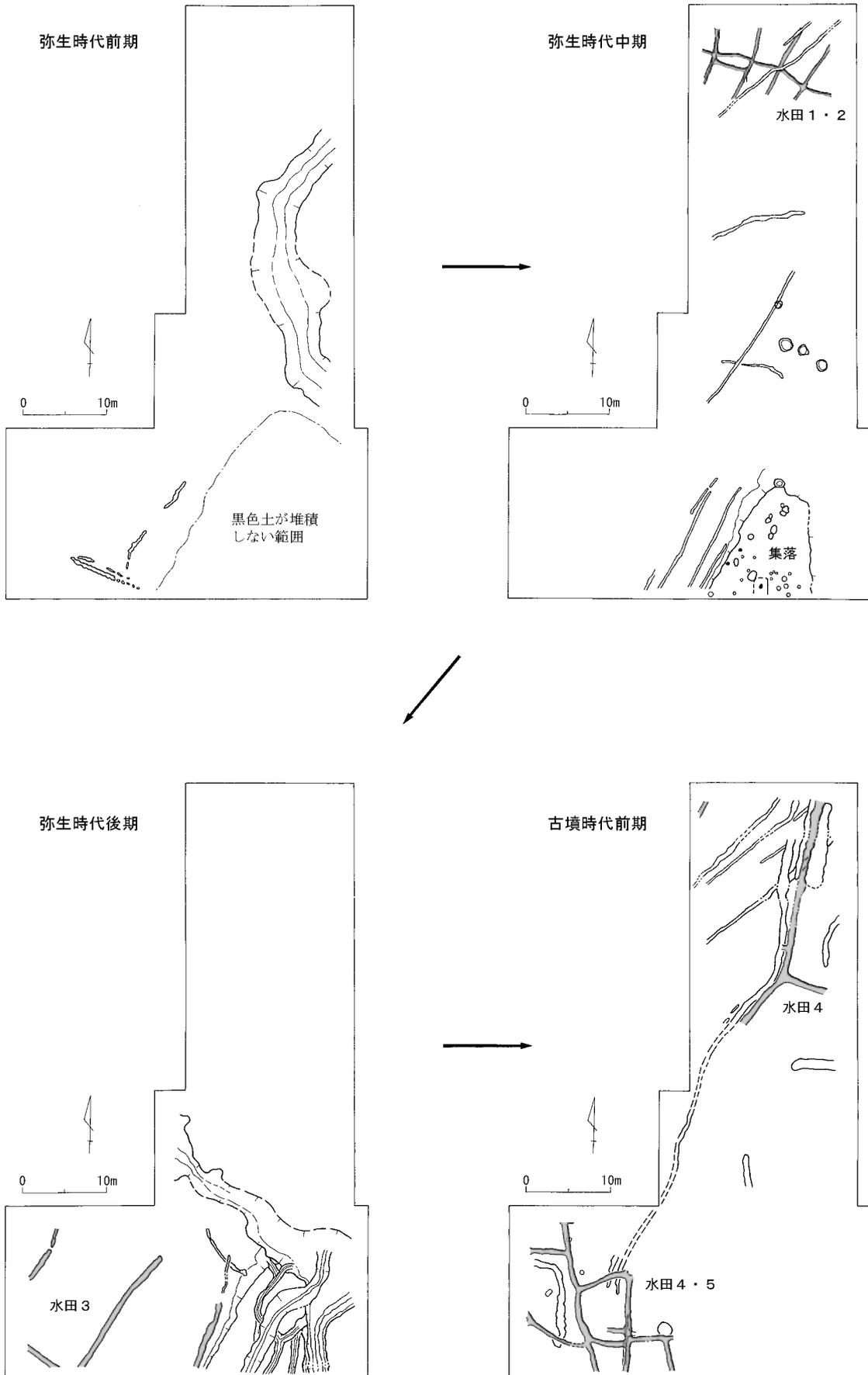
弥生時代の末頃、付近一帯は洪水に見舞われたようで、微高地部分を除き、厚さ20～30cmの砂が堆積している。百間川遺跡群などで認められる洪水砂層と同時期のものの可能性が考えられる。

#### 古墳時代前期

弥生時代後期の水田が洪水で埋没した後、北東－南西方向の細い溝が何条も認められるが、その後は調査区一面が水田化されたようである。周辺の丘陵に点在する前期古墳造営の基盤となったものであろう。水田面は2面を確認しており（水田4・水田5）、畦畔の方向は弥生時代とはやや異なって東西南北の方位に近づいている。水田の区画は弥生時代後期のものより狭い。

#### その後

一面が水田化された状況は、近代まで続いたようである。多数の水田層が重層的に堆積しているが、削平を受けているためか、中世の浅い溝が検出された以外には、畦畔等の遺構は認められなかった。



第32図 遺構の変遷 (1/700)

## 第2節 津島遺跡南西部の弥生集落と水田

津島遺跡周辺は、近代に旧陸軍の練兵場として盛土造成がなされた上、現在では市街地化が著しく、地表面からは、地下の遺跡の状況はほとんど知ることができない。現状では地形の変化に乏しい津島遺跡周辺においても、弥生時代には複雑な地形の起伏があり、微高地上には集落が営まれ、その周辺に水田が広がっていたことが、発掘調査などを通じて分かってきている。特に県総合グラウンド内では、体育施設の建設に伴う発掘調査のほか、計70か所に近い確認調査が行われ、集落や水田の分布が明らかになってきている<sup>(1)</sup>。本節では、津島遺跡の南西部に位置する今回の調査地周辺で過去に行われた発掘調査、確認調査などの成果から、集落と水田の広がりについて考えてみたい。

今回の調査区では、南東部に弥生時代中期の集落域が認められた。これはさらに南方へ広がっているものとみられ(⑨・⑪・⑫地点)、現在の観音寺用水付近が南限と考えられている。東側は、今回の調査区内でも東端までは広がらず、東接する⑦・⑧地点でも集落は確認できない。南へ迂回しながら県営球場方面へ続いていく可能性が高い。西側の⑥・⑩地点などは低位部であるから、西側へはそれほど広がらず、北東-南西方向にのびる幅150~200m前後の微高地とみられる。もっとも、実際にはこの範囲一面に微高地および集落が存在するのではなく、河道や低位部がもっと複雑に入り組んでいるであろう。大まかに見れば、以上のような集落の広がりが復元でき、今回の調査地点は微高地が北に細く突出する突端部に当たると言うことができる。

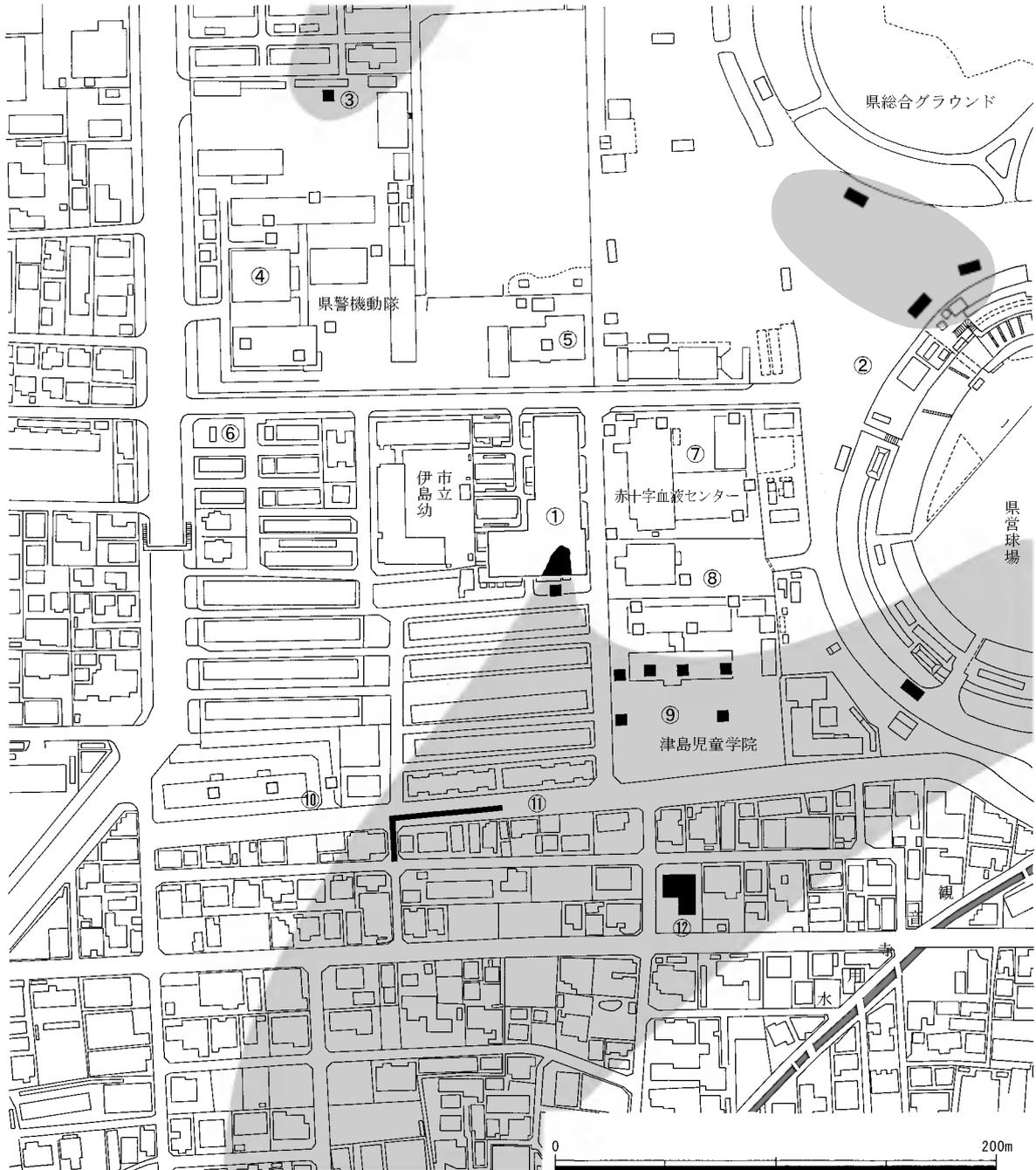
周辺の集落遺構の様相を見てみると、同一微高地上に存在すると思われる県営球場や⑫地点では、弥生時代中・後期から古墳時代にいたる遺構が確認されており、今回の調査地点よりも長い時期にわたって集落が営まれたことがわかる。⑨地点では弥生時代後期末~古墳時代初頭の遺物包含層、⑪地点では弥生時代後期の遺物包含層やピットが確認されており、やはり今回の調査地点よりも新しい集落の様相を示している。微高地北端にあたる今回の調査地点では、弥生時代後期に入る頃から集落は営まれなくなり、水田あるいはその周辺域として利用されるようになったと考えられる。集落は、南方へその範囲をせばめ、また総合グラウンド内で弥生時代後期以降集落が拡大することと呼応するようでもある。

一方、水田については、今回の調査で微高地の西側および北側に接して、弥生時代中期から後期の水田が広がっていることが明らかになった。トレンチ調査では検出が難しい畦畔もよく残っていることが分かり、今後周辺の低位部における水田遺構についても注意する必要がある。同様の時期の水田は、総合グラウンド内では確認されていないが、削平を受けている可能性があり、その北東に位置する北方下沼遺跡・北方横田遺跡などでは検出されている<sup>(2)</sup>ことから、微高地周辺の低位部にかなり広範囲に広がっていたと考えられる。

### 註

(1) 氏平昭則・岡本泰典・島崎東・團奈歩・平井勝・渡邊恵里子ほか「津島遺跡1~6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137・151・160・173・181・190 岡山県教育委員会 1999~2005

(2) 岡田博ほか「北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998



第33図 津島遺跡南西部における弥生時代集落の推定分布 (1/3,000)

■ 調査の結果集落が想定される地点 □ 調査の結果集落が想定されない地点

各地点の調査原因 (出典)

- ①中国財務局合同宿舍津島住宅建て替え (本書) ②津島遺跡第二次確認調査 (総合グラウンド内) (『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004)
- ③県警機動隊車庫建設 (『岡山県埋蔵文化財報告』28 1998)
- ④県警機動隊隊舎建設・浄化槽設置 (『岡山県埋蔵文化財報告』13・14 1983・84) ⑤県警交通管制センター建設 (『岡山県埋蔵文化財報告』16 1986)
- ⑥いずみ町交番建設 (『岡山県埋蔵文化財報告』33 2003)
- ⑦赤十字血液センター建設 (『岡山県埋蔵文化財報告』8 1978) ⑧農地開発公社事務所建設 (『岡山県埋蔵文化財報告』15 1985)
- ⑨津島児童学院改築 (『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983) ⑩国家公務員宿舍建設 (『岡山県埋蔵文化財報告』29 1999)
- ⑪電話線埋設 (『岡山県埋蔵文化財報告』17 1987) ⑫岡山家庭裁判所長宿舍建て替え (『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』145 1999)

### 第3節 津島遺跡出土の弥生土器

ここでは、今回出土した弥生土器を時期別に整理・検討したいと考える。土器編年については、「津島遺跡6」<sup>(1)</sup>にしたがうこととする。時期区分は、百間川遺跡群での区分<sup>(2)</sup>を参考に前期をⅠ～Ⅲ期、中期をⅠ～Ⅲ期、後期をⅠ～Ⅳ期に区分する。第34図の土器番号は、報告書掲載番号とする。なお、弥・前・Ⅰ期、弥・前・Ⅲ期、弥・中・Ⅰ期の土器は、今回の調査では出土していない。

#### 弥・前・Ⅱ期

蓋形土器35は、頂部から裾部にかけて外反する。

#### 弥・中・Ⅱ期

甕8は口縁端部がヨコナデによって上方に摘み上げられる。内外面ともヘラミガキによって調整がなされており、口縁部内側には2つの穿孔がみられる。高杯51は、底部に円盤充填を施している。56はジョッキ形の鉢とみられ、底部端に2孔1対の穿孔がみられる。

#### 弥・中・Ⅲ期

壺は、長頸のもの(1)、短頸のもの(5)、無頸のもの(12)に分別できる。口縁端部には、それぞれ4条から5条の凹線文が施されている。1は口縁端部を棒状浮文で加飾し、肩から胴部にかけて櫛状工具による2列の刺突文が巡る。甕は、凹線文を施すもの(21・22)と無文のもの(47)に分別できる。21・22は口縁端部を上下に拡張する。22は復元口径約32cmを測る大形のもので、頸部に粘土紐を貼り付け、ヘラ状工具による押圧文が施される。47は口縁端部を外側に折り曲げ、丸く垂下させる。高杯は、口縁部が直立し外面に凹線文が巡る(23・4)。4は、脚部に細長三角形の透かし穴、脚部文様はヘラ描き沈線が施される。鉢は、口縁部に6条の凹線文を施す24、口縁端部が玉縁状を呈する55がみられる。62は器台である。63は回転台形土器あるいは台形土器と称されているもので、上半部が大きく外反し、天板の直径は約29cmを測る。天板部上面は、入念なヘラミガキが施されている。

#### 弥・後・Ⅰ期

長頸壺37・39は、頸部にタテハケのちヘラ描き沈線が施される。甕は、内面の頸部付近までヘラケズリが施される(44)。高杯34は、口縁部を肥厚・拡張し、端面に凹線を施している。

#### 弥・後・Ⅱ期

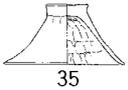
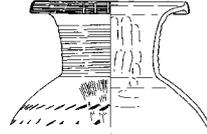
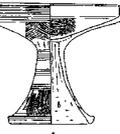
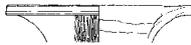
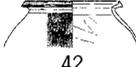
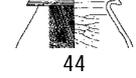
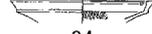
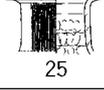
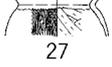
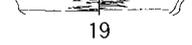
壺41は、長い頸部に沈線を巡らせ、その下端に突帯を貼り付ける。甕16は、口縁端部がわずかに肥厚し、ヨコナデを施している。外面はタテハケ、内面はヘラケズリを施している。鉢28は、口縁部を「く」字状に外反し、底部は平底を呈する。

#### 弥・後・Ⅲ期

長頸壺25は、直立する頸部より強く折り返し水平に開く口縁部を呈する。頸部外面はタテ方向のヘラミガキ、内面には指頭圧痕がみられる。胎土は在地のものとは相違ないが、形態は讃岐地域に多い器種である。甕27は口縁部が「く」字状に外反し、胴部外面はタテハケ、内面はヘラケズリを施している。高杯19は、浅い受け部をもち、口縁部が外反する。鉢30は、口縁部が外反する。底部は明瞭な平底であり、内外面はヘラミガキが施されている。

#### 弥・後・Ⅳ期

高杯は、この時期最も短脚化する(53)。鉢59・61は、小形に分類でき、口縁部は「く」字状を呈

	壺	甕	高杯	鉢	その他
弥・前・Ⅰ					
弥・前・Ⅱ					
弥・前・Ⅲ					
弥・中・Ⅰ					
弥・中・Ⅱ					
弥・中・Ⅲ	  	  	 	 	 
弥・後・Ⅰ	 	 	 		
弥・後・Ⅱ					
弥・後・Ⅲ					
弥・後・Ⅳ				 	

第34図 弥生土器の編年 (1/12)

する。61は、内外面ともに指オサエが顕著にみられる。53・61の胎土は、水こし粘土が使用されている。

註

- (1)岡本泰典「弥生土器について」「津島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190 岡山県教育委員会 2005
- (2)江見正己「時期区分について」「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会 1980

## 第4節 玉縁状口縁を有する土器

### 1 はじめに

今回の調査では、弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器が多数出土した。その中でも包含層からではあるが、玉縁状を呈する土器が2点（甕47・鉢55）出土している。津島遺跡（岡山県総合グラウンド）の調査においても口縁端部に特徴をもつ土器3点の出土例がみられる。

岡山県内の弥生時代中期後葉から後期前葉の遺跡においては、しばしば確認されている土器とされている<sup>(1)</sup>。県内の初見では、上東遺跡の包含層資料の中で口縁部を折り曲げた壺2点が出土している。門前池遺跡で、「口縁部を折り曲げた土器」として紹介され、その系譜を北部九州で出土している朝鮮系無文土器の影響とし、県内出土例を紹介している。野田畝遺跡で、「丸く折り曲げられた土器」という名称で口縁部が折り曲げられた土器の退化した形としている。百間川兼基遺跡で、「器種が大きく壺と鉢に分類できる」と指摘している。

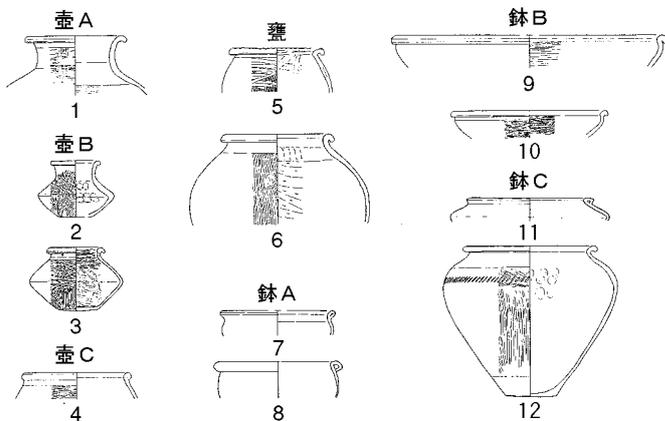
今回、津島遺跡で出土した土器を理解する上で、県内の出土事例を踏まえて若干の考察を行いたい。ここでは、口縁端部に特徴をもつ土器を従来の「折り曲げ口縁」・「折り返し口縁」も含めて広義的な意味で、「玉縁状口縁土器」と仮称することとする。

### 2 基礎的分類

#### 器種（第35図）

玉縁状口縁土器は、弥生時代中期後葉から後期前葉の土器全てにおいて採用されているものではなく、県内では壺3種、甕1種、鉢3種に認められる。ここでは、形態的特徴から形式を設定する。

壺Aは長頸で大きく開く口縁部をもつ広口壺である。壺Bは短い口縁を外方へ湾曲させ胴部中位で鋭く屈曲し、算盤玉形を呈する小形の壺である。頸部に穿孔がある個体もみられる。ここでは、小型広口壺と小型短頸壺を示す。壺Cは、外反口縁をもたない無頸壺である。



- |          |           |            |         |
|----------|-----------|------------|---------|
| 1 窪木遺跡   | 2 久田堀ノ内遺跡 | 3 津寺遺跡     | 4 土井遺跡  |
| 5 津島遺跡   | 6 上東遺跡    | 7 矢部奥田遺跡   | 8 門前池遺跡 |
| 9 三須畠田遺跡 | 10 津島遺跡   | 11 百間川兼基遺跡 | 12 津寺遺跡 |

甕は、法量による大中小に分かれるが、今回は分類はしない。

鉢Aは、胴部から短く屈曲した口縁部をもつ。鉢Bは、口径40cmを越える大形と口径20cmの小形のものがある。口縁部を短く外側へ折り曲げている。鉢Cは、口縁部は短く外反し、口縁部から胴部上位にかけて強い張りを持ち、算盤玉形を呈する。底部は平底と台付きを呈するものがある。

#### 口縁部形態（第36図）

今回は、形態を5分類（a～e類）に分類し、器種に対しての採用性を検

第35図 玉縁状口縁の器種組成 (1/12)

討したい。

「a類」は口縁端部を折り返したもので、玉縁状にはならないもの。

「b類」は口縁端部を折り返して、小さな玉縁状を呈するものとする。

「c類」は口縁端部の折り返しが鈍く、玉縁状を呈しており、断面に折り返し痕跡が明瞭に観察できるもの。

「d類」は口縁端部を大きく折り曲げて、断面の中に空洞が観察できるもの。

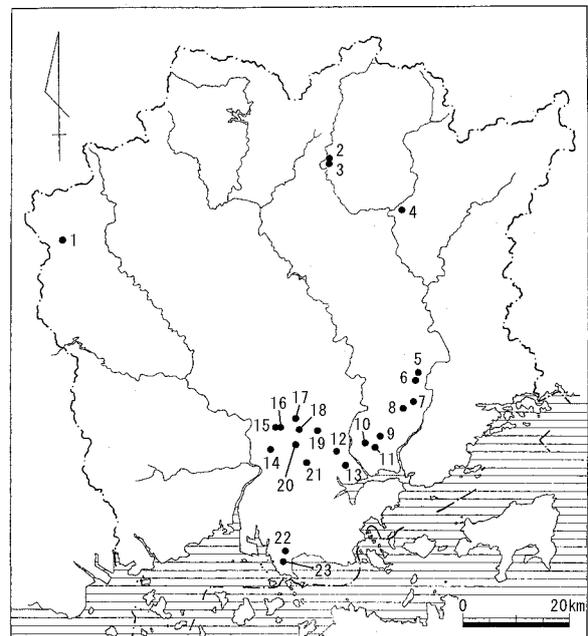
「e類」は「a類～d類」の口縁端部に属さないものとする。

	a類	b類	c類	d類	e類
壺A					
壺B					
壺C					
甕					
鉢A					
鉢B					
鉢C					

第36図 口縁端部分類図

### 3 傾向 (第37図)

玉縁状口縁土器は管見の限りでは、県内23遺跡81例程度認められている。器種別の出土数は、壺Aが21点、壺Bが12点、壺Cが23点、甕が6点、鉢Aが8点、鉢Bが8点、鉢Cが6点が認められる。各類型の出土数は、壺Aはa類6点・b類9点・d類4点・e類1点がある。壺Bはa類1点・b類5点・c類4点・d類1点・e類1点がある。壺Cはa類2点・b類10点・d類10点・e類1点がある。甕はa類4点・b類3点がある。鉢Aはa類1点・c類3点・d類4点がある。鉢Bはa類2点・c類2点・d類1点がある。鉢Cはa類3点・c類2点・d類1点がある。以上の結果、壺A・Bはb類、壺Cはb類・c類、甕はa類・b類、鉢Aはd類、鉢Bはc類、鉢Cはa類とそれぞれの器種によって口縁端部成形の差、製作側の選択が若干認められる。



- |          |                    |            |
|----------|--------------------|------------|
| 1 野田畝遺跡  | 2 久田原遺跡            | 3 久田堀ノ内遺跡  |
| 4 西吉田北遺跡 | 5 才地遺跡             | 6 土井遺跡     |
| 7 斎富遺跡   | 8 用木山遺跡・門前池遺跡・惣図遺跡 |            |
| 9 赤田東遺跡  | 10 百間川原尾島遺跡        | 11 百間川兼基遺跡 |
| 12 津島遺跡  | 13 鹿田遺跡            | 14 三須島田遺跡  |
| 15 南溝手遺跡 | 16 窪木遺跡            | 17 高塚遺跡    |
| 18 津寺遺跡  | 19 高松原古才遺跡         | 20 矢部奥田遺跡  |
| 21 上東遺跡  | 22 城遺跡             | 23 菰池遺跡    |

第37図 遺跡分布図

一遺跡での出土数は1点13遺跡、2点2遺跡、3点2遺跡、4点1遺跡、5点3遺跡、7点1遺跡、10点2遺跡、11点1遺跡で一遺跡1点が大半を占める。このうち用木山遺跡・門前池遺跡・津寺遺跡は10点以上出土している。

出土遺構別では、住居跡15点、土壙14点、溝10点、土器溜り7点、袋状土壙4点、包含層23点で、住居跡・土壙からの出土傾向が高い様相を示す。

分布は、主に県南部の吉井川流域、旭川下流域、高梁川・足守川下流域である。出土数は少数ながらも県北部の吉井川上流域の久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・西吉田北遺跡、高梁川上流域の野田畝遺

跡で確認されている。出土遺跡は、沖積地や丘陵上に立地する集落遺跡から出土している。吉井川流域と足守川流域の出土が多く、吉井川流域では、用木山遺跡・門前池遺跡で、器種は壺B・C、鉢A・B・Cが認められる。特に壺Cはこの地域では多く出土しており、土井遺跡・斎富遺跡でも散見できる。足守川流域では、三須島田遺跡・津寺遺跡・上東遺跡で、器種は壺A・壺B・甕・鉢B・鉢Cが認められる。特に壺Aはこの流域では多く出土しており、他に南溝手遺跡1点・窪木遺跡3点・高塚遺跡1点でみられる。旭川下流域では、百間川兼基遺跡・津島遺跡で、器種は壺C・甕、鉢A・B・Cが認められる。児島地域では、城遺跡・菰池遺跡で2例が出土している。

#### 4 周辺地域の出土事例

ここでの器種名は各報告書に準じて、口縁端部分類は「a類～e類」を用いる。

近畿地方では、六角遺跡（兵庫県姫路市）のSK10出土の広口壺a類2点・広口壺b類1点<sup>(2)</sup>、玉津田中遺跡（兵庫県神戸市）の弥生中期上層旧河道から広口壺a類2点・広口壺c類1点・鉢a類1点<sup>(3)</sup>、巨摩・瓜生堂遺跡（大阪府東大阪市）の沼状遺構から広口壺e類1点・広口壺c類1点<sup>(4)</sup>が報告されている。

四国地方では、名東遺跡（徳島県徳島市）のSB2004から広口壺b類2点・無頸壺a類1点・無頸壺b類3点・無頸壺e類1点<sup>(5)</sup>が報告されている。

以上のように東部瀬戸内地域から大阪湾沿岸にかけて、玉縁状口縁土器の出土例が確認できる。

#### 5 おわりに

今回、津島遺跡包含層から出土した口縁端部に特徴をもつ土器について論を進めてきた。その結果、県内では吉井川流域、足守川流域で多く分布すること、時期は従来からの弥生時代中期後葉（中・Ⅲ期）～弥生時代後期前葉（後・Ⅰ期）の範疇であると考えられる。

今後、この時期から盛行傾向にある凹線文を施す土器との関連の中で理解していかなければならず、また、瀬戸内海沿岸地域や大阪湾沿岸部でもこの種の土器が認められることから地域間的な動向等の分析を進めて詳細に検討する必要があると考える。

#### 補足

執筆後に刊行された、兵庫県姫路市家島町に所在する大山神社遺跡の報告書（亀田修一・白石純他『大山神社遺跡』家島町教育委員会、岡山理科大学人類学研究室 2006年）の中で11点もの玉縁状口縁土器が報告されている。出土遺構の性格は、住居跡・溝・土壇・包含層である。瀬戸内沿岸部での出土が散見されているこの種の土器が島嶼部からこのように多く出土することは、改めてその性格を考える必要がある。

この節を成すにあたり、河合忍・重根弘和・高田恭一郎・高畑知功・福田正継各氏をはじめとする岡山県古代吉備文化財センター職員の諸氏には様々な機会において有益な助言を頂きました。未筆ではありますが記して謝意を表します。

第3表 岡山県出土の玉縁状口縁土器一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	器種	口縁部形態					遺構性格	文献
				a類	b類	c類	d類	e類		
1	野田畝遺跡	新見市	甕		1				竪穴住居	1
2	久田原遺跡	鏡野町	壺A	1					土壇	2
3	久田堀ノ内遺跡	鏡野町	壺B		1				溝	3
4	西吉田北遺跡	津山市	鉢C			1			土壇	4
5	才地遺跡	和気町	壺B		1	1	1		竪穴住居	5
6	土井遺跡	赤磐市	壺B		1				段状遺構	6
			壺C		1					
			壺C		1					
7	斎富遺跡	赤磐市	甕		1				竪穴住居	7
			鉢A			1			井戸	
8	用木山遺跡	赤磐市	壺B		1	1			土器溜り、竪穴住居	8
			壺C		2		2		土器溜り、竪穴住居	
			鉢A	1		1			土器溜り、竪穴住居	
	門前池遺跡	赤磐市	鉢C	1		1			土器溜り、竪穴住居	9
			壺B			1			土器溜り	
			壺C		1		5		竪穴住居、包含層	
惣囷遺跡	赤磐市	鉢A					2	竪穴住居、包含層	10	
		鉢B					1	竪穴住居		
9	赤田東遺跡	岡山市	壺B		1				溝	11
10	百間川原尾島遺跡	岡山市	壺A	1					柱穴	12・13
			鉢A			1			包含層	
11	百間川兼基遺跡	岡山市	壺C		1		3		竪穴住居、土壇、溝	14
			鉢C					1	包含層	
12	津島遺跡	岡山市	壺C		1				土壇	15・16・17
			甕	2					池状遺構、包含層	
			鉢A				1		包含層	
			鉢B	1					土壇	
13	鹿田遺跡	岡山市	鉢C	1					土壇	18
14	三須島田遺跡	総社市	壺A	1	1				土壇	19
			鉢B	1		2			包含層	
15	南溝手遺跡	総社市	壺A		1				溝	20
16	窪木遺跡	総社市	壺A	3					袋状土壇、土器溜り、包含層	21
			壺C		1				溝	
17	高塚遺跡	岡山市	壺A		1				土壇	22
			壺A	1	4			1	竪穴住居、袋状土壇、土壇、包含層	
18	津寺遺跡	岡山市	壺B	1		1		1	包含層	23・24・25
			甕		1				袋状土壇	
			鉢C	1					土器溜り	
19	高松原古才遺跡	岡山市	壺C		1				河道	26
20	矢部奥田遺跡	倉敷市	鉢A				1		粘土採掘壇	27
			壺A		2		4		包含層、溝	
21	上東遺跡	倉敷市	壺C	1					包含層	28・29・30
			甕	1					溝	
22	城遺跡	倉敷市	壺C		1				斜面堆積	31
23	菰池遺跡	倉敷市	甕	1					土壇	32

## 註

- (1) 正岡陸夫「1 備前地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編』木耳社 1992  
 高畑知功「2 備中地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編』木耳社 1992  
 平井典子「備前・備中」『Y A Y !』弥生土器を語る会 1996
- (2) 兵庫県教育委員会「六角遺跡」『兵庫県文化財報告』134 1994
- (3) 兵庫県教育委員会「玉津田中遺跡」『兵庫県文化財報告』135 1996
- (4) 大阪府教育委員会『巨摩・瓜生堂』1981

(5) 徳島県教育委員会「名東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第14集 1995

## 文献

- 1 岡山県教育委員会「野田畝遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21 1977
- 2 岡山県教育委員会「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 2004
- 3 岡山県教育委員会「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192 2005
- 4 津山市教育委員会「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』8 1981
- 5 岡山県教育委員会「才地遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』178 2004
- 6 岡山県教育委員会「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191 2005
- 7 岡山県教育委員会「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105 1996
- 8 山陽町教育委員会「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査概報』(4) 1977
- 9 岡山県教育委員会「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9 1975
- 10 山陽町教育委員会「惣囿遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査概報』(2) 1971
- 11 岡山市教育委員会『赤田東遺跡』 2005
- 12 岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 1980
- 13 岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1984
- 14 岡山県教育委員会「百間川兼基遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 1982
- 15 岡山県教育委員会「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 2003
- 16 岡山県教育委員会「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004
- 17 岡山県教育委員会「津島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190 2005
- 18 岡山大学埋蔵文化財調査センター「鹿田遺跡I」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』3 1988
- 19 岡山県教育委員会「三須島田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156 2001
- 20 岡山県教育委員会「南溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 1996
- 21 岡山県教育委員会「窪木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120 1997
- 22 岡山県教育委員会「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000
- 23 岡山県教育委員会「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 1995
- 24 岡山県教育委員会「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 1997
- 25 岡山県教育委員会「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998
- 26 岡山県教育委員会「高松原古才遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』143 1999
- 27 岡山県教育委員会「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993
- 28 岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 1973
- 29 岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157 2001
- 30 岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158 2001
- 31 岡山県教育委員会「城遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』19 1977
- 32 岡山県教育委員会「菰池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71 1988

## 付載1 津島遺跡土壌サンプルの自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の分析調査では、津島遺跡西部にあたる中国財務局合同宿舎津島住宅立て替えに伴う発掘調査区における、弥生時代から古墳時代にかけての調査区の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。

### 1 調査地点・試料

分析調査は調査区1区南壁と2区東壁の2箇所の地点から採取された試料について実施する。各調査地点の堆積層の累重状況を、発掘調査時の所見および分析試料の層相に基づいて図1に示す。

1区と2区の堆積層の累重状況は類似し、図1に示すように層序対比される。調査区最下位の堆積層は灰色を呈する粘土・シルトからなり、その上位に見かけ上、塊状をなす極細粒砂混じり黒～黒褐色粘土質シルト層が累重する。この黒褐色粘土質シルト層（1区13・14層、2区11・12層）は生物擾乱の影響を強く受けており、土壤構造が発達している。腐植に富む。これらの層相から、黒褐色粘土質シルト層は安定した土壤発達が行われる期間を挟む後背湿地の堆積環境で形成されたことが推定される。本層は既往の津島遺跡の調査区でも確認されており、その形成年代は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて形成されたことが推定されている（岡山県教育委員会2004など）。

黒褐色粘土質シルト層（土壤層）の上位には灰～灰褐色を呈する極細粒砂質シルト層、その上位に暗灰色を呈する極細粒砂質シルト層が累重する（1区11・12層、2区7・8層）。見かけ上塊状をなす。生物擾乱の影響を強く受け、土壤構造が確認される。本層も安定した土壤発達がなされる期間を挟む後背湿地の堆積環境で形成されたことが推定される。ただし、下位の黒褐色粘土質シルト層に比較して、土壤構造の発達が顕著ではない。本層上面では弥生時代後期の水田が確認されている。

弥生時代後期水田の上位を氾濫堆積物である砂層（1区10層、2区6層）が覆う。氾濫堆積

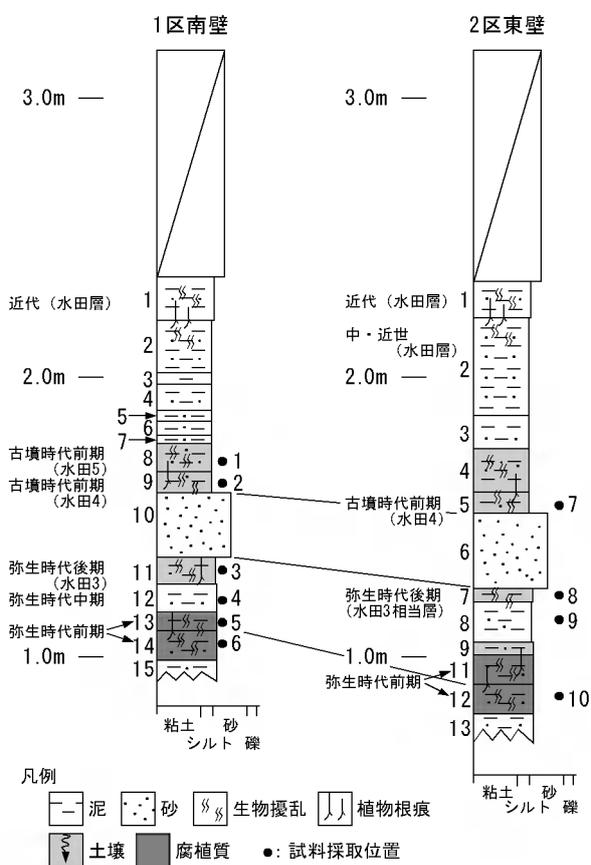


図1 調査地点の層序と試料採取位置



表1 花粉分析結果

種 類	調査区・層名・試料番号									
	1区南壁						2区東壁			
	8層	9層	11層	12層	13層	14層	5層	7層	8層	12層
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉										
マキ属	-	-	-	-	-	3	-	2	2	6
モミ属	-	-	5	4	-	23	-	11	15	19
ツガ属	1	-	8	12	1	18	3	18	44	33
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
マツ属複雑管束亜属	1	-	7	2	-	9	5	14	17	2
マツ属(亜属不明)	1	1	12	12	1	30	8	33	12	17
コウヤマキ属	4	2	45	35	4	14	1	61	65	17
スギ属	1	-	2	3	-	11	1	4	2	18
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	1	-	6	-	-	2	4
ヤマモモ属	-	-	1	2	-	5	-	4	2	1
クルミ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1
クマシデ属-アサダ属	-	-	4	1	-	9	-	3	2	7
カバノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属	-	-	1	1	-	2	1	2	1	-
ブナ属	-	-	2	6	1	2	4	10	13	5
コナラ属コナラ亜属	-	1	5	13	1	21	-	12	4	35
コナラ属アカガシ亜属	2	1	16	30	-	131	2	26	29	199
クリ属-シイノキ属	-	-	2	4	-	3	-	1	3	1
ニレ属-ケヤキ属	1	-	2	1	-	3	-	2	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	5	-	1	2	1
シキミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
センダン属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
草本花粉										
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ科	11	3	52	88	6	55	9	134	57	51
カヤツリグサ科	1	-	3	9	-	24	-	40	4	18
ミズアオイ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	1	4	2	10	2	11
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アカザ科	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1
ナデシコ科	-	-	6	9	-	1	1	7	4	3
カラマツソウ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
キンボウゲ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キカシグサ属	-	-	-	1	-	-	-	2	1	-
セリ科	-	-	1	9	-	-	-	-	1	-
アサザ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
シソ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	7	2	2	54	1	9	20	23
オナモミ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キク亜科	1	-	2	1	-	1	-	8	1	-
タンポポ亜科	-	-	1	2	-	1	-	-	-	-
不明花粉	-	-	2	6	-	2	-	4	1	8
シダ類胞子										
ヒカゲノカズラ属	8	4	20	33	4	-	2	21	18	2
ゼンマイ属	1	2	-	-	-	-	1	5	3	-
イノモトソウ属	10	11	82	101	2	4	13	94	105	1
サンショウモ	-	-	-	1	-	-	-	9	-	-
他のシダ類胞子	282	82	976	759	55	34	148	1060	809	17
合 計										
木本花粉	11	5	113	128	8	298	25	207	217	369
草本花粉	13	4	73	125	9	143	13	215	92	109
不明花粉	0	0	2	6	0	2	0	4	1	8
シダ類胞子	301	99	1078	894	61	38	164	1189	935	20
総計(不明を除く)	325	108	1264	1147	78	479	202	1611	1244	498

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

### 3 結果

#### (1) 花粉分析

結果を表 1、図 2 に示す。1 区南壁では、試料 3・4・6 で比較的多くの花粉化石が検出されたが、他の試料で検出数が少ない。また、全体的に保存状態は悪い。木本花粉をみると、下部で 40% 近くを占めていたアカガシ亜属が上部で減少し、かわってコウヤマキ属・マツ属など針葉樹花粉が増加する傾向がみられる。草本類は、イネ科やヨモギ属などが検出されるが、全体的に低率である。シダ類胞子は特に試料 3・4 で多く、花粉化石が少ない試料 1・2・5 でも比較的多く検出される。

2 区東壁でも、1 区と同様に、下位でアカガシ亜属が多く、上位でコウヤマキ属など針葉樹が多い。また、シダ類胞子の割合も上位ほど高い。草本類は、イネ科やヨモギ属などが検出されるものの、全体的に低率である。

#### (2) 植物珪酸体分析

同定・計数結果を表 2、植物珪酸体群集の相対比の層位分布を図 3 に示す。検鏡結果を元に算出した含量を表 3、植物珪酸体含量の時代別分布を図 4 に示す。今回の調査試料からは、いずれも植物珪酸体が検出されるが、全般に保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地区毎に産状を述べる。

##### ・ 1 区南壁

植物珪酸体含量は、層位的に変化する。試料 6 で約 53,000 個/g であるが、上位に向けて減少し、試料 4 で約 29,000 個/g となる。試料 3 で約 39,000 個/g に増加するが、試料 1 にかけて約 17,000 個/g に減少する。栽培植物であるイネ属は各試料から検出され、下位から上位にかけて短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体ともに増加傾向を示す。またイネ属の含量は、機動細胞珪酸体で多い。イネ属の含量は層位的に変化する。試料 6 から試料 3 にかけて増加し、試料 3 では短細胞珪酸体が約 1,800 個/g、機動細胞珪酸体が約 6,100 個/g となる。この上位では、短細胞珪酸体は減少するが、機動細胞珪酸体は試料 2 で減少するものの、試料 1 で約 3,100 個/g となる。試料 3-1 では、稲稈に形成されるイネ属類珪酸体も認められ、その含量は数百個/g 程度である。

この他には、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。この産状には、層位的な変化が見られる。試料 6 ではヨシ属の産出が目立つが、試料 5 ではススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。さらに、試料 4 より上位ではタケ亜科の産出が目立つ。

##### ・ 2 区東壁

植物珪酸体含量は、下位から上位にかけて減少し、試料 10 で約 11,600 個/g が試料 7 で約 26,000 個/g になる。栽培植物であるイネ属は、各試料から検出される。出現率は、試料 10 から上位の試料 9・8 で高くなるが、試料 7 で減少する。また、イネ属の含量は概して機動細胞珪酸体で多い。イネ属の含量は、試料 9・8 で増加し、短細胞珪酸体が約 1,400-2,000 個/g、機動細胞珪酸体が約 5,100-

表2 植物珪酸体分析結果

種 類	調査区・層名・試料番号									
	1区南壁						2区東壁			
	8層	9層	11層	12層	13層	14層	5層	7層	8層	12層
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部細胞珪酸体										
イネ族イネ属	6	8	25	8	4	6	7	20	18	6
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	-	5	-	-	1	2
タケ亜科	39	63	70	57	24	35	89	88	83	13
ヨシ属	19	33	47	57	81	283	47	75	26	239
ウシクサ族コブナグサ属	4	19	11	5	5	3	7	18	2	-
ウシクサ族ススキ属	16	20	23	41	113	48	10	15	10	59
イチゴツナギ亜科	5	8	15	6	6	2	12	8	4	6
不明キビ型	9	32	41	42	88	60	27	52	27	85
不明ヒゲシバ型	12	18	8	25	72	45	28	48	24	18
不明ダンチク型	8	17	41	22	67	37	23	40	22	31
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	45	26	83	29	9	11	7	75	58	15
タケ亜科	42	62	67	25	15	14	65	70	98	24
ヨシ属	15	18	29	14	17	90	16	14	29	174
ウシクサ族	7	6	31	18	40	46	26	42	25	52
不明	11	9	37	23	24	11	23	38	23	37
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	118	218	281	263	460	524	250	364	217	459
イネ科葉身機動細胞珪酸体	120	121	247	109	105	172	137	239	233	302
総計	238	339	528	372	565	696	387	603	450	761
珪化組織片										
イネ属類珪酸体	7	7	2	-	-	-	-	1	-	-

表3 植物珪酸体含量 (X 1,000個/g)

種 類	調査区・層名・試料番号									
	1区南壁						2区東壁			
	8層	9層	11層	12層	13層	14層	5層	7層	8層	12層
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部細胞珪酸体										
イネ族イネ属	0.42	0.60	1.84	0.63	0.26	0.46	0.48	1.37	2.00	0.92
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	-	0.38	-	-	0.11	0.31
タケ亜科	2.73	4.75	5.15	4.47	1.57	2.66	6.05	6.04	9.20	2.00
ヨシ属	1.33	2.49	3.46	4.47	5.29	21.49	3.20	5.15	2.88	36.70
ウシクサ族コブナグサ属	0.28	1.43	0.81	0.39	0.33	0.23	0.48	1.24	0.22	-
ウシクサ族ススキ属	1.12	1.51	1.69	3.22	7.39	3.65	0.68	1.03	1.11	9.06
イチゴツナギ亜科	0.35	0.60	1.10	0.47	0.39	0.15	0.82	0.55	0.44	0.92
不明キビ型	0.63	2.41	3.02	3.29	5.57	4.56	1.84	3.57	2.99	13.05
不明ヒゲシバ型	0.84	1.36	0.59	1.96	4.71	3.42	1.90	3.30	2.66	2.76
不明ダンチク型	0.56	1.28	3.02	1.73	4.38	2.81	1.56	2.75	2.44	4.76
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	3.15	1.96	6.10	2.27	0.59	0.84	0.48	5.15	6.43	2.30
タケ亜科	2.94	4.68	4.93	1.96	0.98	1.06	4.42	4.81	10.87	3.69
ヨシ属	1.05	1.36	2.13	1.10	1.11	6.84	1.09	0.96	3.22	26.72
ウシクサ族	0.49	0.45	2.28	1.41	2.61	3.49	1.77	2.88	2.77	7.99
不明	0.77	0.68	2.72	1.80	1.57	0.84	1.56	2.61	2.55	5.68
珪化組織片										
イネ属類珪酸体	0.49	0.53	0.15	-	-	-	-	0.07	-	-
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	8.26	16.44	20.66	20.63	30.06	39.80	17.00	24.99	24.06	70.48
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8.39	9.12	18.17	8.55	6.86	13.06	9.32	16.41	25.83	46.37
珪化組織片	0.49	0.53	0.15	-	-	-	-	0.07	-	-
総 計	17.14	26.09	38.98	29.17	36.92	52.86	26.31	41.74	49.90	116.85

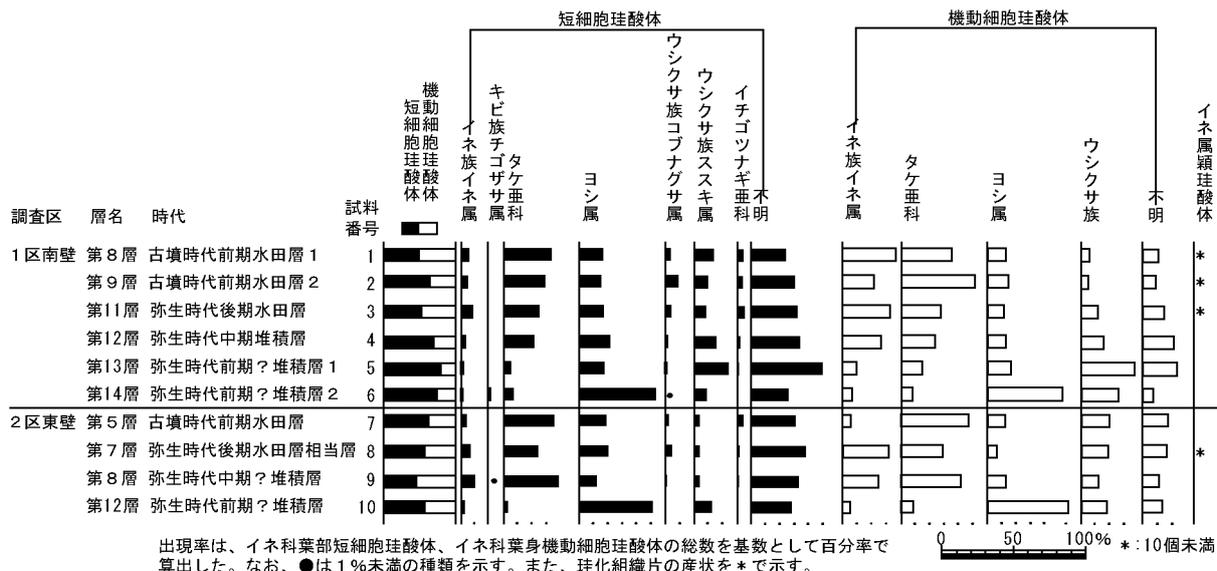


図3 植物珪酸体群集の層位分布

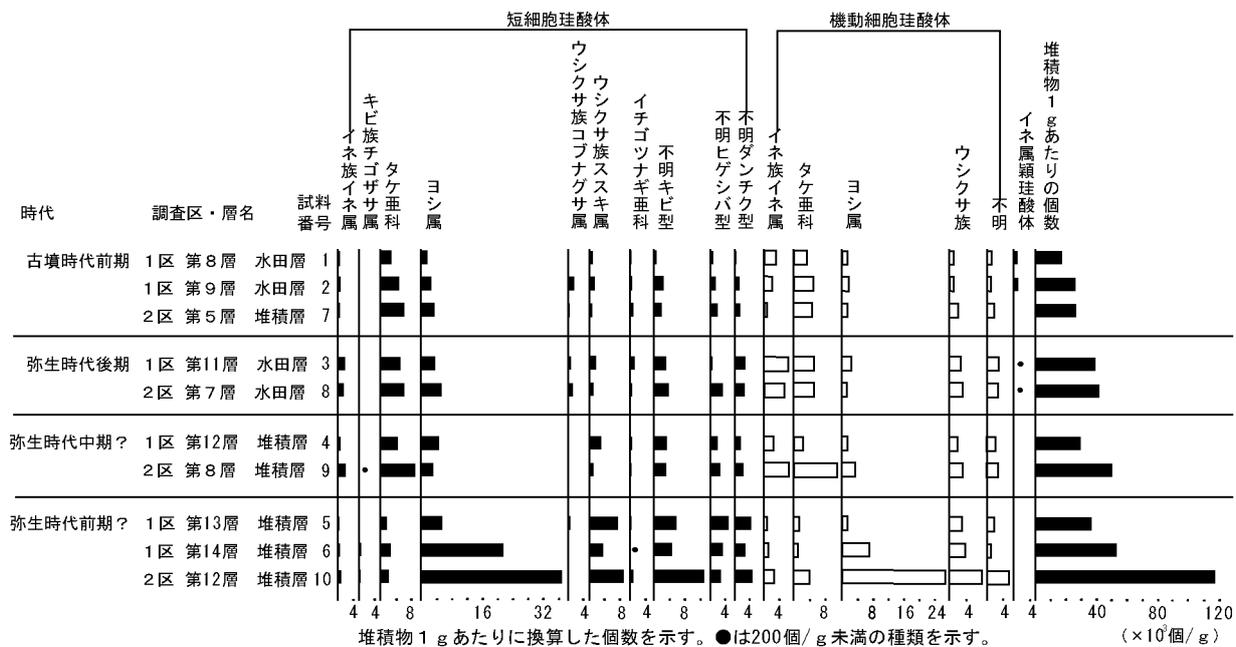


図4 植物珪酸体含量の時代別分布

6,400個/gとなる。試料8では、イネ属類珪酸体も認められる。

この他には、1区と同様な分類群が検出される。この産状には、層位的な変化が見られる。試料10ではヨシ属の産出が目立つが、試料9より上位ではタケ亜科の産出が目立つ。

・時代別の産状

1区南壁と2区東壁での産状を、発掘調査所見を元にした年代別にまとめると、以下ようになる。

いずれの地区も、弥生時代前期の堆積物からイネ属が検出される。その出現率は、いずれの地区も10%未満である。また、2区東壁の試料10(12層)では1区南壁の試料6(14層)と5(13層)よりも含量が多く、短細胞珪酸体が約900個/g、機動細胞珪酸体が約2,300個/gである。2区東壁の試料10と1区南壁の試料6ではヨシ属の産出が目立ち、特に2区東壁でのヨシ属の産出が顕著である。た

だし、1区南壁の試料5ではヨシ属よりもススキ属を含むウシクサ族の産出が目立ち、場所による産状の違いが見られる。

弥生時代中期の堆積物でもイネ属が検出され、その出現率は短細胞珪酸体で10%未満ながら、機動細胞珪酸体では20%を超える。2区東壁でイネ属の含量が多く、試料9（第8層）の短細胞珪酸体が約2,000個/g、機動細胞珪酸体が約6,400個/gである。また、いずれの地区でも下位よりヨシ属が減少し、タケ亜科の割合が高くなる。

弥生時代後期の堆積物では、イネ属の機動細胞珪酸体の出現率が30%を超える。イネ属の含量が短細胞珪酸体で1,400-1,800個/g、機動細胞珪酸体が5,100-6,100個/gとなり、2区東壁の試料8（7層水田相当層）よりも1区南壁の試料3（11層水田層）でわずかに多い。いずれの地区でも、ヨシ属よりもタケ亜科の割合が高い。

古墳時代前期の堆積物では、2区東壁でイネ属の出現率が10%未満であるが、1区南壁では機動細胞珪酸体の出現率が30%を超える。しかし、弥生時代後期の堆積物よりもイネ属の含量が少なくなる。また、タケ亜科の産出が目立つ。

## 4 考察

### (1) 調査区古環境について

津島遺跡で行われた弥生時代堆積物の花粉分析結果は、全体的に化石の保存状態が悪い（パリノ・サーヴェイ株式会社2004、株式会社古環境研究所2004）。今回の結果をみても、花粉化石の保存状態は悪く、保存の悪い試料ほどシダ類胞子や針葉樹の割合が高い傾向にある。これは、シダ類胞子や針葉樹花粉が、広葉樹花粉に比べて風化に対する耐性があるためである（徳永・山内1971など）。先述したように、堆積物の層相からは土壌が発達する期間を挟在していたことが推定されており、土壌化の影響より化石の保存状態が悪くなったものと推定される。今回の弥生時代前期～後期堆積物の花粉分析結果ではシダ類胞子や針葉樹花粉が過大評価されていることになり、その点を考慮して各時代の古環境について検討する。

弥生時代堆積物の花粉化石群集では、木本・草本花粉の比率において、下部で木本花粉が高く、上部にかけて草本花粉が増加する傾向が確認される。一方、植物珪酸体群集でも上位にかけて、多産していたヨシ属が減少し、タケ亜科やウシクサ族が増加する傾向が確認される。このような花粉・植物珪酸体組成における層位変化は、調査区ないし、その近辺の植生の変化を反映している可能性が高く、その原因としては調査区近辺の地形条件の変化や低地における人間活動との関連が考えられる。弥生時代前期堆積物では多産していたヨシ属が減少し、タケ亜科やウシクサ族が漸増するが、これは調査地点の離水が進み、タケ亜科やススキ属の生育するような乾いた場所になったことを示唆する。堆積層の層相とも同調する結果といえる。

栽培植物のイネ属は、弥生時代前期の堆積物から連続して産出する。イネ属の出現率は、弥生時代前期の堆積物で10%未満であったが、弥生時代中期や弥生時代後期の堆積物で増加する傾向が見られた。弥生時代前期の堆積物では、2区5層で10%未満であったが、1区8・9層では機動細胞珪酸体の出現率が20%を超える。現在の水田土壌に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9%であるが、稲藁を堆肥として与えている水田では16%に上がるという結果が得られている（近藤1988）。この調査例と比較すれば、弥生時代前期の堆積物や2区東壁の弥生時代

前期の堆積物（第5層）で低率、弥生時代中期や弥生時代後期の堆積物、1区南壁の弥生時代前期の堆積物（1区8層や2区9層）で高率に出現している。両区の弥生時代後期堆積物では、その上面で水田遺構が確認されており、イネ属の出現率は発掘調査所見を支持する結果と言える。また、両区の弥生時代中期堆積物は水田層とされていないが、イネ属の出現率からは稲作が行われた可能性が考えられる。

なお、両区の弥生時代前期堆積物では、1区14層や13層でイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の含量がそれぞれ1,000個/g未満、2区12層では短細胞珪酸体が約900個/g、機動細胞珪酸体が約2,300個/gである。今回の調査区の北東に位置する津島遺跡1区や9区で認められた弥生時代前期の水田層では、地点間のばらつきが見られるものの、イネ属の機動細胞珪酸体の含量が1,000個/g前後である（古環境研究所2004）。この調査例と比較すれば、2区12層では含量が多く、1区14層・13層では同等あるいは低い含量である。これらの点を考慮すれば、両地区の弥生時代前期堆積物では稲作が行われていた可能性が考えられる。ただし、水田遺構が検出されていないため、周囲の稲作地から耕土やイネ属の植物体が混入した可能性も否定できない。この点は、調査地点の堆積物で確認された擾乱の痕跡について、土壤微細構造の観察などを行い、最評価する必要がある。また、弥生時代前期や中期の堆積物では調査区間でイネ属の出現率や含量に違いが見られた。同様な傾向は津島遺跡（総合グラウンド内）で検出された弥生時代前期の水田面でも認められ、その要因として人為的な攪乱作用（水田耕作）によりバラツキが大きくなった可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社2004）。今回の地区についても同様な可能性が考えられるが、堆積環境の違いも考慮する必要がある課題である。

古墳時代前期の堆積物では、花粉化石の保存状態が悪く、弥生時代に比較して花粉化石が保存されにくい状況にあったことが窺える。植物珪酸体群集をみると、弥生時代に比較して、タケ亜科や栽培種のイネ属が相対的に増加している。調査区の状況が、さらに変化したことを示唆する。栽培種のイネ属の産状は、発掘調査によって水田遺構が確認されていることと同調する結果といえる。

## （2）周辺森林植生について

上記した花粉化石の保存状態を考慮して、シダ類孢子と針葉樹花粉を除いて考えると、今回の花粉化石群集はアカガシ亜属の割合が高く、シイノキ属、シキミ属、センダン属など暖温帯林に特徴的な種類が多い傾向が窺える。このような傾向は、第三次確認調査時の北池・南池地点の花粉分析結果（古環境研究所, 2004）でも確認されているほか、本遺跡周辺で行われた同時期の花粉化石群集とも類似する（三好・多田1988、パリノ・サーヴェイ株式会社1993など）。瀬戸内地区の古植生変遷についてまとめた例によれば、縄文海進最盛期以降の花粉化石群集は、アカガシ亜属が優勢で、シイノキ属を伴う組成が続く。その後、冷涼・多雨化したと考えられる弥生時代～古墳時代に入っても、針葉樹や落葉樹が若干増加する傾向がみられるものの、基本的には大きな変化がないとされる（三好1998）。これらのことから、当時は丘陵上を中心としてシイやカシなどの暖温帯林であったと推測される。また、モミ属やツガ属、コウヤマキ属などの温帯性針葉樹の花粉化石も検出されており、これらはより標高の高い地域（中国山地）に由来すると思われる。今回の結果をみると、温帯性針葉樹の割合が他の分析成果と比べて高いが、これは先にも述べたように、風化に耐性のある種類が見かけ上多くなっているためと推測される。

一方、百間川原尾島遺跡の種実分析結果をみると、トチノキ、オニグルミ、ナラ類など落葉広葉樹

が主体である（パリノ・サーヴェイ株式会社1995）。津島遺跡の立地を考慮すれば、丘陵地との林縁部には、トチノキ、オニグルミ、ナラ類をはじめ、花粉化石で検出されるエノキ属－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属など湿地を好む落葉樹を主とした植生であったと思われる。また、今回の弥生時代前期および後期層準の結果をみると、マツ属が比較的多い。これも風化に耐性のある種類が見かけ上多くなっている可能性があるが、百間川遺跡群では弥生時代後期にマツ属が多産する地点も存在することから（パリノ・サーヴェイ株式会社 未公表）、人為的な植生破壊に伴うマツ二次林の増加に由来する可能性もある。

## 引用文献

- 株式会社古環境研究所 2004「津島遺跡 第三次確認調査の自然科学分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』  
181 岡山県教育委員会 185-204
- 近藤鍊三 1988「十二遺跡土壌の植物珪酸体分析」『鑄師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－』御代田町教育委員会 377-383
- 近藤鍊三 2004「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48 46-64
- 三好教夫・多田由美子 1988「原遺跡(岡山県御津町)と津島江道遺跡(岡山市)の花粉分析」『鎌木義昌先生古稀記念論文集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会 437-444
- 三好教夫 1998「中国・四国地方の植生史」安田喜憲・三好教夫編『図説 日本列島植生史』朝倉書店  
138-150
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1993「植物化石分析報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会 405-426
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995「百間川原尾島遺跡出土の種実同定」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』  
97 岡山県教育委員会 286-289
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004「津島遺跡における弥生時代の古環境解析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 165-184
- 徳永重元・山内輝子 1971『花粉・胞子・化石の研究法』共立出版株式会社 50-73

## 付載 2 遺構一覽表

- 凡例 1 火処・水田・自然流路は省略した。  
2 「-」は不明項目、「(数字)」は残存値を示す。

### 竪穴住居

遺構名	掲載図	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	底面海拔高(cm)	中央穴(cm)			焼土面	壁体溝	時期	備考
						形状	長×短	深さ				
竪穴住居	第4図	-	-	-	178	円	76×73	49.5	-	-	弥生時代中期	

### 焼成土壇・土壇

遺構名	掲載図	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高(cm)	時期	備考
焼成土壇	第11図	方形	-	205	(165)	31	160	弥生時代中期	壁体溝あり、中央に炉
土壇1	第5図	円形	袋状	125	121	69	108	弥生時代中期	
土壇2	第14図	隅丸方形	方形	130	100	40	146	弥生時代中期	
土壇3	第15図	楕円形	皿形	90	55	10	156	弥生時代中期	
土壇4	第16図	円形	方形	60	-	30	148	弥生時代中期	
土壇5	第16図	楕円形	椀形	126	97	9	147	弥生時代中期	
土壇6	第16図	円形	逆台形	90	-	13	155	弥生時代中期	
土壇7	第16図	不整形	椀形	83	77	11	157	弥生時代中期	
土壇8	第16図	-	椀形	(70)	(26)	9	155	弥生時代中期	
土壇9	第16図	楕円形	椀形	65	56	11	154	弥生時代中期	
土壇10	第16図	円形	逆台形	140	118	53	61	弥生時代中期	
土壇11	第16図	楕円形	逆台形	130	115	61	54	弥生時代中期	
土壇12	第16図	円形	逆台形	91	83	38	54	弥生時代中期	
土壇13	第17図	円形	逆台形	161	149	35	81	弥生時代中期	

### 溝

遺構名	掲載図	規模(cm)			断面形	時期	備考
		上端幅	底面幅	深さ			
溝1	第4図	45	6	58	逆台形	弥生時代中期	溝9と同一の可能性あり
溝2	第20図	26	12	3	皿形	弥生時代中～後期	
溝3	第20図	30	11	12	椀形	弥生時代中～後期	
溝4	第20図	38	18	9	皿形	弥生時代中～後期	
溝5	第20図	36	14	6	皿形	弥生時代中～後期	
溝6	第20図	29	14	6	皿形	弥生時代中期	
溝7	第20図	246	75	31	椀形	弥生時代後期後半	
溝8	第20図	(50)	(72)	30	椀形	弥生時代中期	
溝9	第20図	195	25	56	逆台形	弥生時代後期後半	底面に鋤痕、溝1と同一の可能性
溝10	第20図	67	21	21	椀形	弥生時代後期	
溝11	第20図	55	13	35	逆台形	弥生時代後期	
溝12	第20図	246	8	4	皿形	弥生時代後期	
溝13	第20図	33	12	12	椀形	弥生時代後期	
溝14	第20図	14	11	11	皿形	弥生時代後期	微高地と水田域を画す
溝15	第20図	37	22	11	椀形	弥生時代中期	
溝16	第20図	21	8	6	皿形	弥生時代中期	
溝17	第20図	21	6	4	皿形	弥生時代中期	
溝18	第20図	33	19	12	椀形	弥生時代前期	ピットが連続する形態をなす
溝19	第20図	42	14	15	椀形・皿形	弥生時代前期	ピットが連続する形態をなす
溝20	第27図	38	17	7	皿形	古墳時代前期	
溝21	第27図	64	34	12	椀形	古墳時代前期	
溝22	第27図	6	32	10	皿形	古墳時代前期	水田4の畦畔に沿う
溝23	第27図	151	112	6	皿形	古墳時代前期	水田4の畦畔に沿う
溝24	第27図	26	10	4	皿形	古墳時代前期	
溝25	第27図	20	8	4	皿形	古墳時代前期	
溝26	第27図	34	18	7	皿形	古墳時代前期	
溝27	第27図	36	14	16	皿形・椀形	古墳時代前期	水田4の畦畔に沿う
溝28	第27図	54	31	13	椀形	古墳時代前期	
溝29	第27図	106	58	6	逆台形	古墳時代前期	
溝30	第30図	92	53	9	皿形	中世	
溝31	第30図	42	18	4	皿形	中世	
溝32	第30図	25	10	2	皿形	中世	

# 付載3 遺物観察表

凡例 1 「-」は不明項目、「(数字)」は残存値を示す。

2 色調は、基本的に「新版標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修)による。

## 土 器

掲載 番号	出土 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			調整・特徴	胎土	色調	焼成	備考
				口径	底径	器高					
1	竪穴 住居	弥生 土器	壺	24.2	-	(20.3)	口縁：凹線5条、棒状浮文 内面：ヨコナデ、ナデ	長石、石英、黒色粒、 赤色土粒	にぶい橙	良好	
2	竪穴 住居	弥生 土器	壺	29.9	-	(13.7)	口縁：凹線8条、棒状浮文、 竹管文 頸部：凹線9条 外面：タテハケ	長石、石英、雲母	にぶい黄橙	良好	
3	竪穴 住居	弥生 土器	甕	-	8.8	(6.0)	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	長石、石英、雲母、 金蓮母	にぶい黄橙	良好	
4	竪穴 住居	弥生 土器	高杯	22.7	12.6	19.7	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ 頸部下に刻目突帯	長石、石英、雲母	にぶい黄橙	良好	完形
5	焼成 土壇	弥生 土器	壺	10.0	-	(8.5)	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	長石、石英、雲母、 金蓮母	灰白	良好	
6	焼成 土壇	弥生 土器	甕	17.4	-	(3.0)	口縁：凹線3条 内面：ナデ	長石、石英、雲母	灰白	良好	
7	焼成 土壇	弥生 土器	甕	-	5.9	(2.8)	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	長石、石英、雲母	にぶい黄橙	良好	
8	火処	弥生 土器	甕	15.3	-	6.0	口縁部穿孔(2孔1対)、黒斑 内外面：ヘラミガキ	長石、石英、赤色土粒	にぶい黄橙	良好	
9	火処	弥生 土器	甕	-	5.1	9.5	外面：ヘラミガキ、煤 内面：ヘラケズリ	長石、石英、赤色土粒	外面：灰黄褐 内面：黄灰	良好	
10	火処	弥生 土器	甕	-	5.0	4.5	内外面：ナデ 黒斑、煤	長石、石英、赤色土粒	外面：褐灰 内面：灰黄	良好	
11	火処	弥生 土器	甕	-	4.7	7.4	外面：ヘラミガキ、黒斑、煤 内面：ヘラケズリ	長石、石英、黒色粒、 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 内面：灰黄	良好	
12	土壇2	弥生 土器	壺	9.4	-	4.2	外面：凹線5条 内面：ヨコナデ	長石、石英、赤色土粒	外面：灰白 内面：褐灰	良好	
13	土壇13	弥生 土器	甕	11.0	-	(9.3)	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ナデ	長石、石英、雲母	灰黄	良好	
14	水田3	弥生 土器	甕	15.2	-	(4.3)	口縁：凹線3条 外面：ハケメ、煤 内面：ナデ、ヘラケズリ	長石、石英	にぶい黄橙	良好	
15	水田4	弥生 土器	高杯	22.0	-	(4.7)	内外面：ヘラミガキ	長石、石英	外面：灰白 内面：橙	良好	
16	溝7	弥生 土器	甕	10.4	-	(7.8)	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	長石、石英	外面：にぶい黄橙 内面：灰白	良好	
17	溝7	弥生 土器	ミニチュア 鉢	6.5	-	(5.1)	外面：ユビオサエ、黒斑 内面：ナデ	長石、石英	にぶい黄橙	良好	
18	溝7	弥生 土器	甕	18.9	-	(3.6)	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	長石、石英、雲母	にぶい橙	良好	
19	溝7	弥生 土器	高杯	29.2	-	(3.5)	内外面：ヘラミガキ	長石、石英、赤色 土粒、雲母、角閃石	橙	良好	
20	溝8	弥生 土器	鉢	15.2	-	(6.8)	内外面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	外面：浅黄橙 内面：にぶい黄橙	良好	
21	溝8	弥生 土器	甕	27.0	-	(5.4)	内外面：ハケメ	長石、石英、雲母	灰黄褐	良好	
22	溝8	弥生 土器	甕	27.2	-	(6.4)	口縁：凹線6条 頸部：突帯 外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	長石、石英、角閃石	外面：褐灰 内面：黄灰	良好	
23	溝8	弥生 土器	高杯	23.8	-	(4.0)	内外面：ヘラミガキ	石英	灰白	良好	
24	溝8	弥生 土器	鉢	22.3	-	(6.0)	外面：凹線8条 内面：ナデ	長石、石英、雲母	褐灰	良好	
25	溝9	弥生 土器	壺	15.6	-	(9.4)	外面：タテ方向のミガキ 内面：ヨコナデ、ナデ	長石、石英、角閃石 雲母	にぶい橙	良好	
26	溝9	弥生 土器	甕	17.2	-	(6.5)	口縁：ヨコナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	長石、石英、雲母 赤色土粒	外面：灰黄褐 内面：にぶい黄橙	良好	
27	溝9	弥生 土器	甕	14.0	-	(6.8)	外面：ハケメ 内面：ヘラミガキ	長石、石英、雲母	にぶい黄橙	良好	
28	溝9	弥生 土器	鉢	14.0	5.2	(11.6)	外面：ヘラミガキ、黒斑 内面：ナデ、ヘラミガキ	長石、石英、角閃石、 雲母	にぶい黄橙	良好	
29	溝9	弥生 土器	ミニチュア 鉢	9.2	-	(4.4)	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラケズリ	長石、石英	外面：にぶい黄橙 内面：橙	良好	
30	溝9	弥生 土器	鉢	18.5	5.3	(7.4)	内外面：ヘラミガキ	長石、石英、赤色土粒	外面：にぶい黄橙 内面：橙	良好	
31	溝13	弥生 土器	高杯	-	-	(3.4)	内外面：ヘラミガキ	長石、石英、赤色土粒	外面：橙 内面：灰白	良好	
32	溝15	弥生 土器	鉢	11.5	-	(3.6)	外面：凹線8条、ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	長石、石英、 赤色土粒、黒色粒	外面：にぶい黄橙 内面：灰白	良好	
33	溝14	弥生 土器	甕	14.0	-	(5.2)	外面：ハケメ、煤 内面：ヘラケズリ	長石、石英、赤色土粒	にぶい黄橙	良好	
34	溝14	弥生 土器	高杯	22.8	-	(3.5)	外面：ヨコ方向のミガキ 内面：ヘラミガキ	長石、石英、赤色土粒	灰白	良好	
35	自然 流路	弥生 土器	蓋	18.8	-	9.7	外面：調整不明、黒斑 内面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	外面：赤褐色 内面：にぶい橙	良好	
36		弥生 土器	壺	13.0	-	(5.2)	口縁：凹線3条 外面：ハケメ 内面：ナデ、ユビオサエ	長石、石英、雲母	にぶい黄橙	良好	

## 土器

掲載 番号	出土 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			調整・特徴	胎土	色調	焼成	備考
				口径	底径	器高					
37		弥生 土器	壺	14.3	-	(8.75)	口縁：凹線3条 頸部：凹線6条 内面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	外面：浅黄橙 内面：にぶい黄橙	良好	
38		弥生 土器	壺	14.0	-	(8.7)	口縁・頸部：凹線4条、黒斑 内面：ナデ	長石、石英、雲母、 角閃石	にぶい黄橙	良好	
39		弥生 土器	壺	16.6	-	(8.0)	外面：タテハケ後沈線12条 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	長石、石英	浅黄	良好	
40		弥生 土器	壺	-	7.1	(4.4)	外面：ヘラミガキ、黒斑 内面：ナデ	長石、石英	灰白	良好	
41		弥生 土器	壺	-	-	(9.8)	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ 頸部下に刻目突帯	長石、石英、赤色土粒	外面：にぶい黄橙 内面：暗灰黄	良好	
42		弥生 土器	甕	14.9	-	(7.4)	口縁：ヨコナデ 外面：ハケメ 内面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	にぶい黄橙	良好	
43		弥生 土器	甕	12.2	-	(6.3)	口縁：凹線3条、ヨコナデ 内面：ナデ	長石、石英、雲母	灰黄	良好	
44		弥生 土器	甕	7.0	-	(4.0)	外面：ハケメ、黒斑 内面：ナデ、ヘラケズリ	長石、石英	にぶい橙	良好	
45		弥生 土器	甕	14.7	-	(6.0)	口縁：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	長石、石英、金雲母、 角閃石	にぶい黄橙	良好	
46		弥生 土器	甕	31.9	-	(6.1)	外面：指頭圧痕突帯文 内面：ナデ、ハケメ	長石、石英、赤色土粒	にぶい黄橙	良好	
47		弥生 土器	甕	24.0	-	(4.5)	外面：ハケメ 内面：ナデ 玉縁状口縁	長石、石英、雲母	外面：にぶい黄橙 内面：褐灰	良好	
48		弥生 土器	高杯	-	17.0	(4.4)	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	長石、石英、 赤色土粒、雲母	外面：灰黄 内面：にぶい橙	良好	
49		弥生 土器	高杯	-	7.2	(7.2)	内外面：ナデ	長石、石英、雲母	灰白	良好	
50		弥生 土器	高杯	-	9.1	(2.5)	外面：ナデ、裾部に鋸歯文 内面：ヘラケズリ	長石、石英、 赤色土粒、雲母	にぶい黄橙	良好	
51		弥生 土器	高杯	-	9.5	(6.5)	外面：ナデ、ヘラミガキ 内面：ナデ	長石、石英、 赤色土粒、角閃石	にぶい黄橙	良好	
52		弥生 土器	高杯	-	-	(3.8)	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラミガキ	長石、赤色土粒	外面：にぶい橙 内面：にぶい黄橙	良好	
53		弥生 土器	高杯	-	11.9	(5.0)	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、ミガキ	長石、赤色土粒	橙	良好	
54		弥生 土器	高杯	-	8.6	(6.1)	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	長石、石英、赤色土粒	外面：灰白 内面：淡黄	良好	
55		弥生 土器	鉢	11.2	-	(6.2)	口縁：ヨコナデ 内面：ナデ 玉縁状口縁	長石、石英、赤色土粒	外面：灰白 内面：にぶい黄橙	良好	
56		弥生 土器	ジヨッキ形 鉢	-	7.6	(3.4)	内外面：ナデ 斜めの貫通孔（2孔1対）	長石、石英	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい橙	良好	
57		弥生 土器	鉢	-	5.2	(3.5)	内外面：ヘラミガキ、ナデ	長石、石英、雲母	灰白	良好	
58		弥生 土器	台付鉢	-	4.2	(3.7)	内外面：ナデ	長石、石英、赤色土粒 水こし粘土	にぶい黄橙	良好	
59		弥生 土器	ミニチュア 鉢	3.8	1.9	4.8	外面：ナデ、鬚描文、黒斑 内面：ナデ、ユビオサエ	長石、石英	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙	良好	
60		弥生 土器	鉢	7.2	4.8	7.2	内外面：ナデ、ユビオサエ	長石、石英、赤色土粒	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい橙	良好	
61		弥生 土器	鉢	8.3	-	(6.2)	内外面：ナデ 黒斑	長石、赤色土粒 水こし粘土	橙	良好	
62		弥生 土器	器台	-	24.8	(8.7)	外面：ハケメ 内面：ナデ 黒斑	長石、石英、雲母 角閃石	にぶい橙	良好	
63		弥生 土器	回転 台形	29.2	-	(6.0)	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	長石、石英	外面：にぶい黄橙 内面：褐灰	良好	
64		須恵器	杯蓋	15.5	-	4.7	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石、石英、黒色粒	灰	良好	
65		須恵器	杯蓋	-	-	(3.0)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石	灰白	良好	
66		須恵器	杯身	10.5	-	(3.0)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石	灰白	良好	
67		須恵器	杯身	13.5	-	(3.5)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石、石英	灰白	良好	
68		須恵器	杯身	11.7	-	(2.4)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石	灰	良好	
69		須恵器	高杯	-	-	(3.1)	外面：ヘラケズリ、自然釉 内面：ナデ	長石	灰白	良好	
70		須恵器	高杯	-	-	(3.9)	外面：カキメ、ヘラケズリ 内面：ナデ	長石	灰白	良好	
71		須恵器	杯身	-	10.0	(4.8)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石	灰白	良好	
72		須恵器	杯身	-	9.3	(1.1)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石、石英	灰白	良好	
73		須恵器	杯蓋	-	-	(1.4)	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	長石、石英、黒色粒	外面：灰白 内面：灰	良好	
74		緑釉 陶器	椀	-	9.0	(2.0)	施釉、高台内露胎 見込に1条の沈線	精良	緑釉：暗緑灰 素地：浅黄橙	不良	近江 産
75		土師器	椀	-	5.8	(1.4)	内外面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	灰黄	良好	
76		土師器	椀	-	6.5	(1.2)	内外面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	灰白	良好	
77		土師器	椀	-	4.2	0.9	内外面：ナデ	長石、石英、赤色土粒	灰白	良好	
78	溝32	土師器	皿	8.2	6.1	1.5	内外面：ナデ	長石、石英	にぶい黄橙	良好	
79		白磁	椀	-	-	(2.3)	施釉 内外面：ナデ	精良	釉薬・素地：灰白	堅緻	

土 器

掲載 番号	出土 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			調整・特徴	胎土	色調	焼成	備考
				口径	底径	器高					
80		白磁	椀	16.3	-	(4.4)	施釉、外面下部露胎 口縁部：ヨコナデ	精良	釉薬：灰オリーブ 素地：灰白	堅緻	
81		備前焼	掃鉢	-	-	(5.1)	内外面：ヨコナデ 楯目	長石、石英、赤色土粒	にぶい黄橙	良好	
82		備前焼	掃鉢	-	-	(4.7)	内外面：ヨコナデ 楯目	長石	黄灰	良好	

石器・石製品

掲載 番号	出土 遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	残存 状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S 1	竪穴住居	石包丁	88.5	38.0	9.0	45.24	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 2	水田3	石 鏃	26.0	16.0	3.5	1.49	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 3	水田3	石 鏃	20.5	14.0	2.5	0.72	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 4	溝7	石 錐	18.5	8.0	2.8	0.3	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 5	溝8	石 斧	(49.0)	58.0	41.0	144.51		弥生時代	欠損	
S 6	溝9	石包丁	38.5	42.5	8.0	19.47	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 7	溝9	石 錐	49.5	35.5	7.0	12.31	サヌカイト	弥生時代	完形	石包丁転用か
S 8	溝11	石 鏃	34.5	18.0	3.0	1.56	サヌカイト	弥生時代	やや欠損	
S 9	溝11	石 鏃	32.5	12.0	5.0	2.02	サヌカイト	弥生時代	やや欠損	
S 10	自然流路	石 核	148.0	188.0	35.0	877.34	サヌカイト	弥生時代前期	完形	
S 11		石 鏃	56.0	18.0	6.0	6.82	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 12		石 鏃	36.5	18.0	4.5	3.15	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 13		石 鏃	32.0	15.5	5.5	2.85	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 14		石 鏃	29.0	16.0	5.0	2.26	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 15		石 鏃	34.0	21.0	3.5	1.8	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 16		石 鏃	(22.0)	21.0	4.0	1.67	サヌカイト	弥生時代	欠損	
S 17		石 鏃	28.5	17.5	4.0	1.88	サヌカイト	弥生時代	やや欠損	
S 18		石 鏃	26.0	18.5	6.0	1.97	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 19		石 鏃	25.0	15.5	3.0	1.17	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 20		石 鏃	20.5	16.0	4.0	0.93	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 21		石 鏃	17.5	15.0	3.0	0.73	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 22		石包丁	92.0	4.0	9.5	48.97	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 23	スクレーパー		49.0	49.0	8.5	20.39	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 24	スクレーパー		70.0	39.0	11.5	27.82	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 25		楔	24.0	42.0	9.0	15.01	サヌカイト	弥生時代	完形	石包丁転用か
S 26		石 錐	24.0	12.0	5.0	1.32	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 27		砥石	42.5	17.0	14.5	17.32		弥生時代	完形	

土製品

掲載 番号	出土 遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	残存 状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
C 1	焼成土壙	分銅形	(47.10)	71.98	14.27	55.22	黄灰	弥生時代	欠損	
C 2	溝7	人形	(42.0)	23.5	25.0	9.88	浅黄橙	弥生時代	欠損	頭部欠損、黒斑
C 3	溝7	分銅形	-	-	-	12.55	灰白	弥生時代	欠損	表面風化、赤色顔料
C 4	溝7	不明	26.2	11.7	2.8	3.31	にぶい黄橙	弥生時代	完形	貫通しない穿孔
C 5	溝9	分銅形	32.2	29.0	7.9	5.3	にぶい黄橙	弥生時代	完形	無文
C 6		円盤	37.8	39.7	6.7	14.90	灰	古墳時代後期	完形	甕の転用

ガラス製品

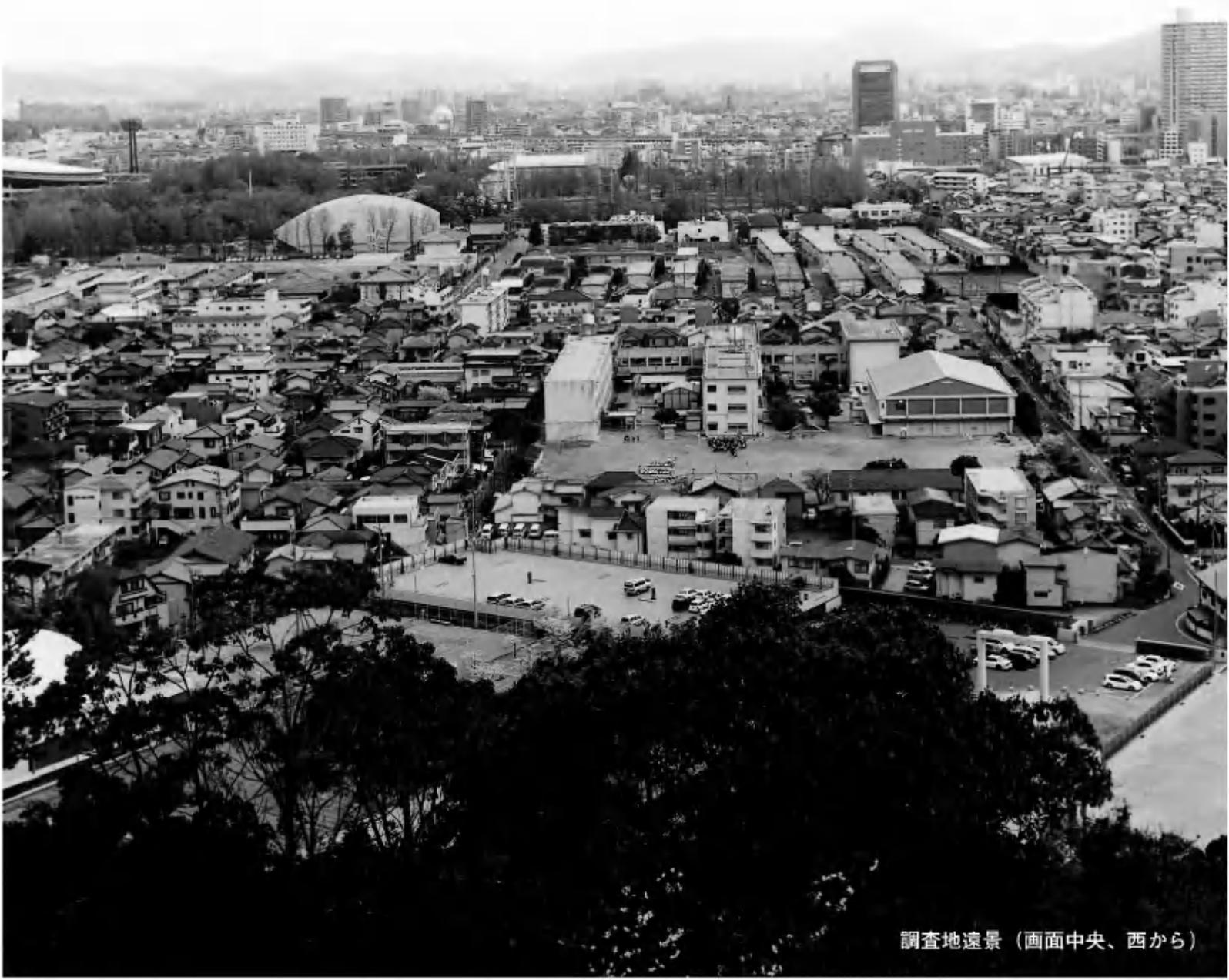
掲載 番号	出土 遺構名	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	穿孔	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
G 1		小玉	2.92	4.13	-	1.34~1.61	0.06	両面	セルリアンブルー	完形

## 付載 4 新旧遺構名称対照表

- 凡例 1 保管図面・遺物等に記された遺構名は、下記「調査時遺構名」による。  
 2 「調査区名」は、確認調査トレンチ番号および第7図に示した区分である。

時 代	掲載遺構名	調査年度	調査区名	調査時遺構名	
弥生時代	竪穴住居	H15	T 3	No.1 住居	
	焼成土壙	H17	1 区	No.28 竪穴住居状遺構	
	火処 1	H17	1 区	No.31 火処	
	火処 2	H17	1 区	No.42 火処	
	土壙 1	H15	T 3	No.3 土壙	
	土壙 2	H17	1 区	No.24 土壙	
	土壙 3	H17	1 区	No.43 土壙	
	土壙 4	H17	1 区	No.32 土壙	
	土壙 5	H17	1 区	No.27 土壙	
	土壙 6	H17	1 区	No.25 土壙	
	土壙 7	H17	1 区	No.39 土壙	
	土壙 8	H17	1 区	No.36 土壙	
	土壙 9	H17	1 区	No.37 土壙	
	土壙10	H17	2 A 区	No.8 土壙	
	土壙11	H17	2 A 区	No.6 土壙	
	土壙12	H17	2 A 区	No.10 土壙	
	土壙13	H17	2 A 区	No.7 土壙	
	水田 1	H17	4 区	No.13 水田	
	水田 2	H17	4 区	No.12 水田	
	水田 3	H17	1 区	No.16 水田	
	足跡状痕跡	H17	4 区	No.14 足跡	
	溝 1	H15	T 3	No.2 溝	
	溝 2	H17	4 区	No.7 溝	
	溝 3	H17	4 区	No.8 溝	
	溝 4	H17	2 B 区	No.5 溝	
	溝 5	H17	2 A 区	No.5 溝	
	溝 6	H17	2 A 区	No.9 溝	
	溝 7	H17	2 A 区 3 区	No.3 溝 No.3 溝	
	溝 8	H17	3 区	No.2 溝	
	溝 9	H17	1 区 3 区	No.6 溝 No.1 溝	
	溝10	H17	1 区	No.9 溝	
	溝11	H17	1 区	No.8 溝・No.10 溝	
	溝12	H17	1 区	No.18 溝	
	溝13	H17	1 区	No.19 溝	
	溝14	H17	1 区	No.17 溝	
	溝15	H17	1 区	No.20 溝	
	溝16	H17	1 区	No.21 溝	
	溝17	H17	1 区	No.22 溝・No.23 溝	
	溝18	H17	1 区	No.45 溝	
溝19	H17	1 区	No.44 溝		
古墳時代	土壙14	H17	1 区	No.15 土壙	
	水田 4	H17	1 区 2 B 区 4 区	No.11 水田 No.1 水田 No.1 水田	
	水田 5	H17	1 区	No.4 水田	
	溝20	H17	4 区	No.2 溝	
	溝21	H17	4 区	No.6 溝	
	溝22	H17	4 区		
	溝23	H17	4 区		
	溝24	H17	4 区		
	溝25	H17	4 区	No.4 溝	
	溝26	H17	2 B 区 4 区	No.4 溝 No.3 溝	
	溝27	H17	1 区 2 B 区 4 区	No.13 溝・No.14 溝 No.2 溝 No.5 溝	
	溝28	H17	2 B 区	No.3 溝	
	溝29	H17	1 区	No.12 溝	
	中 世	溝30	H17	1 区	No.1 溝
		溝31	H17	1 区	No.2 溝
		溝32	H17	1 区	No.3 溝

# 図 版



調査地遠景（画面中央、西から）

## 図 版

1 調査地周辺全景（南西から）

### 弥生時代

2 調査区南部微高地と低位部（南から）

3-1 焼成土壇（北東から）

3-2 土壇2（南東から）

3-3 土壇4（南から）

3-4 土壇10（東から）

3-5 土壇12（北西から）

4-1 水田1（北東から）

4-2 水田2（北東から）

5 水田3（北西から）

6-1 足跡状痕跡（南東から）

6-2 溝3（北東から）

6-3 溝4（西から）

6-4 溝19（南東から）

7-1 溝9・溝11（北東から）

7-2 溝9底面の鋤痕跡（北東から）

7-3 溝7（北から）

### 古墳時代

8 水田5（南東から）

### 遺 物

9 弥生土器

10-1 土製品

10-2 石 鏟

10-3 その他の石器

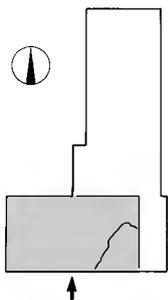


調査地周辺全景（南西から）

図版 2

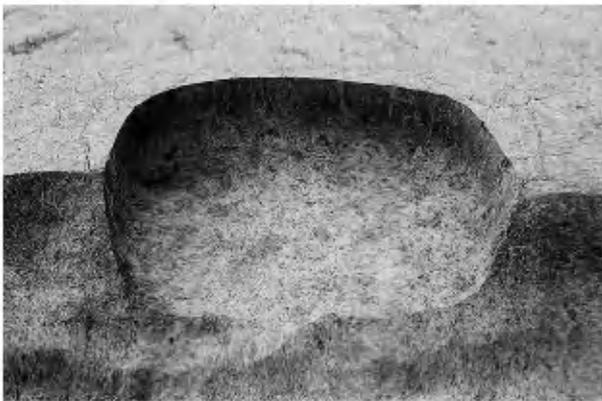


調査区南部微高地と低位部（南から）





1 焼成土壇（北東から）



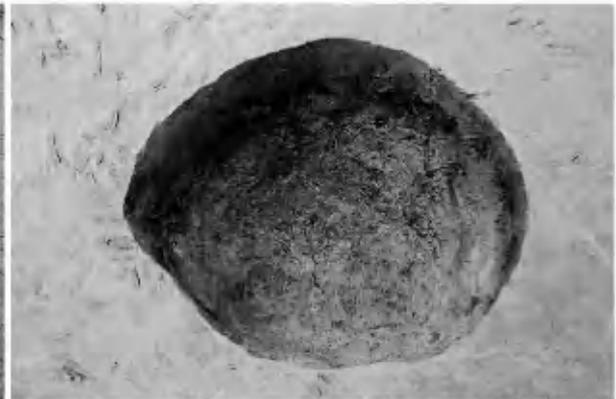
2 土壇 2（南東から）



3 土壇 4（南から）



4 土壇10（東から）



5 土壇12（北西から）

図版 4



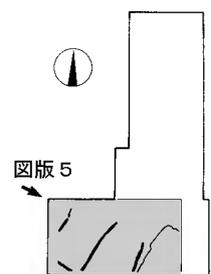
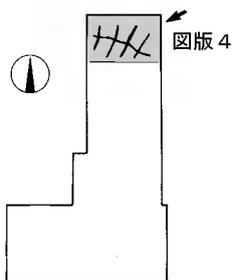
1 水田 1 (北東から)



2 水田 2 (北東から)



水田 3 (北西から)



図版 6



1 足跡状痕跡（南東から）



2 溝3（北東から）



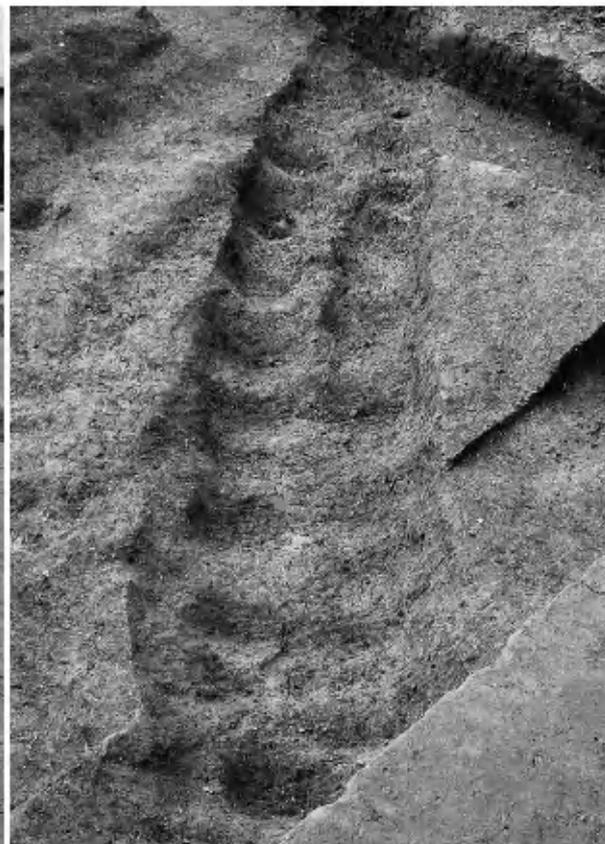
3 溝4（西から）



4 溝19（南東から）



1 溝9・溝11（北東から）



2 溝9底面の鋤痕跡（北東から）

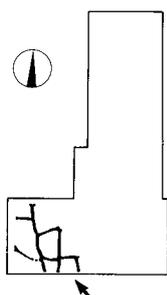


3 溝7（北から）

図版 8



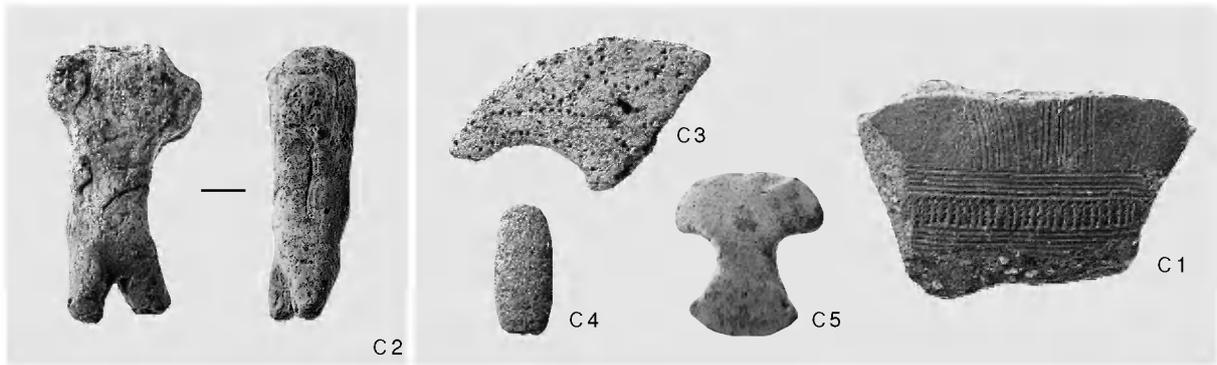
水田 5 (南東から)



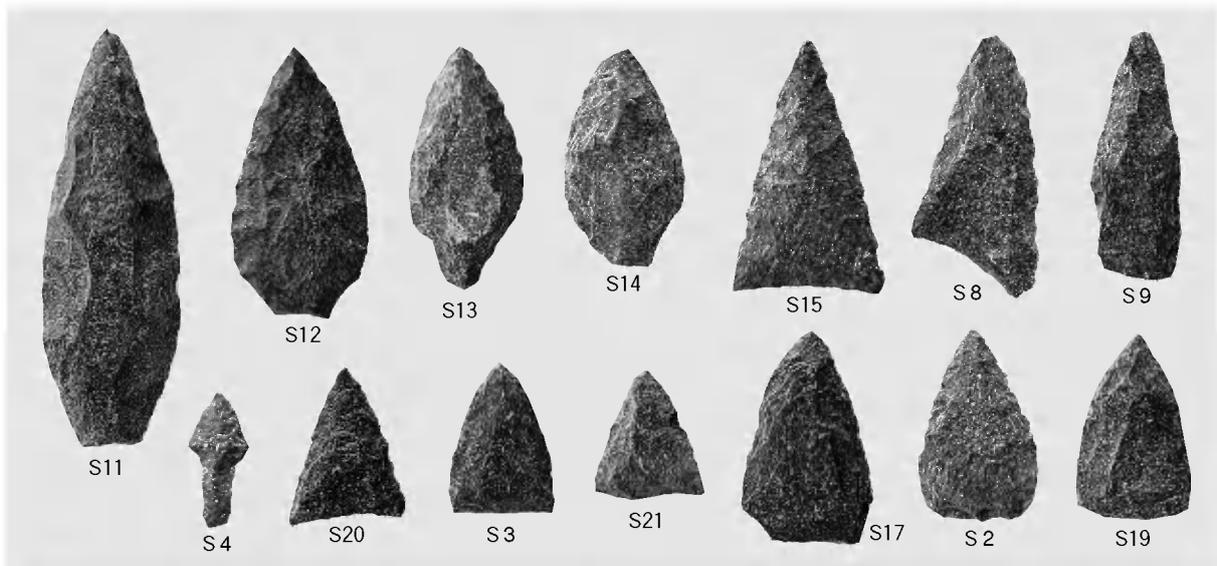


弥生土器

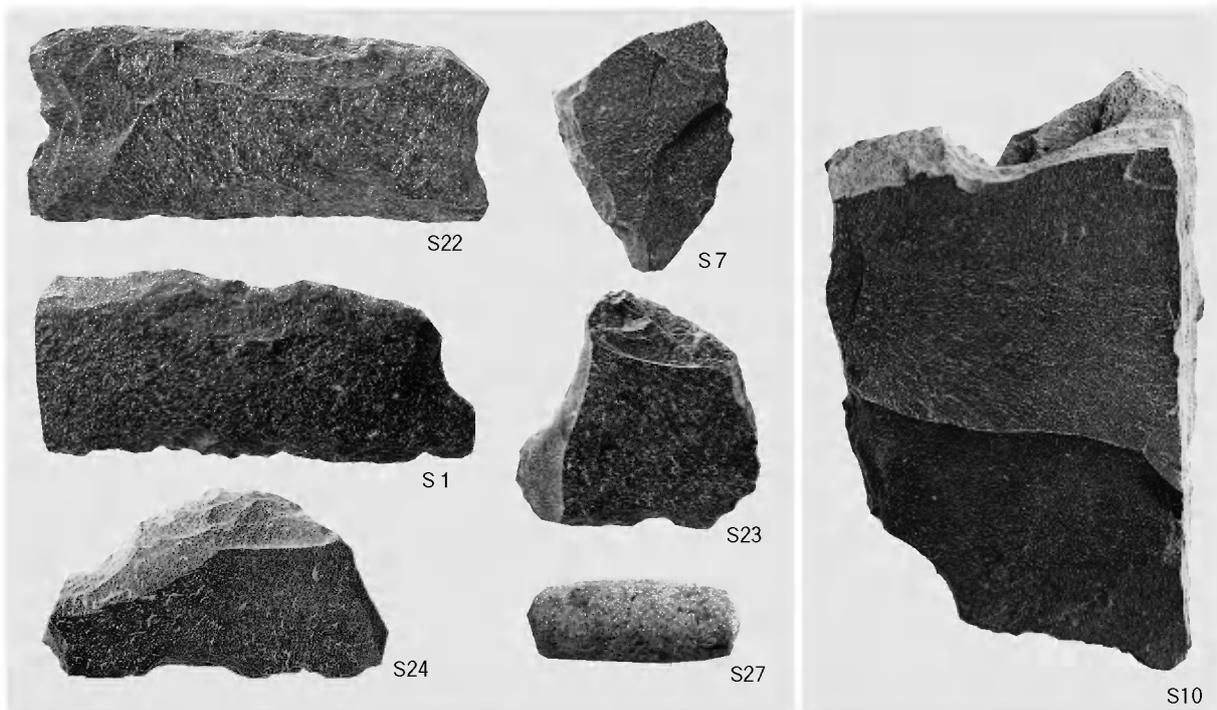
図版10



1 土製品



2 石 鏃



3 その他の石器

## 報告書抄録

ふりがな	つしまいせき							
書名	津島遺跡							
副書名	中国財務局合同宿舍津島住宅建て替えに伴う発掘調査							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	206							
編著者名	尾上元規・水田貴士・大橋雅也・澤山孝之							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	財務省中国財務局 岡山県教育委員会							
所在地	〒730-8520 広島市中区上八丁堀6-30 TEL 082-221-9221 〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦2007年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
つしまいせき 津島遺跡	おかやまし 岡山市 いずみ町	33201	332011477	34° 40' 36"	133° 54' 53"	2003. 5. 6 ～ 2003. 5. 19 2005. 4. 1 ～ 2005. 9. 30 2006. 1. 1 ～ 2006. 2. 28	1,940㎡	中国財務局 合同宿舍津 島住宅建て 替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津島遺跡	集落 水田	弥生時代	堅穴住居 1・焼成土壇 1・火処 2・土壇13・水田3・溝19		弥生土器・石器・分銅形土製 品・人形土製品・ガラス小玉			
		古墳時代	土壇 1・水田 2・溝10		須恵器・土製円盤			
		古代			須恵器・緑釉陶器			
		中世	溝 3		白磁・土師質土器・備前焼			
要約	一部が国の史跡に指定されている津島遺跡の南西部の発掘調査。調査地の一角に弥生時代中期の集落跡を検出、周辺の低位部では水田が営まれていることが判明した。弥生時代の水田は3面を確認し、いずれも畦畔で区画されている。古墳時代以降は調査地の全面が水田化され、古墳時代前期の水田2面を検出した。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告206

津 島 遺 跡

中国財務局合同宿舎津島住宅  
建て替えに伴う発掘調査

平成19年2月28日 印刷

平成19年2月28日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発 行 財務省中国財務局  
広島市中区上八丁堀6-30

印 刷 山陽印刷株式会社  
岡山市富吉3098-1



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています